ヘヴィーオブジェクト 第三世代への道

不良兵士クウェンサーとヘイヴィアは、不真面目な態度の功績（？）が認められ、晴れて戦場から『左遷』された！

その赴任先は『クック追加諸島』。一年中常夏の青い海。オブジェクトの天才設計者の住まう人工の『楽園』で、周囲は第二世代オブジェクトが四機体制で守ってくださっている、世界で一番安全な地域だった。

戦地留学生と没落貴族の少年二人は、いよいよ俺たちにも幸運の女神が抱きついてきやがったぜ!と喜んだ……のだが、「……ちくしょう。何で俺達はいつもこんなのばっかり見つけてしまうんだ!?」

その『楽園』は、目的のためなら手段を選ばない非情の独立部隊『ユニコーン』に支配されていたらしい。その片鱗を発見してしまったクウェンサーとヘイヴィアは、戦地の最前線よりも過酷な作戦に挑み……！

不運な二人に、今後ラッキーエロ展開が来ることはあるのか!?

か-12-35

ヘヴィーオブジェクト 第三世代への道

鎌池和馬

電撃文庫 ¥590

9784048866248

1920193005905

ISBN978-4-04-886624-8
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価：本体 590 円
※消費税が別に加算されます

鎌池和馬（かまちかずま）

本日のレプリカント的観察日記。猿！　人間と似たような仕組みなのでわざわざ動物から観察する必要はないのかも……ですが、人間をモデルにした二足歩行ロボットを作るよりは簡単になるんでしょうかね？

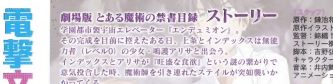
【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録（インデックス）①～㉒
とある魔術の禁書目録（インデックス）SS①②
新約 とある魔術の禁書目録（インデックス）①～④
ヘヴィーオブジェクト
ヘヴィーオブジェクト 採用戦争
ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影
ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝
ヘヴィーオブジェクト 死の祭典
ヘヴィーオブジェクト 第三世代への道
インテリビレッジの座敷童

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャーブ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アブラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。
http://www.sec.or.tv/

カバー／暁印刷



ヘヴィーオブジェクト 第三世代への遺 印刷/加印刷

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT

THE COMING OF THIRD GENERATION 第三世代への道

INDEX

000010 序　章

000012 第一章
天国に一番近い戦争ブローカー
>>クック追加諸島方面諜報戦

000100 第二章
地獄よりも辛い汚れ仕事チーム
>>アサバスカ方面輸送戦

000152 第三章
人間の欲を刺激する陰謀バンク
>>アマゾン方面砲撃戦

000336 終　章

【ブロードスカイサーベル】BROAD SKY SABER

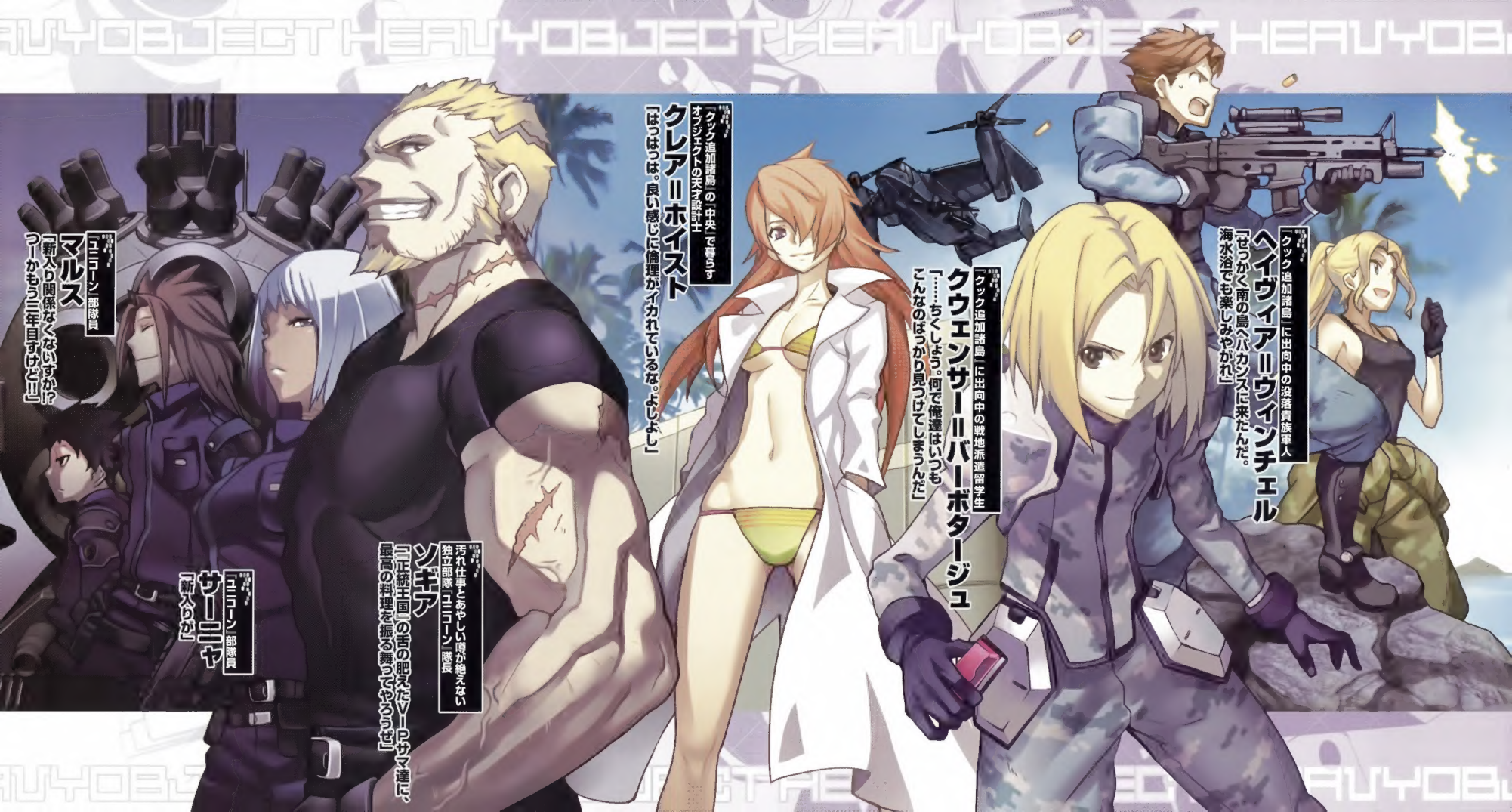
機体にニコラシカ王家の紋章、個人名を示す青と金のリボン装飾を持つ、ティミクシ＝ニコラシカ専用オブジェクト。

足回りは球体状本体の真下に、前後へ長いフロートが二本伸びている。その補助として、左右へ三本ずつ脚のようなパーツが装備され、強制的なブレーキの役割を担う。
動力のメインはエアクッション式で、パーツ換装なしで水陸両用を可能とする。主砲は球体状本体の前面から突き出された六門の砲とされている。後部には、まるで巨大な剣を背負うように、鉄塔にも似たユニットが取り付けられているが、その用途は不明。

この最先端オブジェクト「ブロードスカイサーベル」は、レーザービーム主体の「第二世代」であるが、ティミクシ自身は「ついに時代は「第三世代」を迎えた」と声明を発表している。

Designed by Hirokazu Watanabe(2725 inc.)

name / Stalvia-Nikolaschka
age / 14
sex / female
place of birth / Moscow, Ladoga
height / 150m
weight / 39kg
body size / 76.55.75(cm)
hair color / blonde
eye color / deep purple
belong / The house of Nikolaschka
post / a royal princess


「クック追加諸島」に出向中の没落貴族軍人
ヘイヴィア＝ウィンチェル
「せっかく南の島へバカンスに来たんだ。海水浴でも楽しみやがれ」
「クック追加諸島」に出向中の戦地派遣留学生
クウェンサー＝バーボタージュ
「……ちくしょう。何で俺達はいつもこんなのばっかり見つけてしまうんだ」
「クック追加諸島」の「中央」で暮らすオブジェクトの天才設計士
クレア＝ホイスト
「はっはっは。良い感じに倫理がイカれているな。よしよし」
汚れ仕事とあやしい噂が絶えない独立部隊「ユニコーン」隊長
ソギア
「正統王国」の舌の肥えたVIPサマ達に、最高の料理を振る舞ってやろうぜ」
「ユニコーン」部隊員
サーニャ
「新入りが」
「ユニコーン」部隊員
マルス
「新入り関係なくないすか!?つーかもう二年目すけど!!」

クリーンな時代のクリーンな戦争。

さてと、この戦争もいい加減に飽きてきたな。

そろそろ全部ぶっ壊しちまおうぜ。

――とある研究者のつぶやき

HEAVY OBJECT

THE COMING OF THIRD GENERATION

ヘヴィーオブジェクト
死の祭典

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

クリーンな時代のクリーンな戦争。

それ自体は悪い事じゃない。でも停滞するのは良くない。そうなって物事が上手く転がった試しなんてないんだからね。

今時の戦争はオブジェクトが支配する。それも、第一世代よりは第二世代の方が圧倒的に有利だ。もうそろそろ勝利を摑むための方程式みたいなものが厳密に割り出されて、戦争は現場そっちのけでボードゲームのように消化されるようになるだろう。

面白くないね。

勝利の計算は富の集約を示し、金融の停滞はお馴染みの腐敗を生み出す。

時代にしても戦争にしても、そいつはとてもクリーンと呼べたものじゃない。私は別に戦争肯定論者ではないし、正義のための戦いなんて失笑モノの免罪符を振りかざすつもりもない。だがこの世界から戦争はなくならない。形を変えるだけで決してなくならない。だとすれば、絶対に消える事のない戦争をいかに『クリーンな形』に持っていくかどうかで、この時代の質

ってものは決まるんじゃないかとは思っている。
できるだけ犠牲を少なくし、一カ所に淀もうとする勝利と富を最大限に攪拌する。
それこそが私の考えるクリーンな戦争だ。
しかしまぁ、既存のオブジェクトでは難しい。第一世代も第二世代も、すでに数値はほぼ割り出されている。金融取引プログラムと同じく、最適解を持つ者が淀みを生んでしまう。
新しい駒が必要だ。
組み上げられつつある最適解を根底から突き崩すような。
いずれどこかの誰かが達成するだろうが、いちいち待っているのも面倒臭い。私が完成させてしまうのが一番手っ取り早いかね。

さてと、この戦争もいい加減に飽きてきたな。
そろそろ全部ぶっ壊しちまおうぜ。

第一章　天国に一番近い戦争ブローカー　〉〉クック方面諜報戦

1

「もうお前達庇いきれん。ちょっと頭を冷やして来い」

今が一月である事を忘れそうな炎天下。

南半球、太平洋上の孤島でクウェンサーは軍服の袖を使って顔の汗を拭う。

「さっきっからバンバンバンバン何やってんの俺達？　魚に鉛の餌でも与えてるの？」

「射撃訓練なのに新品の弾丸使ってんだ。決算期が近いって事だろ。さっさとだぶついてる鉛弾を消費しねえと来年度の国防予算を削られちまうんだ」

クウェンサーの隣で、ちょっとは様になる格好でライフルを撃ちまくるヘイヴィアが、うんざりした調子で言った。

「また根拠もなく予想だけで語ってない？」

「テメェみてえなド素人にまでライフル渡しているのが証拠だよ。つまり『宿題』はそれだけ溜まってやがる。くそ、今日のノルマは何万発あるんだ？」

クック追加諸島。

『正統王国』の領地の一つ。最小サイズの『安全国』と呼ばれるカテゴリーの一つ。

太平洋に浮かぶ島々の事だが、天然の陸地は中央の小さな島しかない。というより、元々あった諸島の端にある島の周りを徹底的に開発したというのが正しい。その島の周囲に点在しているのは、海上油田にも似た人工の陸地だった。各々の島は『情報同盟』のマイアミのように長大な幹線道路状の橋で連結している。島々の大半はオブジェクト関連の実験棟やスパコンの保管庫であり、兵士全員の生活空間は島の一つだけで賄われていた。

クウェンサーやヘイヴィア達がいるのも鋼の大地。手すりから身を乗り出し、無線電波で動き回るボートの上に設置されている的に向けて先ほどからライフル弾を叩き込んでいる訳である。

度重なる小さなミス。

軍上層部を苦い顔にさせる功績の数々。

どうもそれがセクシー上官（称号）フローレイティアが押さえておける範囲を超えたらしく、二人揃って第三七機動整備大隊から別部隊へ『出向』させられていた。

世間一般で言う左遷、窓際送り、干すといった現象である。

「人類が勝ち得た平和へようこそ」
やる気ゼロでカービン銃を撃っている金髪の女性が話しかけてきた。
迷彩服の上着は完全に脱ぎ、上半身はタンクトップ一丁だった。暑さで不要になった上着は腰に巻きつけてある。発砲音のたびにイロイロと揺れて楽しい絵面になっていた。
「こんな所まで飛ばされるだなんて、一体何やってきたの？」
「イケメンが派手に活躍し過ぎて嫉妬されたの」
「ヤバいよね、それ。一番早死にするタイプじゃない」
冗談で言ったのに真顔で答えられてしまった。
思わず息を呑むクウェンサーとは正反対に、弾詰まりを起こしたヘイヴィアがテレビゲームのコントローラーを投げつけるような調子で叫び声を発する。
「ちくしょう!!　ちまちまちまちま面倒臭せえな！　こんな調子じゃ一年経っても終わらねえよ。誰か『クロコダイル』持って来い!!　ガトリング砲でも使わなきゃ無理だ!!」
「『クロコダイル』は二〇ミリっしょー？」
金髪のタンクトップ女性はニヤニヤと笑いながら言う。
こうやって精神をすり減らされていく兵士を見るのにも慣れたのだろうか。
クウェンサーは首を傾げて、
「そう言うアンタは何でここに？」

「あたし結婚詐欺師のジェニーリアちゃん。よろしくね！」
「……、うあー」
「『貴族』の血統を詐称して荒稼ぎしていたんだけどさ。まさかバーで出会った貯金箱が軍上層部のバカ息子だとは思わないじゃん？　おかげで大目玉よ。で、『最も過酷な戦場』を転々とさせられているって訳」
「へいへいへい！　ここが世界で最も過酷な戦場だって？」
アサルトライフルを分解して詰まった弾丸を取り出そうとし、熱した銃身で指に火傷を負いながらヘイヴィアが割り込んでくる。
「そういうのはあれだろ。さっさと消えてほしいヤツばかりを集めたチームを作って、対テロ作戦なんて名目で山奥に連れて行く。でもって、わざと間違った戦術情報渡して悪党のアジトを襲わせる。そうすりゃ互いの実力差なんて関係なく、消えてほしい味方が全員戦死してくれる」
「それじゃあ遺族に年金払わなきゃいけないね。今時の上層部は節税だって気にしているものなのよ。自分が無駄遣いする分以外は」
「一年中常夏の青い海。オブジェクトの天才設計者の住まう島。周囲は第二世代が四機体制で守ってくださっている、世界で一番安全なこの世の天国だぜ。ここのどこが過酷なんだっつの」
「平和だからやる事なくてね」

ジェニーリアはノルマとしての発砲を海へ繰り返しながら、

「軍に嫌われる跳ねっ返りってさ、大体何かしらの強い個性を持ってる訳じゃない？　子供は撃ちたくないとか、間違った上官を止めるのは部下の仕事だとかさ。そういう思想はね、この島にいるとあっという間に腐っていくの。だって何もやる事ないから」

「……」

「最初の数ヶ月は錆びていく自分に怯えてね、自主練とかで研ぎ直そうとするんだよ。でも駄目。間に合わない。心はもちろん、体だってグズグズになる。美味しい食事にエアコンの効いた私室、テレビゲーム、バーカウンター、上等な葉巻がどっさり。……味わっちゃったらジャングルだの砂漠だのには戻れないよ。ナポレオンの時代にはネット通販はなかったけどさ。ナポレオンだってネット通販覚えちゃったらもう一八世紀だの一九世紀だのには帰りたくなくなるでしょ」

そういう意味での過酷。

クウェンサーとヘイヴィアは、自分達が送り込まれた場所の本質をようやく分かってきた。

「……つまり、この島って体の良い自主退職を促すトリガーって事なの？」

「窓際部署ってそういうもんだよね。上の命令で首を飛ばすと、その分多くの退職金払わなきゃならないから。最低賃金で済ませる努力が必要って感じかな。だからここにいるのは三パターンだけ。錆びていく自分に怯えて無駄な努力を続けるか、その錆が体の芯に届く前に退役を

考えるか、あるいは錆びても良いから国の税金で食べていこうと思うか」

「そんなんで大丈夫なのかよ？」

ヘイヴィアは目線で『中央の島』を示し、

「『正統王国』の中でも有名どころの設計士が集まっているって話じゃん。不良軍人を腐らせるためになんて使っちゃって良い訳？　もっと『さいきょーのとくしゅぶたい』とかで固められてるもんだと思ってたぜ」

「いるよー。『なぞのせいえいぶたい』」

ジェニーリアは適当な調子で言う。

「ナイトエッジ小隊。（笑）って感じだよね、きゃーかっこいー。ま、連中が元々きちんと守っているから、私達みたいな窓際組はより一層いらない感を押し付けられる仕組みなんだけどね。ナイトエッジ小隊に関しては、錆びるの防止するために、数ヶ月ごとにメンバーを入れ替えているみたいだよ。バカンス感覚なんじゃない？　でもあっちはヤバい。マジでヤバい。こんな感じで話しかけるとナイフで喉を裂かれかねない」

「そいつら見たよ。この四〇度の炎天下で頭の先まで真っ黒な覆面で覆ってんだ。優等生過ぎてまともな会話ができるとは思えねえぜ」

「でも軍はそういう『文句一つ言わない』優等生を求めているのよ。優等生でも劣等生でも同じ給料が税金から払われる訳だしね」

「けっ、『南米の砂漠に消えた伝説のホワイトベアー、第一一五独立近衛中隊』じゃねえんだ。上官の命令に文句の一つも垂れねえ兵隊なんて異常だぜ」

「ボルガ方面の精鋭だっけ？　腹黒政治家から幼い王女を守り続けた騎士団とか何とか。なんか映画化するとかっていう話聞いた事あるけど」

「戦争の悲劇っていつでもエンタメの題材にされるよな。……とはいえ、映画化はステイビア王女の大衆人気もあるんだろうけどよ。モスクワの宮殿前じゃ、王女サマのブロマイド売りが集まる額縁通りなんてのもあるらしいぜ」

「みんなロリコンなの？」

「それ、ボルガの広場で口に出したら撃たれてるぜ」

クウェンサーとヘイヴィアは無駄口らしく話を脱線させていく。その軌道を修正するように、ジェニーリアはこう付け加えた。

「ま、私達不良軍人っていうのは生きていても税金を無駄遣いするし、死んでも遺族年金を払わなくちゃいけない厄介者って訳よ。だから上手に組織から弾き飛ばしたいって思う上層部もいるの」

「税金節約したいなら丸々太った上層部の心臓を一突きすりゃ良いんだ」

「その無駄口が削減のターゲットにされているって気づきなさい」

……何ヶ月ここにいる羽目になるんだろ、いや何ヶ月で済むのか？　とクウェンサーは適当

に考えながら海に向かってライフルを撃ち続ける。賽の河原ではないが、『完璧に何の役にも立たない作業を延々とやらされる』というのも、兵士の精神を削る機能の上乗せを狙った嫌がらせなのだろう。中世の牢獄なんかでやってた方法に似ている。

当然ながら、クウェンサーにはクウェンサーの、ヘイヴィアにはヘイヴィアの目的がある。そのために戦争に参加している。

なので上層部の嫌がらせで僻地に飛ばされている場合ではないのだが、

「……ここ天才設計士が集まっているって聞くし、ヘイヴィアはともかく俺はそんなに痛くも痒くもないんだよなー。むしろ良い勉強になりそう」

「バッカ！　最高機密扱いだぜ。接点なんかねえよ！　女風呂を覗きに行くのとは訳が違うんだぜ!!」

「そういう時はベッドで話を聞くのよ。何ならレクチャーしようか？」

たとえ火星に飛ばされたって口を慎まない劣等生達は今日も元気だった。ライフル弾の連射よりも大量の無駄口を叩いていると、無線機から小さなノイズが走る。

『クウェンサー＝バーボタージュ。第三七機動整備大隊から出向中のクウェンサー＝バーボタージュ戦地派遣留学生。研究員からの指示により、「中央」へ至急向かうように』

「……何だ？　校長先生のお説教か？」

「『中央』って女子校みたいな天才少女の集まりなんだろ。冗談じゃなくてマジで女子率一〇

○%らしいしよ！　ちくしょう！　またこの色男を差し置いてインテリモヤシのご指名だぜ!!
世の中はかなり間違ってる。神様の野郎が嫉妬でもしてんのか!?」
「いきなり寝るチャンスが来たじゃーん。ま、護衛担当のナイトエッジ小隊も頭を抱えてるだろうけど。当然ながら気をつけてねん」
「こわーい教育係のナイトエッジさんに？」
「ここ何て呼ばれているか知ってるの？『託児所』だよ」
ジェニーリアはニヤニヤと笑いながら、
「それは私達を指しているんじゃない。主役は『中央』の天才設計士達。彼女達も彼女達で軍上層部の手に負えなくなってるって訳。天才だから手放したくない、でもおっかないから近くに置いておきたくない。そんな連中をかき集めて一ヵ所に留めておこうとしたのが、ここクック追加諸島の天国って事」
「……つまりあの建物の中は変態のオンパレードですか？」
「社会通念を個人の才能でねじ伏せられるぐらいのね。最高機密扱いの施設の中に、アンタみたいな新入りをお招きできたのが良い証拠じゃない。手続きなしであの厳重施設に近づくなんてさ、普通なら機密漏洩防止って名目でナイトエッジ小隊に首を刈られてるよね」
「全裸に白衣で街を歩きますみたいな変態が良かったなあ。女の子限定で」
「またまたー？　実際に見たら腰を抜かすくせに」

2

護衛を除けば、中央の島には三〇人前後の天才少女達が生活しているらしい。

外から見れば巨大な軍用コンクリートの建物なのだが、共同生活の概念は希薄らしい。理由は変態だから。社会の歯車として機能できるような人格の持ち主なら、そもそもこんな『託児所』に送り込まれる必要もないらしいのだ。なので、天才少女達の生活スペースは私室を中心とし、電子顕微鏡や実験室などいくつかの共用スペースを使う時だけ、長い通路でメンバー同士がすれ違うような生活を送っているらしい。

……らしいらしいばっかりなのは、情報源であるジェニーリアが『中央』の中の様子を実際に確認した訳ではないからだ。どんな人脈をどんな方法で構築したかは知らないが、彼女も他の誰かから聞いた話というのである。

「チッ」

全面戦争にも耐えられますといった風情の分厚い扉の前にクウェンサーが立つと、真っ黒な覆面で顔を覆ったナイトエッジ小隊の皆さんに露骨な舌打ちをいただいた。

「銃器禁止、刃物禁止、爆発物禁止、薬物禁止、細菌禁止、その他色々お断りだ。その鼻っ柱と貧相なナニもへし折っておきたいところだな。使い物になるとは思えないが」

「襟首を摑むこの指まで毛むくじゃらな手を離してくれよ。何だこりゃ、アンタ宇宙パワーでも浴びたミュータントか？　この汚い汗を持ち込むのが一番危険なんじゃないの？」

調子に乗ったら頬にグーまで頂戴した。

「粋がるなよ税金泥棒。さっさと中に入ってトラブル起こして来い。それで遠慮なくクズを射殺できる」

クウェンサーは中指を立てて建物の中に入る。

デパートやショッピングセンターとは違うので、案内板のようなものはない。図書館の本棚、学校の下駄箱。長い通路と部屋が交互に並ぶ構造は、そんなものを連想させる。

毛の短い絨毯に、淡い間接照明と、フォーマットはホテルのようだった。どれが私室でどれが実験室なのか、案内板がないためクウェンサーには判別できない。住んでいる人間にさえ分かれば良い、という思想がありありと伝わってくる。

「……それでおちこち物が積まれているんだな」

高級ホテルと呼ぶには、通路には物が溢れすぎている。あるいは、ワゴンや清掃用具の並べられる清掃時のホテルならこんなものか。

単純にゴミが積んである場所もあれば、天井から紐でダーツの的がぶら下げられている場所もある。トンボやカブトムシに似た小さなロボットが壁に張りついている一角もあった。何が必要な物なのかは分からないが、迂闊に整理すると怒られそうな感じだ。

「クウェンサー君。クウェンサー＝バーボタージュ君」

『図書館の本棚』のどこかから、女性の声が飛んできた。クウェンサーが音源の方へ向かってみると、ドアの一つが開いていて、二〇代の女性が通路に立っていた。

異様な風貌だった。

足首辺りまである長い白衣に、派手な色のビキニの水着。髪は茶色のロングヘアで、特に束ねもしないで広げっ放し。白衣は汚れや薬品などの付着に気づきやすくし、身を守るためのものだったと思うが、一体何を意図してコーディネートしているのか想像できない格好だった。伝説のビキニアーマーをほうふつとさせる。

そしてクウェンサーは大声で叫んだ。

「天才『少女』の集まりって言ったじゃん!!」

「ありゃ？　第一にそこへ喰いつくかね。……えーとほらほら泣くな泣くな。ほーらおっぱいだぞー？」

「そこは喜びますけど!!　結婚とか恋人とか絶対無理だがとりあえず一発ヤリましょう!!」

「はっはっは。良い感じに倫理がイカれているな。よしよし」

鷹揚に笑いながらも白衣の内ポケットから的確にスタンガンを抜いて威嚇する女性に、クウェンサーはようやく冷静になって問いかけた。

「あなたは？」

「クレアだよ。オブジェクト設計士のクレア＝ホイスト。君の憧れと聞いているが」
「……、」
「ま、すぐには実感できないか。操縦士エリートと違って、設計士の顔は隠されるのが常だからな。そちらの方が対テロとしては順当なんだが」
何と言って良いか分からないクウェンサーに、クレアは親指で開いているドアを示し、
「ついてこい。呼び出したからには話がある。君にとっても有益な話になるはずだ」
室内は一〇メートル四方といったところか。
物は多くない。ベッドに机。部屋の隅には、何か複雑に折ったプラスチックの板のようなものが置いてある。コックピットを模した、ロボットゲーム用の大型コントローラーに似ていた。他にはいくつかの棚。棚にはオブジェクトのミニチュアがいくつも並べられていた。
「動きはしないよ」
クレアが言う。
「ただし構造は本物とほぼ同一だ。このサイズになると動力炉が機能してくれなくてね。リアルさを追究しすぎたら根本的なところでコケてしまった」
「ここで、作ったんですか？」
「どうして？」
「仕事場、なんですよね？　もっと使い方も分からない道具で溢れているもんだと思っていた

ので」

「素材関連の研究やってる人なら、そういうのたくさん持っていそうだけどね。近頃は常温超伝導素材の材質強化がアツいらしい。合金こねたりワインを煮たり大忙しだ」

クレア＝ホイストは小さな冷蔵庫を開け、小さな紙パックのジュースを取り出しながら、

「設計士なんてパソコン一台あれば何とかなるよ。だから頭脳を求められる。もっとも、そこのノートパソコンは別室のスパコンと繋がっているから、随分楽をさせてもらっているがね」

しかし机の上にはノートパソコンが二台ある。

指摘するとクレアは笑って、

「片方は趣味だよ。じゃなけりゃこの水着はどうやって手に入れるの？　軍のセンスなんて絶望的じゃない。……まぁ、と言っても使い道はネット通販よりも株や先物取引に偏っているけど」

「……設計士って、山ほど金が手に入るんですよね？」

「人は常に上を目指す。その程度の山じゃ納得できなくなるぐらいにね」

画面の中では、何かの取引の数字が並んでいた。仕事用のパソコンとは区別してあるとはいえ、そもそもオブジェクトの設計士なんて最高機密情報を持った人間が、自由にインターネットを利用できるのだろうか。

「不自由なインターネットならできるんだよ。回線は一度、軍のチェックポイントを経由する。

ラグは短いが、取引には不利に働く」
「……これは何をしているんです？　株か何か？」
「雲だよ」
「天気予報？」
「いやいや。雲だって立派な資源だよ。水資源。海水をろ過して真水を運んでくれる。普通は海で生まれた雲が風で運ばれ、山にぶつかって雨を降らす。しかし今では人工的に降雨量の調節ができるからね。川の周りで文明が発達するように、雲の通り道で文明が発達する時代が来ようとしている訳だ」
　そうなるとね、とクレアは呟き、
「当然ながら競争が生まれる。見てごらん。これはアフリカ南端のマーケットだ。空を流れる雲の量は一定だが、どこで雨を降らせるかは自由だ。地域Ａで降らせれば、その先にある地域Ｂが枯渇する。雨が降れば雲はなくなるからね」
「……そうか。世界的な河川と同じで、雲の流れは国をまたぐ事も……？」
「では自然な流れとして、地域Ａは諦めて地域Ｂに雲を流すか。だが水がなければ干上がるのはどこも同じだ。飲み水も食糧もない。人はやせ細っていく。そして手元には雨を降らせる技術が。さあ指を咥えているのは正しいか？　人命と自然の摂理。守られるべきはどちらだ？」
「……、」

「難しい問題だったかな。私達の答えも『適温適量』ってヤツさ。ふわっとしてる。地下水脈の分布と並行して効率良く水を撒く仕組みを作り上げようとする者もいれば、稀少な植物がある地域へ重点的に降らせようとする者もいるし、保水性の高い場所を選んで降らせようとする者もいる。企業と組んでデカいタンクやプールを造ろうとしている者もいるな。そういった連中の複雑な動きが、水資源マーケットという金の流れを作り出している訳さ」

まあこっちについては気にしなくて良いよ、とクレアは言う。

オブジェクトの設計と資産運用。

どちらにしても、彼女の武器はパソコンだけらしい。

「じゃあ、クレアさんは純粋な設計のみで？　躓いた時に自分で新しい素材を作ったりはしないんですか」

「必要ならその道のプロにリクエストするよ。そっちの方が早いし。そもそも机上の空論で良いなら、スパコンで計算できるんだよね。コンピュータで設計図の穴を埋めてくれる理想の新物質を計算して、それをメールに貼り付けて他の部屋にいる専門家の手で形にしてもらう。そんな感じかな」

クレア＝ホイストは紙パックのグレープジュースをクウェンサーに一つ渡すと、自分の分のパックにストローを刺して、机の近くにあった椅子へ座る。

「頬に当てとけ。その腫れ、やっぱりナイトエッジ小隊にやられたかな？」

「ヒス野郎に武器を持たせるのって怖いです」
「馬鹿に武器も同程度だよ」
クレアは適当に答え、
「ま、あれもタイプの違う同類なんだ。優良ではあるんだが、健康マニアがミネラルウォーター飲むみたいにパカパカ拳が飛ぶもんだから、今時のスマートでクリーンな軍の手に余るって判断された訳。嫌われ者同士、仲良くやっていこうではないかね」
……徹頭徹尾『託児所』なんだな、とクウェンサーは思ったが口に出さない。
ちなみに紙パックのジュースを頬に当てても大した効果はなかった。さっさとストローを刺す事にする。
「実を言うと、君がここにいるのは偶然じゃないんだ」
「え？　そりゃまあ、あなたの指示でここに呼ばれた訳ですから」
「そっちじゃない。君達が派手にやりすぎて干されたのは私の意思じゃないが、どこへ飛ばされるかについては私が介入した。こうして話す場が欲しくてね」
「……、」
言葉にするのは簡単だ。
が、実際にそれが可能かどうかさえクウェンサーには判断できない。
「では本題に入りたいんだが、ぶっちゃけどうだった？」

「何がですか」
「オブジェクト、さ。第一世代とか第二世代とかあっただろう」
「〇・五世代なんてのもありましたよ」
「私達はあれをオブジェクトだなんて認めちゃいないよ」
クレアは鼻で笑う。
彼女はテーブルの上のペン立てから、レーザーポインターを取り出した。その赤い光点で、棚に並べてあった模型の一つを指し示す。
「私が特に知りたいのは、これだ。君達も良く知っているモデルじゃないかな」
「……『トライコア』？」
かつて、クウェンサー達がジブラルタル海峡で撃沈したオブジェクトだった。巨大な動力炉を三基も搭載しているのが特徴で、石油の採掘と運搬の能力まで備えていたものだ。
クレア＝ホイストはレーザー光をくるくると回しながら、
「そいつは私の設計じゃないがね。深海に探査艇を送って得た情報を元に組み立てた。完成度はせいぜい七〇％未満って感じかな。正直、ちょっと不満がある。ちなみにあの海域は『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』の探査艇ラッシュと化しているな。探りを入れたり妨害したりで大忙しだ」
「これが、何だって言うんですか？」

「分からないか？」

クレアはグレープジュースをストローで吸ってから、

「現代の戦争はオブジェクトの数で決まる。性能でも差が出るが、それより数の方が圧倒的だ。一対三ならもうおしまいさ。戦わないで撤退するのが最良。にも拘らず、だ」

「あ」

「『トライコア』は一機で三基の動力炉を積んでいるんだよ。普通にオブジェクトを三機作って運用した方が効果的なはずなのにね。そして実際に『トライコア』は海の藻屑となった。……いや、机上の空論で良ければこういうゲテモノは浮かぶんだよ。だが実際に建造される事はまずない。軍っていうのは大勢の意思によって動かされるからね。そして国民の税金でプロジェクトは動く。ここまでのゲテモノを提示したって、普通ならどこかでストップがかかる」

「なのに、『トライコア』は実際に動力炉を三基も使って、たった一機のオブジェクトを構成している……」

「これが鍵だ」

クレアは笑う。

「第三世代への道、と呼ばれる鍵。『トライコア』は差し詰め二・五世代といったところだろうが、こいつのユニークさは戦場を変える可能性を孕む。実際、潰れたオブジェクトの解析作業なんてどこの軍でも行っているが、『トライコア』の注目度は異常だよ。多分、各勢力の第

一線にいる設計士達はみんなこいつに注目している。……つまり、戦争を支えるオブジェクトの形がそろそろ変わるかもしれないんだ。次の次ぐらいに設計が始まる機体からは、もう明らかに影響が出始める可能性もある」

第三世代。

今ある第二世代でさえ悪魔のような功績を残す事を『身をもって』理解しているクウェンサーとしては、手放しでは喜べない情報だった。これは肝試しと同じだ。早く設計士になって驚かす側に回りたいと強く願う。

しかし一方で、

「……でも、『トライコア』については実際に探査艇で調査を続けているんですよね？　俺に何を？　俺が知っているような情報で、そこの模型の完成度を上げられるとは思えませんけど」

「いやいや違う違う。尋ねたいのはさ、単純な感想なんだよ」

「感想？」

「戦っての感想」

クレア＝ホイストは紙パックを額に当てて、心地良い冷たさを味わいながら、

「私達が予想している第三世代っていうのは確かに画期的だ。でもそれが頭でっかちな設計思想に振り回されて、実際の戦争で役に立たなくなってしまえば意味はない。そこで尋ねておきたいんだよ。『トライコア』はどうだった？　動力炉を三基も備えるほどの働きをしていた

か？」

「なるほど……」

クウェンサーは軽く天井へ目をやり、当時の事を思い出そうとする。

「オブジェクトはどれも悪魔みたいな連中ばっかりですけど、やっぱり重量がネックになっていたように思えますね」

「ほうほう」

「そもそも海上でなければ運用できないっていうのもそうですし。『ベイビーマグナム』からの砲撃も完全に回避できずに、装甲の特に分厚い部分にわざと当てる『防御』主体の対応をしていました」

「スピード型の戦術には難がある、と？」

「でしょうね。そりゃトップスピードは出せるんでしょうけど、瞬発力がない。その分、動力炉の出力を活かした一撃必殺を狙うべきでしょうけど」

「だが報告にはこうあるな。『ベイビーマグナム』は削り取られるように破損を広げていった、と」

「単純な戦闘においては、確かに帯に短し襷に長し、かもしれませんね」

「なるほどねえ……」

クレアは椅子の背もたれに体重を預けながら、

「やはり石油関係の施設を丸ごと搭載するのに相当の無理を重ねていたのかな。こいつは気を

つけなくちゃならない項目だね」

「あの……第三世代って、やっぱり『トライコア』みたいに動力炉をいくつも載せるタイプになるんですか？」

「いいや。むしろ、その問題を解決できなかったから、『トライコア』は二・五世代と呼ばれているんだよ」

「……？」

疑問が生じた。

クウェンサーはそれを口に出してみる。

「じゃあ、そもそも第三世代っていうのは？」

「君はすでに見ているはずだよ」

クレア＝ホイストは楽しそうに言う。

「そしてこれからの新しい戦争は、ひょっとしたらそちらが主流になるかもしれない」

3

そして一方その頃ヘイヴィアは大層ご立腹だった。

「気に入らねえ。気に入らねえ気に入らねえ気ーにー入ーらーねーえー!!」

バカバカバカバカ!!!!!!　とアサルトライフルで海上の的を蜂の巣にしているヘイヴィアを眺め、結婚詐欺師のジェニーリアがケラケラ笑いながら、

「おーおーすごいすごい。あっという間に在庫の弾が減っていく。みんなー、ちょっとそこのヘイヴィア君怒らせちゃってー」

「こうして汗水垂らして無駄弾撃っている間もあの野郎はエアコンの効いた部屋で夢に向かってレクチャー中だ！　納得がいかん！　しかも天才少女の集まりだって。超納得いかん!!」

「……いや全員が全員天才少女ってカテゴリでもないみたいなんだけどね。あと別に天才少女だからって顔まで良いって法則性は特にないと思うんだけど」

「そういう女の子が出る場面っていうのはヘイヴィア様の出番でしょ！　何故それが分からねえのか!?」

「あのー、私も一応女の子なんですがー」

「ファック、ファーック!!」

的がズタボロになり、ボート上の支柱から完全に切り離されたのを見て、ヘイヴィアは銃撃を止める。代わりに無線機のスイッチを入れて叫ぶ。

「聞こえてんのかナイト様!!　適材適所でいきませんかねいい加減に!!」

「あの建物の中は完全に遮断されてるよ。機密情報が外に漏れるのを防ぐためにね」

4

「そうそう」
紙パックの中のグレープジュースを飲み干したのか、パックを握り潰しながらクレア＝ホイストは言う。
「ところでもう一つ、オブジェクトについて聞いておきたかったんだ」
「何ですか？」
「『ベイビーマグナム』」
クレアは懐かしい名前を口に出した。
しかし続く言葉に不穏な色が混ざる。
「第三七機動整備大隊の戦績は聞いている。しかしそれは必ずしも『ベイビーマグナム』単体の戦績とは限らない。そういう認識で構わないかな？」
「それは……」
「だとすると、ちょっと困る訳だ」
クレアは小さく息を吐いてから、
「あれは主流から外れた第一世代ではあるものの、それでも一応私も設計に関わっていてね。

言ってみれば、作品とは名刺代わりなんだよ。……そうなると、『ベイビーマグナム』が負け続けているという情報はあまり面白くない。このままだと、名刺を更新する必要が出てくる」

「お姫様はちゃんとやってますよ！　そもそも『ベイビーマグナム』がなければ俺だって今日まで生きていません。黒幕さんが描いたいくつかの陰謀が実現して、世界だってメチャクチャになっていたかもしれない！」

「だがそれを判断するのは軍のお偉方だ。オブジェクトの勝敗だけで戦争が終わり、またそうなるようなシステムを構築、維持したがっている、ね。私も不本意だが、馬鹿と言っても客は客だ。評判に傷がつくようなら対策を取らなければならない」

「……設計士っていうのは、一〇〇〇人規模の大隊に直接干渉できるほどの力があるものなんですか？」

「だから君だって憧れているんだろう？　金と力ってヤツに。『ベイビーマグナム』の設計に携わったのは私だ。その私が『ベイビーマグナム』に不備があると報告すれば、少なくとも検査のために最前線から退く事になる。半年？　一年？　次の工作を行うには十分な時間を稼げる。元々時代遅れの第一世代だ。失脚させて予算を第二世代に回したがっている高官は何人もいる」

「……、」

「それが嫌なら発破をかけてくれ」

握り潰した紙パックをゴミ箱へ投げ入れながら、世間話のようにクレアは言う。

「大きなプロジェクトには、君達が思っているより多くの人間の名誉に関わっているとな」

話は以上だ、と勝手に締めくくられた。

興味が失せたのか、元々の社会性の問題か、クレアは特に見送りなどをするつもりもないらしい。一人で部屋から通路へ出たクウェンサーは、わずかにため息をつく。

オブジェクトの設計士。

『平民』であっても下級『貴族』を上回るほどの大金を入手できる、数少ない勝ち組の片道切符。

……その割に、何だか窮屈そうな印象を否定できなかった。もちろんクレア＝ホイストは『設計士の中でも格別に問題ありとみなされているから』こんな島を与えられているのだろうが……。

（それは逆に言えば、たとえ設計士になったって、軍のお偉方を怒らせないように気をつけて生きなきゃならないって訳だよな）

制限つきの自由。

歯車の一部としての権威。

冷静になってみれば『大人の世界』としては順当な仕組みだし、何より上下関係が厳しく機密情報も多く含む『軍の構造』の中心部だ。個人の意思でのびのびとやっていけるはずがない。

「……何だかね」

かと言って、設計士という夢に幻滅するほどではない。というより、設計士を諦めて他に何の道があるのか、という根本的な問題にぶち当たる。結局、不自由だろうが何だろうがまとまった金が欲しい事は変わらない。『平民』がこの世界でスポットライトを浴びられるチャンスは限られているのだ。

しかし。

それより何より、クウェンサーが徒労感に打ちのめされている理由は他にある。

設計の第一人者であるクレアと生の会話を交わした。実際の仕事場も見せてもらった。ミニチュアのオブジェクトに触れる機会もあった。

にも拘らず、得られるものが何もない。

いや、実際にはあったのだろう。宝の山が。第一線で働く人間ならすぐにピンとくるデータ群が。だがクウェンサーはそれを目の当たりにしても収穫に結び付けられない。料理の味の違いも分からない知ったかぶりと同じように。……所詮、今の彼は『学生』というアマチュアであり、設計のプロには達していなかったのだ。

その実力差にたじろぐ。

山の頂上だと思っていたものが、中腹にある小さな突起に過ぎなかった事を思い知らされたような気分にさせられる。

「帰るか」

ポツリと呟いて、クウェンサーは通路を移動する。図書館の本棚や下駄箱のような構造の建物内を進んで出口を目指している内に、口の中がベタベタしてきた。おそらく、先ほどクレアにもらったグレープジュースのせいだろう。

遮蔽物のない直線的な通路が続く建物内は、遠くのものもすぐに目につく造りになっていた。建物の角に当たる部分に、コーヒーの自販機がある事に気づく。

どうせ外に出たらアサルトライフルを使って在庫の弾丸を消化する仕事に逆戻り。あのナイトエッジ小隊が目を光らせているところを見ると、水なんていつ飲めるか分かったものではない。

ついでにアイスコーヒーか何かで口の中を整えてから外へ出よう、と思い、クウェンサーは建物の角にある自販機の方へと足を向ける。紙コップ式の古い型のようだが、天才少女達（一部除く）には好評のようで、使い込まれた機材特有の汚れが目立つ。

硬貨を何枚か入れ、紙コップにアイスコーヒーが注がれるのを待っていると、小型の無線機からノイズが聞こえてきた。

それはすぐに人の声になる。

『テメェクウェンサー！　いつまでエアコン効いた部屋ん中でサボってやがるんだ!?　まさかマジでベッド交渉狙ってんじゃねえだろうな？　テメェにゃ似合わねえよ！　右手を使って無駄弾の量産でもしていやがれ!!』

「……帰ったらあいつ一発ぶん殴ろう」

静かに誓うクウェンサーだが、そこでふと眉をひそめた。

この建物はオブジェクト設計の機密情報の塊だ。当然、データの出入りにもかなり気を配っているはずである。現にクレア＝ホイストのネット回線も軍が監視しているという話だった。クウェンサーの無線や携帯電話が入口で没収されなかったのは、当然、電波を遮断する素材で建物が覆われているからだと思っていた。

いや、実際そうなのだろう。

彼はゆっくりとした動作で壁を触る。質感は変わらない。しかしその手をコーヒーの自販機の裏に入れると、明らかに違和感があった。

「……遮断用の建材を抜き取ってから、新しく塗り直している」

空白の地点。

抜け穴。

それが何を意味するのかを考え、クウェンサーはポツリと呟く。

「誰かが機密情報を外へ漏らす仕組みを作っているっていうのか？」

5

風が強くなってきた。

相変わらずの『在庫処分』をしているヘイヴィア達に、真後ろから黒い覆面を被った男が怒声を吐きかけてくる。

「さっさと済ませろ税金泥棒！　クズどもめ。ノルマが終わらない限り、嵐が来ようが日付をまたごうが仕事を続けてもらうからな!!」

チッ、とヘイヴィアは舌打ちして、傍らの結婚詐欺師に呟く。

「『誤射』でやっちまうか」

「一八〇度真後ろに弾が飛んでいく射撃テクがあったら、アクション映画の監督に情報売れると思うなあ」

ナイトエッジ小隊は『監視任務』に就いているのではなく、単にすれ違った人間全員に罵声を浴びせたいだけらしい。さっさとその場を離れてどこかへ立ち去ってしまう。

その背中にきっちりと中指を立てたヘイヴィアだったが、そこで気づいた。

「おい。あいつらナイトエッジ小隊って話だったよな」

「やりすぎ要人警護で有名なね。評議員達は暴力的過ぎて支持率が下がるって口を尖らせているみたいだけど。だったら戦地の視察なんてすんなよって話だよねえ。邪魔邪魔」

「……とてもそうは見えねえぞ」

「？」

眉をひそめるジェニーリアに、ヘイヴィアは親指で自分の首を刈るような仕草をして、
「野郎、この暑さで参っているのか、黒い覆面ちょっと持ち上げてただろ。それで見えた。首回りをぐるっと囲むような縫い痕。ありゃ第二〇二機動支援中隊。ユニコーンなんて通称で呼ばれている連中のサインだぜ。……人隊前の人生を『殺して』新しく生まれ変わったって決意の表れらしいがな」
「あれが、ナイトエッジ小隊じゃなくて、別の部隊だって？」
ジェニーリアは怪訝そうな声で、
「そりゃユニコーン出身の兵士が配置換えでナイトエッジ小隊に来たんじゃなくて？　タトゥーで部隊の団結高めようとしている連中も、それで結構後悔したりするらしいし」
「……あいつだけならな」
ヘイヴィアはアサルトライフルからスコープを取り外し、ジェニーリアに押し付ける。
「向こうのあいつと、橋でジョギングしているあいつ。首回りを見てみろ。同じ縫い痕のサインがあるぜ」
「……ホントだ」
「テメェの言う通り表向きは配置換えかもな。だが人員の比率が偏りすぎてる。実質的に部隊の名前を変えているだけで、あいつらはユニコーンのままだ」
「その、ユニコーンってのは何なのよ？」

「黒い噂が付きまとう、ってヤツだ。そもそもの任務が敵ライフラインの破壊。支援物資を積んだトラックを軍も民も関係なく吹っ飛ばしたり、橋や電話の基地局など公共施設の破壊、ジャミングによる通信の遮断。クリーンな戦争の舞台裏を這いずって荒稼ぎしてる」

ヘイヴィアはジェニーリアからスコープを取り上げ、再びアサルトライフルに取りつけながら、

「オブジェクト同士のクリーンな戦争で味方を勝たせるために、味方の意向すら無視して勝手に破壊工作を進める独立部隊だ。表に出しにくい性質から戦場に『潜伏』する事が多いんだが、その過程で『資本企業』の工作員なんかと結びついてサイドビジネスに精を出してるって疑惑もあるぐらいだぜ。戦争国で発生しているいくつかの金鉱襲撃や武器売買なんかに噛んでいるってな」

「チョーヤバいじゃん。……でも、ここって第一線の設計士達が集まる重要機密でしょ。ナイトエッジ小隊の皮を被ってあいつら一体何をしているのかな？」

「さあな。だが隠す必要がなければ隠す努力はしねえだろ。……ひょっとしたら、こいつも『資本企業』と手を組んだサイドビジネスの一環かもしれねえ。優等生も優等生で一人で勝手にカリカリしていて面倒臭せえが、ユニコーンのヤバさは種類が違うぜ。裏切る裏切らないどころか、そもそも同じ『正統王国』所属なのかどうかから疑わなくちゃならねえ。当然、いつどこで背中を撃たれるかも分かったもんじゃねえしよ」

ユニコーンという中隊の中に、ナイトエッジという小隊が組み込まれていると考えれば良いだろうか。

当然、世界中に散らばっているユニコーンのメンバーは、仲間同士で情報のやり取りも行っている事だろう。

機密情報の塊であるクック追加諸島の中に、身分を隠したナイトエッジ小隊が食い込んでいる事実は、正直に言ってかなりまずい状況だ。

そこでヘイヴィアの無線機が信号音を発した。

先ほどまで八つ当たりの罵詈雑言を吐くためのストレス解消用カラオケマイクと化していたオモチャだが、その機材から嫌な情報が溢れ出てくる。

『……おいヘイヴィア。俺は今、最重要機密の建物の中にいるんだが、この無線がお前のトコまで届いている事実をどう思う？』

「最悪だ……」

ヘイヴィアは片手を額に当てて、

「こっちもこっちでヤバいの見つけたってのによ。クソ生意気なナイトエッジ小隊の中身はユニコーンっていう別の連中とすり替わってやがる。敵対している『資本企業』とこっそり組んでサイドビジネスに精を出しているって疑惑の部隊だ！」

『おいおい、おい！　それってまさか……!!』

「ご想像の通りだ馬鹿野郎。テメェが今やってる方法で軍の監視を無視したデータのやり取りが行われているとしたら、第一線の設計士と『資本企業』が手を結んでいる可能性がある!!」

『なあ。俺とヘイヴィアの左遷自体は偶然だけど、どこへ左遷されるかは設計士の権限で介入できる状況だったらしい。となるとナイトエッジ小隊も……？』

「だろうな。都合の良い手駒をかき集めるために、設計士が主導して人事を決定させたんだ」

『……ちくしょう。何で俺達はいつもこんなのばっかり見つけてしまうんだ』

「有能でイケメンだから仕方ねえ。映画化いつでも待ってますってヤツだぜ」

困った事になってきた。

分厚い建物の中から設計士が無線機で電波を飛ばし、それを外にいるユニコーンが受け取る。その情報をもっと大きな機材で島の外まで伝える事ができれば、設計士と『資本企業』のホットラインが構築されてしまう。

挙げ句、この小さな諸島の『正義』はユニコーン扮するナイトエッジ小隊と、中心を担う設計士が完全に掌握している。この二つが結託している場合、ヘイヴィア達が喚き散らしたところで法や規律が正常に働くとは限らない。

黒幕に制圧されていない通信機器とラインを探し出し、それで島の外へ報告する方法を構築しないといけない、という訳だ。当然、それを妨害しようとする者とは、通常の手順を無視した交戦も想定される。

と、ジェニーリアがヘイヴィアの袖をちょいちょいと引っ張り、

「でも、建物の中って天才少女が三〇人ぐらい生活しているんだよね？　誰が怪しいかは分かっているの？」

「ユニコーンの動きを追えば良い。全員が全員この島にいる訳じゃねえぜ。ナイトエッジ小隊全員を集めたってユニコーンの三分の一ぐらいだからな。『本隊』は別の場所で活動している」

「そんなの分かるの？」

「黒い噂だらけだからな。ユニコーンを追い駆けてりゃメシの種に困らねえって考えているジャーナリストもいる。踏み込みすぎて殺されたヤツもいるけどよ。一般のニュースサイトにだって活動地域は載ってるぜ」

「……クウェンサー君がいるトコほどじゃないけど、ここも無線ＬＡＮでＦＰＳできるようなゆるーい場所じゃないと思うんだけどなあ」

「ま、だから最新の情報までは摑めねえが。この島にぶち込まれる前、輸送機の中で観ていた時の情報ならこうだ」

ヘイヴィアは一度区切ってから、

「アフリカ南端。雲を使った水資源に関わる汚れ仕事に参戦してるってよ。クウェンサー、心当たりはあるか？」

ガン!!　と。

壁に頭をぶつけるような音で返事が返ってきた。

6

やるべき事を確認しよう。

クウェンサーは壁に背を預け、アイスコーヒーを口に含みながら、無線機に話しかける。

「設計士クレア＝ホイストとユニコーンが連結している懸念がある。そこからさらに『資本企業』と結びついている可能性まで。俺達がやるべき事は？」

『面倒事を全部忘れてニコニコ笑顔で退屈な任務に戻る』

「ギャグに付き合っている暇ないから先に進めるよ」

『……割と本気だったんだけどよ』

「ヘイヴィアはどうにかしてナイトエッジ小隊、というかユニコーンの動きを探れ。この島にいる連中も、アフリカ南端で活動している連中も。部隊全体の目的を知りたい」

『テメェの方はクレアだな。ベッドの中に潜り込んでも良いからとにかく情報を集めろ。そいつは第一線の設計士で、滅多な事じゃインタビューなんてできねえ。今この機会を失ったら接近する事も情報を入手する事もできなくなっちまうぜ』

「当然、この島の治安と正義はユニコーンが握ってる。変な難癖つけられたら『情報漏洩阻

止』とかの名目で撃たれかねない状況だ。探りを入れている事に気づかれるなよ」

『テメェこそ。その名目が一番使いやすい場所にいる事を忘れんじゃねえぞ』

一時間後にここで連絡を取り合う事を確認し、クウェンサーは無線を切る。自販機から出てきたアイスコーヒーを一気に呷って紙コップをゴミ箱に放り込みつつ、自販機の向かい側にある壁へ目をやった。

ホワイトボードが掛けられていた。

『エスカリヴォール』、『アサルトシグナル』、『スライドランス』、『アクティブシールド』……いくつものオブジェクトと戦地の名前がマジックで書かれている。おそらくここの研究員が携わったものなのだろう。その中に、見覚えのある名前がある。

ベイビーマグナム。

アフリカ南端。

「ちくしょう」

クレア＝ホイストは『ベイビーマグナム』の設計にも参加していると言っていた。彼女がアフリカ南端で活動するユニコーンを通じて『資本企業』と関わりを持っている場合、『ベイビーマグナム』の弱点が『資本企業』側に漏れている可能性がある。

そして。

クレアは『ベイビーマグナム』の戦果に不満を抱いていた節がある。これ以上評判に悪影

響を与える事がある場合、名刺を更新する必要がある、と。

「不吉な材料しか揃っていないぞ……」

クレアから情報を入手しようとする以上、まずは彼女の部屋に戻らなくてはならない。他の部屋の住人から話を聞くという手もあるにはあるが、『機密情報の塊』の中で見知らぬ人間からものを尋ねられれば、取られる対応は一つ。ナイトエッジ小隊に通報して速やかに無力化、である。

（……部屋に忘れ物をした、が無難かな）

クウェンサーは適当に考えてクレアの部屋のドアをノックすると、相手は特に警戒もしないで中へ案内してくれた。いいや、そう見えるだけかもしれないが。

「忘れ物っていうのは？　後じゃ駄目なもの？」

「携帯電話です」

「あちゃー……まずいね」

思った通りのリアクションだった。

「まあ電波は遮断される仕組みなんだけど、でもカメラとか録音機能とかあるからな。後になって部屋の中から見つかると、君がスパイ容疑で逮捕されるかもしれない」

「赤いヤツです。スライド式で。目立つからすぐに見つかるとは思うんですけど」

「ふむふむ」

クウェンサーはベッドの下などを覗き込む。そうしながら、どう会話を切り出そうか考える。いきなりアフリカ南端の話をしたら警戒されるかもしれない。

「そう言えば、こんな所に住んでいたら、せっかく稼いだ大金を使うチャンスがなくなったりしないものなんですか？」

「ネット通販があるからそうでもないよ。ま、飽きたらすぐに捨てるを繰り返すから、部屋の中に物は溜まらないけどね。テレビゲームもダウンロードの時代になったし」

「テレビゲーム……」

クウェンサーは部屋の隅へチラリと目をやった。複雑に折ったプラスチックの板のようなものがある。コックピットを模した、ロボットゲーム用の大型コントローラーに似た装置だ。

「あれもそうですか？」

「ん？　ありゃ違うよ。昔々のプロジェクトの失敗品だ。『アサルトシグナル』ってモデルに搭載されるはずだったんだけどね」

「……オブジェクトの、シミュレーターか何か……？」

「そんなご大層なものじゃない。作戦行動中に機内の操縦士エリートが気絶した時なんかに、海に沈まないように、一時的に遠隔操作でバランスを取り戻そうってだけの装置だよ。それでも数十人から一〇〇人以上の人間を必要とするけど。とてもじゃないけど、高速戦闘なんて付き合いきれない」

ま、ハッキングの窓口になりそうだって理由で不採用になったが、とクレアは適当な調子で言う。

「余裕があるっていうのは良い事だ。失敗しても次があるって保障があるから冒険できる。そうやって手に入れた尖った技術が安定した機体の建造に繋がる。重要なのはサイクルを作る事さ。一度完成してしまえば無尽蔵に収益は膨らむが、そいつを完成させるまでが難しい。オブジェクトの動力炉はオンオフを切り替えるより年中無休で点火し続けた方が効率良いのと同じかね」

「さっさとあやかりたいもんです」

これだけは正直にクウェンサーは答えた。

クレアは棚の方を調べながら、

「それに、今じゃ稼いだ金でどうこうっていうより、金を稼ぐ事自体が目的になっているかな」

「へえ」

「これでも本宅はパリにあるんだよ。結構デカい。でも帰るのは年に一回ぐらいだね。すっかり遠縁連中の別荘になっちゃってる。金も家も同じだね。手に入れる事に意味がある。その規模が社会的なステータスになって私の力に上乗せされる。変人ってイメージが付きまとう仕事だから余計にね」

床にある雑誌をどかしたり、挟んであったしおりを落としたり、また挟んだり……とにかく

時間を稼ぎながら、クウェンサーは脳のアドリブを司る部分をフル稼働させる。

「……って事は、他にも？」

「高級車とか別荘とかね。ああ、寄付金なんてのもあったね。驚け、なんと兵器開発でご飯を食べてる私のお金で『正統王国』に拠点を置くＮＧＯの五％が機能しているのだっ！」

いっそテーブルの上のノートパソコンを調べられればユニコーンやら『資本企業』やらとの繋がりを見つけやすいはずだが……流石にそれができる環境ではない。

「ここだって別荘でしょう？」

「社会的な投機だよ。実際には一度も入った事のない別荘だってある。アマゾンの密林、地中海に面した浜辺、北極圏のスキー場近く、最近じゃオセアニア方面でも買ったよ。あとアフリカ南端」

心臓がわずかに跳ねるのを自覚する。

切り込むならここだ。

「アフリカは行った事あるんですか？　向こうってどんな料理出るか知ってます？」

「んー？　まあ何度か。でも食べたのはあれだね、ハンバーガーとかテンプラとか。そういうのが流行ってるんだよ。本来の家庭料理は香辛料ドバドバ入れたスープカレーみたいな食べ物らしいんだけどね、まだ遭遇できてない。何でも、わざと冷ましてから食べるんだってね」

「味がイメージできちゃうと、無理して追いかけようって気も起きなくなっちゃいますね」

「だよねー。もっとこう、ごちゃーっ！　ってしたもん期待していたからさ。マンモスを一頭丸ごと焼いてますみたいなワイルドなヤツね」

「マンモスはもういないでしょう」

「実際に行ってみりゃ分かるよ。テレビなんかとは全然違う。ここならいそうって気分になる」

「でもあそこって一応は戦争国ですよね。設計士さんみたいな機密の塊がホイホイ入って軍上層部に怒られないんですか？　誘拐されたらどうするんだ、とか」

「大丈夫大丈夫。その辺は優良なのがいるからさ。ナイトエッジ小隊をつけておけば納得してくれるよ」

会話に空白が生まれかける。

沈黙を作らないように気をつけながら、クウェンサーは会話を続ける。

「アフリカ南端ってペンギンがいるって話でしたけど」

「ケープペンギンね。可愛いよ。街の方でも気を配っているらしくてさ。ペンギン専用のトンネルとか造ってあるんだ。たまに諜報用のＵＧＶなんかも利用しているけどね」

ただ、とクレア＝ホイストは付け足して、

「道路事情しか考慮してなくてさ。大雨が降るとトンネルが水没しちゃうんだよね。ペンギンは海を泳ぐ生き物だけど、鰓呼吸って訳じゃない。トンネルの中で迷うと溺死しちゃったりするんだよ。そこが残念」

雨、という単語が引っかかるが、まだ踏み込むには早いと判断する。

慎重に、離れすぎないように、本題に掠めるような距離感で会話を持続させる。

「トンネルで、迷う？」

「一本道なんだけどね。暗くて狭いから前後や上下の感覚が分からなくなるみたいだね。いっそ水の流れに身を任せた方が早くトンネルから出られそうなものだけど」

「動物愛護団体が頭を抱えそうな感じですね」

「だね。おかげで水資源マーケットもすっかり悪役だよ」

つかず離れず。

あるいは、向こうも向こうで誘いをかけているのでは？　と邪推してしまいそうな不安を押し殺し、クウェンサーはさらに情報の取得を目指す。

7

ヘイヴィアもヘイヴィアで行動を開始する。クック追加諸島で活動しているナイトエッジ小隊、つまりユニコーンの分隊の動きはともかく、アフリカ南端で活動している本隊については見聞きするだけでは調べようがない。必要なのは、軍のデータベースにアクセスできるネット端末だ。

「……面倒臭せえな。どうせならクウェンサーの野郎が研究者のパソコン使って調べりゃ良いのに」

「最高機密のコンピュータなんて触れられる機会はまずないと思うけどなあ。おまけに外部アクセスは軍の上層部に監視されるんでしょ」

「おい結婚詐欺師。何でついてきてんだ？」

「愛と正義に目覚めたからよ」

「……こいつもユニコーンの仲間じゃねえだろうな」

元々ヘイヴィア達に任されていた任務は大量に余った弾薬の在庫処分。担当している兵士は揃いも揃ってやる気がなく、こっそりサボっている連中も少なくない。そういう風に『腐って』いっているのだから、上も形では文句を言いながらほくそ笑んでいる。今さらヘイヴィア達が消えたところで、本気で咎める者はいないのだった。

「ねえ。外部回線ってどこにあると思う？　実験棟のどこか？」

「そっちは触れようとしただけでセンサーに引っかかる。唯一、最高機密のオブジェクト設計関連から外れた施設は、俺ら兵隊の居住空間だけだ。そして、その居住空間にはナイトエッジ様のお城もあるって訳だ」

「……ユニコーンのコンピュータから情報を抜くの？」

「真相に近づくには、それが一番手っ取り早い。本当によそ様とのホットラインがあるなら、

おそらく軍上層部の目を盗んだネット端末を抱えているはずだ」

見た目には、ヘイヴィアとジェニーリアの動きはどう映っているのだろうか。延々と続く在庫処分に辟易して、居住空間にあるベッドで昼寝でもしようとしている、とか。

「おい。怪しまれないようにするために手っ取り早い方法がある。俺の腕に絡みつけ」

「……君はお金の匂いがしないから嫌だなあ」

「これでも『正統王国』でも有数の『貴族』サマだぜ!!　まあ確かに家督を継ごうとすると一族全員から反対されまくる身の上だがな!!」

「シャチョーさーん。あたし総資産が知りたーい」

「こういう絡まれ方は鳥肌モンだなオイ……!!」

幹線道路のような大きな橋を歩き、兵士達の居住空間へと辿り着く。見た目は海上油田のような鋼鉄の大地。その上に建物があるのではなく、下へ伸びる形で兵舎は展開されている。

「ナイトエッジ小隊の区画は完全に切り離されているね。設備の質が違う。流石は小銃の弾丸一発にしてもリッチな設計士用護衛部隊。連中は『窓際』用の弁当じゃなくて食堂でディナー食べているって話だよ」

「典型的な差別愛好家かと思ってたが、こいつも情報制限の一環だったのかもな。メシ時ってのはいろんなデータが飛び交う。世間話って形でな」

「そのうっかり情報を遮断するための？」

「だろうよ」
「……でも、だったら区画に入るのって大変そうじゃない？　カメラとか山ほど設置してそう」
「そりゃねえな」
「？」
「あくどい事やってんだ。その証拠を自分で残してどうする」
一番分かりやすい区画の出入り口の近くを通り過ぎながら横目で観察してみると、やはり分かりやすく『人間の見張り』が設置されていた。ナイトエッジ小隊の黒覆面だ。記録に残せない監視を、人の目で行っている訳である。
「殴って先に進みたい」
「破滅願望がおあり？」
「じゃあ仕方ねえな。他を当たるか」
天井のダクトを調べてみるが、直径一〇センチ大のパイプを束ねた作りで、人が入って進めるような構造にはなっていない。
「アクション映画みたいにはいかないね」
「一つ一つを調べていっているだけだ。進入路が見つかりゃラッキーぐらいのな」
電気配線や上下水道も調べてみるが、やはりサイズを小さくし、複雑に折れ曲がらせる事で人間やＵＧＶなどの通行を阻害する仕組みにしているようだった。

しかし、

「あったぞ」

ヘイヴィアは鋼鉄の扉を開けて言う。

「元が海上油田と同じ構造だからな。太い柱に沿う形で、メンテナンス用の通路や階段がそのまま残ってやがった。基幹構造全体に繋がっているなら、生活空間をまたいでいるだろうな。つまりナイトエッジ小隊の区画へ進める」

「何でこんなのが？　ダクトや水道はあれだけ気を配っていたのに」

「業者が違うんだろ。複数の会社を噛ませて全体の図面をぼやかすってのは、軍事施設では良くある事だ。城造りと同じだよ。でもって、情報関連の対策も業者ごとに変わる。神経質なトコもあればズボラなトコもある。造ってる方も重要度を把握してねえ訳だしな」

商業施設とは違う。通路は細く、暗く、配線なども剝き出しになっている。壁紙なんてものもない。建物というより、軍用艦の通路を歩いているような気分にさせられる光景だ。

「……ナイトエッジ小隊の区画に入ったとして、そこからどうするの？」

「電力メーターをチェック。このクソ暑い南の島だ。ご立派な勝ち組サマなら窓なんて開けようとしねえで、一〇〇％エアコンを使う。メーターの動いてねえ部屋が兵士のいねえ部屋だ。そこに潜って端末を探す」

「空き巣みたいなやり方ね」

「実際空き巣だろ」

長い通路を歩いて階段を下り、見つけた鋼鉄の扉のノブに手を掛ける。うっすらと開けて向こうの様子を観察したが、ユニコーンの連中がいる様子はない。

「ちくしょう、電力メーターはどこだ？　こんな、いつ覆面野郎が出てくるか分かんねえ場所を歩き回れってのか？」

「ねえ、ねえ。ドア触って冷えているかどうか調べた方が早くない？　エアコン使っているかどうかはそれで分かるよ」

プライドでアドバイスを突っぱねる人間は早死にする人間だ。なのでヘイヴィアは率直に従う。音を立てないように、部屋の扉の表面に掌を当てる。それを何度か繰り返すと、他とは明らかに違う、生ぬるい質感のドアにぶち当たった。

「ここだぜ」

「でも無人の部屋って鍵がかかっているものだよね。どうしちゃう？」

「……蹴破るしかねえかも」

「一発でバレるね。でもこれ、鍵のデッドボルトってポリカーボネイドじゃない？　非金属のナイフだの盾だのに使われている……」

「だったら？」

「熱に弱い。火で炙れば溶けちゃう」

パッチン、と金属質な音を立てて、ジェニーリアはオイルライターのキャップを開く。
「当然、デッドボルトを溶かせば後でバレる。調べ物はこれ一回限りになるから覚悟して」
「あいよ」
「あと、プラスチックが溶けるみたいな匂いがするからそれで注目を集める可能性も否定できない。気をつけるように」
「博識な事で」
「捕まる前は犯罪者同士で情報交換する事もあってさ。バーで手口を知る事もあったの。もっとも、話を聞く程度だからピッキングみたいな小難しい技術までは手に入れられなかったけど」
開錠までに必要な時間は三〇秒ほどだった。
確かに、鼻につく匂いが若干だが漂った。気が気ではないが、幸い、他の部屋からユニコーンの連中が顔を出してくる様子はない。
「開いた」
「お邪魔しますよ、っと」
ヘイヴィアは冗談のように呟いてから、ドアノブを回してゆっくりと扉を開く。その隙間から部屋の中を覗き込もうとする。
直後だった。

ゴッ！　と。

部屋の中から二本の腕が伸び、ヘイヴィアの首へ絡みついてきた。

中に誰かいた。

ヘイヴィアは首どころか頭全体まで鈍痛に襲われる中、即決する。無理に腕を外そうとせず、肩を使ってドアごと中の人間へ体当たりを仕掛ける。

派手な衝撃と共に襲撃者が部屋の奥へと転がる。ヘイヴィアは中へ突入し、馬乗りになりながらジェニーリアに言う。

「ドアを閉めろ。くそっ、このエコ野郎め！　汗だくの野郎を組み伏せるなんて最悪だっ!!」

押し倒した黒覆面の襟を思い切り摑んで頸動脈を締め上げ、速やかに意識を奪うヘイヴィア。ぐったりした兵士の覆面を摑んで軽く上げ、首筋を確かめてみる。

予想通りの結果に、ヘイヴィアは顔をしかめた。

「首元をぐるりと囲む縫い痕、か。こいつもやっぱりユニコーンだ」

ヘイヴィアは無力化した兵士の手足を電気ポットのケーブルで縛り、奪い取った覆面を口に詰め込んでしゃべれないようにしてから、バスルームへと放り込む。

「殺しちゃったの？」

「だったらここまで面倒な小細工するかよ。……ちくしょう、男なんか緊縛してどうすんだ」

ヘイヴィアは吐き捨てながら、簡素なビジネスホテルのような室内を見回す。小奇麗なものだが、部屋の隅にいくつかのバッグが置いてある。

中を改めると、高速回線用のモデムが出てきた。他には直径三〇センチ程度のパラボラアンテナ。どうやら通信衛星を経由して外部と連絡を取り合っているらしい。

「窓の手すりに金具があるよ。多分アンテナを設置するためのものね」

「海上油田から下に伸びたような建物だろ。ここからでも電波拾えるんだな」

肝心のコンピュータが見つからないが、バスルームに放り込んだ男を改めてボディチェックしてみると、小型の端末が出てきた。

「行けるぞ」

「パスワードは？」

「不用心な事に、バッグの中には重要なメモが」

「……はあ。私物じゃなくて支給品だったのかもね。だからパスワードが頭に染みついていない」

小型の端末からネットワークにアクセスする。

ナイトエッジ小隊、いやユニコーンが独自に使っている情報網に接触する。

「元々『潜伏』して作戦を実行する部隊だからな。軍の正式フォーマット以外に、自分達だけでネットワークを構築していたっておかしくはねえ」

「何が出てきたの？　アフリカ南端での動きって？」
「待て。来たぞ、来た来た。アフリカ南端、雲を利用した水資源ビジネスにまつわるエトセトラっと」
その時だった。
部屋のドアの向こうで、いくつかの足音が響いた。単に通路を行き交っているだけではない。明らかにドアの所で集まっている。
こちらの異変に気づいている挙動だ。
「ヤベえ……。ジェニーリア、テメェはそのデータを自分の端末に片っ端から移せ！」
「何で気づかれたの？　バスルームの男は縛って口も塞いだんでしょ!?」
「やられたふりはしていたけど、割と早く目は覚めていたのかもな」
ヘイヴィアは窓の方へ近づき、脱出ルートとして使えるかどうかの確認を行いながら、
「縛られた足を動かして壁を蹴れば、モールス信号ぐらいは出せるもんだぜ。やっぱ殺しておけば良かったか」
「データの移動完了！」
「よし、来い。こっちだ！」
ヘイヴィアとジェニーリアが窓から身を乗り出した直後だった。
部屋のドアが勢い良く蹴破られ、スタングレネードが投げ込まれた。

8

約束の時間になり、クウェンサーはポケットの中にあった携帯電話を『床から拾ったように』見せかけてクレア＝ホイストと別れを告げた。

ここが限界。

忘れ物という名目で彼女の部屋を訪ねる事はもうできない。

建物内の角へ向かい、無線機を使ってヘイヴィアと連絡を取る。

「ヘイヴィア、ヘイヴィア？」

応答はない。

向こうが電波を拾っているかどうかも判断できない状況だ。

不安が膨らむが、それを解消する術はない。とにかく自分の仕事をこなすしかない。

「聞こえているかどうかは分からないが伝えておく。ナイトエッジ小隊はクック追加諸島の防衛じゃなくて、クレア本人の護衛として、世界中を飛び回る権限を与えられているらしい。つまり完全な私兵だ。彼女の手足となって汚れ仕事をこなしている可能性はかなり高い」

やはり応答はない。

均一なノイズを耳にして舌打ちしながら、クウェンサーはさらに続ける。

「話していて分かったのは、アフリカ南端では雲を使った水資源ビジネスの他にも、大きなマーケットが存在するらしいって事だ。メガソーラー発電。作物の育たない乾いた大地いっぱいに発電パネルを敷き詰める、電気の畑ってヤツだ」

どうあっても応答はない。

その単純な事実に、クウェンサーの心は折れそうになる。

「クレアは思いの外こいつを気にしていた。つっつくとすぐに話題を変えようとするぐらいにな。単純に『雨を降らせる』水資源ビジネスと『降らせたくない』メガソーラー発電じゃバッティングするっていうのもあるんだろうけど、何か引っかかる。多分ここにサイドビジネスの大きな鍵が隠れているはずだ」

ガコン、という大きな音が聞こえたのはその時だった。

無線機からではない。

建物の分厚い出入り口の門が開いた音だ。研究員が行き来しているのかと思って目をやったが、直後に山積みされた鉄道雑誌の陰に身を隠した。

黒覆面に、カービン銃。

ナイトエッジ小隊、いやユニコーン分隊の人間だ。

変人（＝天才設計士）の一人なのか、長い通路を使ってジョギングしていた少女が黒覆面と軽く言葉を交わしているのが見える。

（……無線の電波を拾われた？　いや、単純に俺が出てくるのが遅かったからか）

何にしても、見つかって良い状況じゃない。下手をすれば情報漏洩阻止の名目で射殺されかねない。罪状など後から付け足せば良いのだから。

「……まいったな。四人もいるよ」

彼は吐き捨てる。ここへ入る前に、爆弾などの武器は没収されている。何より、単純な銃撃戦になった場合、同じ装備を持っていてもクウェンサーの方が押し負かされるだろう。彼はヘイヴィアと違って、銃器関連の取り扱いや近接格闘の訓練を受けている訳ではない。

『学生』と『軍人』の間に明確な違いがある。

まともにやり合っても勝てない。

ただし、

「それはオブジェクトだって同じだ」

鉄道雑誌の山から、別の通路へと滑り込みながら、クウェンサーは呟く。

まずは武器になりそうなものを、この天才少女達（一部除く）が散らかした通路の中から探すところから始めなければならない。

「あの怪物に比べれば、ヒス野郎四人組の方がまだ楽だろうさ」

9

スタングレネードはわざわざ解説するまでもなく、派手な光や音で五感を奪って敵の行動力をなくす非殺傷兵器だ。無力化できる時間は数秒から数十秒程度。普通はその間に銃器を使って確実に仕留める。

ヘイヴィアとジェニーリアは、炸裂の瞬間すでに窓の外へ身を乗り出していた。

だからこそ『直撃』は免れたものの、それでも両目に白い残像が若干焼きついた。しかし両目を擦っている暇はない。幸い、窓の外は足場のようなスペースが延びていたので、そこを伝って逃走に入る。

「最悪だ。最悪だ最悪だ!!」

「どこでも良いから角ってないの!? こう真っ直ぐだと背中を撃たれるってば!!」

角はすぐそこだ。

しかし辿り着く前に、後方の窓からユニコーンの黒覆面が上半身を乗り出してきた。カービン銃の銃口がこちらに向けられようとする。

ヘイヴィアはアサルトライフルの安全装置を外し、引き金に人差し指をかける。

たった二発の短い連射。

それを実行したヘイヴィアが頭を抱えそうになる。
「ついにやっちまった！・味方への発砲!!」
「黒覆面の一人を締め落としておいて今さら何言ってんの。あいつらの悪行を解明しないと軍法裁判送りは確定だね」
向こうは怯んだが直撃はしなかったようだ。角を曲がったヘイヴィア達の耳に、仕返しのような発砲音が突き刺さってくる。
さらに走り、作業用の、ほとんど梯子を斜めに傾けたような階段を駆け上がりながら、ヘイヴィアは自分の装備を確かめる。
「マガジンは三本。グレネードは二発かよ」
「それ在庫品のスモークじゃなかったかしら」
「とことん役に立たねえ！」
「だから在庫なんでしょ」
散発的な銃撃がヘイヴィア達を追うが、足場がしっかりしていないせいか、嵐が近づいてきた事を示す強風に怯えているのか、狙いは定まっていない。ヘイヴィアとジェニーリアの二人は上へ上へと目指していく。
「データには何があった？」
「雲を利用した水資源ビジネスと、メガソーラー発電ビジネスの競合」

「……どっちも天気が関わってやがる訳か。雨が降らなきゃ水資源は困る、雲に覆われたらメガソーラーは困る。で、クレアはどっちに噛んでやがる？」

「表向きは水資源、つまり雲を作る側みたいね。だけど」

「だけど？」

「それとは別に、両方に出資している人間がいるらしいの。氏名までは載っていないけど」

「どっちか片方が成功すりゃもう片方はコケるはずだろ？」

「お金は本人のものとは限らない」

ジェニーリアは舌で軽く唇を舐めてから、言葉を重ねる。

「つまりアフリカ南端はさ、金融ブラックホールなんだよ。どっちに投資したって結局最後は損をする。一見稼ぎ時に見えるけど、お金を払ったら払った分だけ吸い込まれる。でも、払っている側は頭に血が上っているから、悪徳カジノみたいに巨額の損失が出るまで事態に気づけない。さて問題。この金融ブラックホールを悪用して、弱体化させたい個人や勢力に上手い話を売り込んだら、どれだけの打撃を与えられると思う？」

「……問題はアフリカじゃねえってのか」

ヘイヴィアは嫌な汗が体を伝うのを自覚しながら、

「クレアは『正統王国』の有力者や企業を金融ブラックホールへ誘い込む。次々と負債が重なって弱体化していく。それは『資本企業』の思惑通りって寸法だ」

現代の戦争はオブジェクトによって行われる。そして『世界的勢力の首都を焼き払おう』とか『敵対する民族を根絶やしにしよう』なんていうお題目は掲げない。

戦争には金がかかる。

その金の力を効果的に奪う事で、敵国を『戦争のできない状態』に追い込んで屈服させる。そういう目的を掲げているのだから、金融ブラックホールを利用したクレアの裏切りは、『正統王国』全体に相当のダメージを与える事になる。

あるいは。

長期的に考えれば、オブジェクト同士のぶつかり合いよりも深刻な。

「なんて事だ。戦争が形を変えてやがるぜ」

「クレアやユニコーンが『資本企業』の手駒になっているなら、この情報は絶対に表に出したがらないはず。頭に血が上っているクライアントに冷や水を浴びせて冷静さを取り戻させてしまうきっかけになりかねないもん」

事が巨額の詐欺に分類されるためか、ジェニーリアはどこか興奮した調子で言う。

「そんでどうするの？　どこまで逃げたって、このクック追加諸島じゃ治安と正義を司っているのはナイトエッジ小隊だよ」

「だが島の周辺を警備しているオブジェクトは違うはずだ。どうにかして連中にこのデータを渡す。くそ、俺らの無線機だけでどうにかなるか？　衛星通信用のアンテナを持ち逃げするべ

きだったな」

バタバタバタ!!　という空気を叩く轟音が響き渡ったのはその時だった。

別の島から何かが接近してくる。空を飛んでいるのは飛行機とヘリコプターを足して二で割ったような乗り物だ。ティルトローターと呼ばれるプロペラ機で、翼についたプロペラの向きを九〇度変更する事で、垂直方向と水平方向の推力を切り替える事ができる。

滑走路を必要としない、ヘリコプターのように離着陸できる中型航空機をイメージしてもらえば分かりやすい。

「輸送用、だよね？　兵士さんでも降ってくるのかな？」

「いいや……ヤベえぞ」

ヘイヴィアは呻き声を上げた。彼は気づいたからだ。ティルトローターの胴体の左手側から、複数の砲身が飛び出しているのを。

「ガンシップだ!!　巨体を活かして大量の砲弾を積んだ天空の要塞だぜ。飛び出てんのは一五〇ミリの大砲に、五〇ミリの榴弾砲、二〇ミリのガトリング砲か？　どれで撃たれたってバラバラにされる！　戦車の下に潜ったってまとめて嚙み砕かれちまう!!」

ガンシップの長所は『途切れる事のない連射を、空の上から一方的に浴びせ続ける事』だ。

標的を中心に大きな円を描きながら、大容量の機内に積んだ砲弾をとにかく撃ちまくる。対建造物、対車両、対人と大雑把に区切られた兵装を切り替え、標的がどこへ隠れようとしても逃

げようとしても、それを許さず『大きな円の内側』で殲滅する。そういう兵器である。
「し、下に逃げるっていうのは!?　分厚い建物の層が守ってくれるかも！」
「向こうもそれが狙いなんだろ。頭を押さえて下から上ってくる兵士達に捕らえさせようとする。逃げても結局行き止まりだ！」
「それじゃどうするの!?　あの高さにいる中型機をライフルで落とせるはずない！」
「来い！　俺が何とかしてやる!!」
『大きな円』を描くのが目的なので、ガンシップは一直線にヘイヴィア達の方へは向かって来ない。レコードの上に針を置くように、滑らかに所定の位置へつく。
間もなく始まる。
円が示す終わりのない飛行と、嵐を吹き飛ばすほどの砲弾の豪雨が。

10

プロの兵隊相手に鉄パイプだの古雑誌だのを組み合わせたアイデアグッズで立ち向かって何とかなるのはアクション映画だけの話だ。そもそもの技術、体力で敵に負けているのに、装備まで貧弱になったらまず勝ち目はない。
戦闘の素人であるクウェンサーがナイトエッジ小隊の四人組に勝つためには何が必要か？

個人の技量を凌駕するほどの火力を手に入れる事だ。

（……こんな簡単な構造の施設じゃかくれんぼもできやしない。逃げ続けたってすぐに見つかる）

という訳でクウェンサーは『静かに進む事』を早々に諦めた。部屋のドアには案内板は一切ないが、絨毯や壁紙などから機械油の匂いを嗅ぎ取り、蹴破って中に入る。

「懐かしいね。学校の工作室を思い出す」

旋盤、電気炉、工作台、メッキ加工用の水槽。いわゆる金属加工を行うための部屋だ。それらの設備の中には、火薬の爆発力を利用して金属を成形する装置もあった。一定以上金がかかっている施設なら、どこにでも転がっているものだ。

火薬。

クウェンサーの得意分野だ。

「……いやいや敏感すぎるよ。まいったね、静電気で爆発するタイプじゃん」

適当に呟きながら、魚の餌のようなペレット状の火薬が詰まった容器を取り出すクウェンサー。そのまま袋に詰め直したり、一度完璧な粉末にすり潰したりしながら、いくつかのパッケージに小分けしていく。

部屋の壁を小さく叩くと、軽い音が響いた。元々、自販機の裏にある壁を壊して遮断用の建材を取り外してあったほどだ。予想通り、内側の強度はそれほどではない。

「敵さんはドアからやってくる。だからそれ以外の移動ルートを作れば大慌てしてくれる」

やたらと重たい旋盤の載った机を、脚の下にある小さな車輪の力を借りてドアの前に設置する。簡単な弾除け。そしてドアの左右の壁に爆薬を設置。『ドアの横に張り付いて様子を観察』なんてベタな事をやったヤツは壁ごと吹っ飛ばしてやろうと心に誓う。

「さ・て。ここまでは向こうも予想できてるだろうな」

敵は四人もいるのだ。

ドアから正面突破するのが一人。残る三方の壁に面した部屋へ一人ずつナイトエッジ小隊を配置されたらまさに四面楚歌。爆薬で壁を壊してルートを確保しようとしても、その全ての場所に兵士が待ち構えていればおしまいだ。

壁やドアの破壊時には衝撃波で敵を怯ませる事もできる訳だが、あらかじめ予測できている人間なら対策だって講じられる。

クウェンサーは再び慎重に壁を叩いていき、柱の位置を確認しながら考える。

敵の上をいくには、さらにもう一つ策がいる。

11

ティルトローター式ガンシップ。

オブジェクトが登場するまでは、戦場の主役に近かった兵器だ。圧倒的な積載量を活かした大火力に、滑走路さえ必要としない利便性。さらにこのガンシップを主役に近づけたのは、各種の大砲の代わりにカートリッジ式のレーザー兵器ユニットを丸々積んだ亜種が登場したからだ。

これにより、『鈍重な機体は制空権の確保されていない戦場では無力』という従来の法則は突き崩された。戦闘機どころか巡航・弾道ミサイルの迎撃まで可能とする天空の要塞の登場は、通常モデルとレーザーモデルを組み合わせる事で、空と地上の双方へ同時に切り込み、戦場の一方的な制圧を可能とした。

しかしレーザー兵器の導入はガンシップ自身の首をも絞めた。ガンシップの活躍を参考に、空対空、地対空、近接防御、ミサイル防衛と、次々にレーザー兵器が各国軍隊に導入されていったのだ。機敏な挙動を可能とする制空戦闘機さえ回避できないレーザー兵器を、ガンシップ自身が回避できるはずがなかった。そして『何をやっても動きを止めない』オブジェクトが対空レーザーを山ほど搭載した事で、主役の座を失う羽目になる。

そんな『一時代を築いた、歴史に大きく関わるほどの兵器』が生身の兵士二人のために重い腰を上げた訳だ。

率直に言う。

まず助かる見込みはない。

【ティルトローター式ガンシップ】
TILTROTOR-GUNSHIP

全長…25.3メートル

全高…10.1メートル

全幅…36.3メートル

火器最大装備時重量…65.1トン

最高速度…時速750キロ(動力垂直時 時速350キロ)

用途…対地攻撃型火力支援機

乗員…操縦席に1～2名、他に使用火器や管制によって変化

運用者…『正統王国』

動力…ターボプロップエンジン×2(ティルトローター式)

兵装…150ミリ砲×1、50ミリ榴弾砲×1、30ミリガトリング砲×1

メインカラーリング…カーキ

TILTROTOR-GUNSHIP

パイロットが機内通信を利用して仲間へ発破をかけていく。

「対人センサー良好。中心点に従って奇麗な円を描いてやる。この老骨がまだまだ使える事を教えてやれ」

『プテラノドンって愛称クールだよね。化石だなんて良い趣味してる』

『化石どころか最新型だぜ。多分、どっかの将校が過去を懐かしんで開発を続けさせているんだな。趣味丸出しって感じ』

『火器管制スタンバイ。自動装填スタンバイ。化学冷却スタンバイ。オールグリーン。一〇秒後に始めます。各員、砲撃音に備えてノイズキャンセラーの確認を！』

パイロットの仕事は対人センサーの位置から『中心点』を割り出し、大きな円を描き続ける事だけ。悪趣味なメリーゴーラウンドなら訓練生でもできる。向こうが携行型のミサイルなどを使ってくる可能性を考慮し、念のためにチャフやフレアのボタンに指を掛けているが、多分必要ないだろう。

簡単な仕事だ、とパイロットは思う。

しかしカウントダウンを待つ最中に、唐突に気づいた。

「待て。射撃中止！　繰り返す、射撃中止!!」

『何でだよ!?』

『依然、捕捉を継続。いつでも行けます』

「標的が島と島を繋ぐ橋へと逃げている」

パイロットは冷や汗をかきながら機内通信のやり取りを続ける。

「移動経路の他に、水道、電気、通信網を繋いでいるインフラの要だ。標的を吹き飛ばすのは容易いが、一緒にまとめて生命線まで千切ってしまう。どの砲で狙ったって威力が高すぎる!!」

ヘイヴィアとジェニーリアは幹線道路のように広大な橋の上ではなく、その下を通っていた。普通の橋なら構造を強化するため、鉄骨などが複雑に入り組んでいる場所だが、このクック迫加諸島の場合は上下水道や電気ケーブル、通信網などが張り巡らされている。

「子供騙しだよ。これで凌げるとは思えない」

「だろうよ。くそ、ジャミングされててこっちの通信はオブジェクトまで届かねえ。どっちにしろあのガンシップをどうにかするしかねえぞ」

「あれを落とすって？」

ジェニーリアは眉をひそめて、

「ティルトローターだよ、ティルトローター。中型輸送機を無理矢理改造した融通の利かないモデルじゃない。ヘリコプターみたいに空中でピタリと止まる事もできるし、上昇も下降も思

いのまま。橋の下に潜ったって、その下を覗き込むように高度を合わせられたら射線に捉われちゃうよ」

「だがガンシップに搭載されている馬鹿デカい砲は使えねえ。一番サイズの小さなガトリング砲だってライフラインを砕いちまう」

「だったら使わなきゃ良い。元は輸送用のティルトローターでしょ。後部のカーゴドアを開いて狙撃銃で狙われたらやっぱりピンチ継続中ってヤツじゃない！」

「それを待っていたんだよベイビー」

ヘイヴィアはアサルトライフルから、銃身下部のグレネード砲を取り外す。ライフルの方をジェニーリアに押し付け、

「やるよ。ティルトローターのエンジン目がけて撃ちまくれ。多分そんなに当たらねえし、当たったってエンジンが火を噴く訳じゃねえが、パイロットは大層慌てる。挙動がブレまくれば乗ってる人間も揺さぶられて狙撃の精度はガタ落ちする」

「そっちはどうするの？」

「こいつを使いまーす」

ヘイヴィアはアサルトライフルの銃身下部から取り外した四〇ミリのグレネード砲を軽く振る。装置に収納されていたいくつかのパーツを伸ばすと、グリップとストックを備えた、『筒』から『銃』へとシルエットが変化していく。

ジェニーリアは目をパチパチと瞬きさせ、
「アンダーバレルのグレネードって射程どれぐらいだっけ？」
「二〇〇から三〇〇メートル」
「向こうは一〇〇〇メートルからだって狙えるよ!?」
「動き回るティルトローターに乗り込んでスコープ覗いてんだぜ？　そんな理論値通りの狙撃できる訳ねえだろ。どう頑張ったって七〇〇が限度だ。確実さを求めるなら五〇〇まで近づく」
「単純な引き算ができないぐらい頭が悪いのかな？」
「それじゃあ足し算で対処しようぜ」
ヘイヴィアはグレネード砲の側面にあるリング状のパーツをくるくると回し、それから缶コーヒーサイズの砲弾の下部に追加のパーツを取り付けていく。
「何しているの？」
「スーパーチャージ。発射装薬の増量ってヤツだ。迫撃砲なんかじゃ射程距離を伸ばすためにしょっちゅう使われていやがる。ただ手持ちのグレネードの場合は不評だな。圧力の倍加に耐えられず、何発も撃つと細かい亀裂が走るって報告もある」
「何でそんな危ないのが支給されているの？」
「危ねえから在庫が余りまくってんだろ」
歌うように呟きながら、ヘイヴィアはグレネード砲の照準を覗き込む。センサー関係はライ

フルの方に集中しているため、お久しぶりの肉眼オンリーだ。

「それよりほら、テメェも撃てよ。ガンシップの翼、エンジンのトコだ。高度を下げて橋の下を覗き込みに来たぞ。パイロットをビビらせて機体を揺さぶらせねえと狙撃手が動いちまう」

「やるわよ。やるやる。でもそれスモークでしょ？　下からバカバカ撃たれる事も想定しているガンシップを落とせるの？　インテリアに分厚いプレートがありそうだけど」

ドカドカドカドカッ!!　と、本当に正確に当てようとしているなら逆にそんな長い連射はしないだろうという感じでアサルトライフルのフルオート射撃を行いながら、ジェニーリアが質問する。

ヘイヴィアはタイミングを待ちながら、うっすらと笑う。

「高空を飛ぶ輸送機と違って三〇〇〇メートル台のティルトローターに気圧を調整する機能はねえんだ。つまり貨物室と操縦室を隔てる壁もねえ。となると、だ。……開いたカーゴドアから貨物室にぶち込んだスモークはそのままコックピットまで充満する。元々、ティルトローターの安定性はヘリより低い。あんな海面ギリギリで視界を奪われたら数秒でおしまいだな」

引き金に指を掛けながら、彼は言う。

「せっかく南の島へバカンスに来たんだ。海水浴でも楽しみやがれ」

三〇ユーロの暴徒鎮圧弾で二〇〇万ユーロの最新機が海面へと叩きつけられる。
ジャミングも解け、ヘイヴィア達は海上のオブジェクトへ『真相』を伝えるチャンスがやってくる。

12

クウェンサー＝バーボタージュが爆弾を得意としている事は、新聞代わりにニュースサイトを眺めて事情通を気取るような子供だって理解している。何しろ相手は生身でオブジェクトを爆破した功績を持つ人間だ。食事時のちょっとした話題にはピッタリである。
だからこそ、ナイトエッジ小隊の黒覆面はクウェンサーが工作室のドアを蹴破って中へ立てこもったのを知り、わずかに顔をしかめた。金属加工用の火薬があるのは彼らも知っている。そしてクウェンサー＝バーボタージュの人物像は、本人の言動などお構いなしに一人歩きする事も珍しくない。
「おそらくドアから突入しようとしたところで壁ごと吹き飛ばしに来るハラだ。順路を無視しろ。相手は壁をすり抜けられるものと思え」
そして爆発があった。
工作室の四方の壁が同時に吹き飛ばされる。

しかし予想外の出来事が起きた。

壁を吹き飛ばした事で荷重に耐えられる力が失われたのか、工作室の真上の天井がまとめて落下したのだ。

「……何だ？　自滅したぞ」

所詮は素人か、と男は思う。奇抜なアイデアというのは、往々にして机上の空論から現実へ変換する過程で誤作動を起こす。それがたまたま成功すると、プロのセオリーをすり抜けて思わぬ損害を生み出す、という訳だ。

過去にオブジェクトを葬ってきたのも、真相はそんなところだろう。

「チッ。不発弾野郎が」

崩れた壁を通過する形で、ナイトエッジ小隊の四人は工作室……厳密にはその跡地へと踏み込む。天井が崩れた事で、各種工作機械どころか床の色さえ瓦礫で分からなくなっている状態だった。

「掘り返すのは面倒だな」

「外のクズどもに任せては？」

「施設自体が機密扱いだから中に入れられない」

「……、……」

四人目の声は聞こえなかった。

厳密には何かを口走ったのだろうが、それは誰の耳にも届かなかった。
理由は簡単。

クウェンサーが室内に仕掛けていた、第二陣の爆弾が起爆したからだ。

衝撃波は四方から内側へ席巻するように撒き散らされた。中にいるナイトエッジ小隊は、体の鍛え方など関係なく一撃で昏倒させられる。どんなに屈強な人間だって火の中や水の中に放り込めば命を落とすように、その衝撃はプロアマの線引きなど関係なく『人間』の構造的な限界を超えたダメージを与えるものなのだ。

ちなみにクウェンサーがいたのは瓦礫の下。

柱の位置を確かめてから設置した第一陣の爆弾は、クウェンサーがうずくまった場所に空洞を作る形で天井を崩落させた。

そしてクウェンサーが起こした爆発は、爆炎も、破片効果も、有害な副産物も生み出さない、衝撃波だけを撒き散らすタイプだ。音の壁で敵を叩く攻撃は、瓦礫のかまくらを貫くほどの威力は作らない。

「……感謝しろよ。非殺傷の爆発なんて滅多に受けられるもんじゃない。普通に鉛弾喰らう方がはるかに多いし」

意識の途絶した黒覆面の一人からカービン銃を拾い上げ、携帯端末を抜き取る。ナイトエッジ小隊はクック追加諸島全体に数十人も展開されている。ここの連中がやられた事に気づけばすぐに増援を送ってくるはずだ。

「となると大規模な戦闘が始まる前にケリをつけるか。あのノートパソコンの正規通信は軍上層部が監視しているって話だし、あそこからSOSを出せば自然と通報できる形になる」

「また物騒なプランだね。ついでに必要もない」

いきなり女の声が飛んできた。

クウェンサーが思わずカービン銃を構えてそちらへ振り返ると、白衣にビキニの設計士クレア＝ホイストが軽く両手を上げていた。意外に近い。ちょっと目を離すと飛びかかられそうな位置だ。

彼女はニヤニヤと笑いながら、

「そもそも事態はきちんと把握できてる？」

「電波が完全遮断されているはずの施設の中で、上層部に監視されないように外部と通信するための壁の小細工。『資本企業』との連携の疑惑。アフリカ南端の水資源ビジネスとメガソーラー発電ビジネスの競合。ヘイヴィアとの連絡は途絶。……そしておまけに、アンタはアフリカ南端で活動している『ベイビーマグナム』に消えてもらいたがっていた」

「疑惑を固める根拠がその携帯端末に入っている。確かめてみては？」

「……目線を外して襲撃のチャンスを与えるほど馬鹿じゃありません」
「そんな小者の発想はしないよ。衝撃波で仕留めたんでしょ。精密機器が壊れていないかどうか、電源ぐらいは入れてみるべきだと思うけど」
「それなブッ!?」
クウェンサーが親指を使って携帯端末の電源を入れようとした直後にクレアの蹴りが飛んだ。慌てて距離を取ろうとするも、その前にクウェンサーの全身に突き刺さるような痛みが走る。両足から力が抜け、ストンと真下へ落ちる。
「スタ、ン……ガン!?」
「最初に見せていたはずだけど？」
かろうじて動く両腕を動かして倒れるのを阻止しようとするクウェンサーの背に、クレアはゆったりとした動作で腰を下ろした。四つん這いの少年を椅子にする形だ。
後頭部にスタンガンの電極を押し付けながら、クレアは携帯端末を拾い上げる。
「じっとして」
「こんな状態でスタンガン使ったら、アンタの尻にも高圧電流が伝っていくぞ……」
「でも君よりはマシ。頭頂部に三〇万ボルトを浴びせたらどうなると思う？　取扱説明書にも、心臓の次にヤバい場所って書いてあるね」
簡単に言いながら、クレアは足を組み、片手で携帯端末を操作していく。

「証拠を消すつもりか」
「いいや。頃合いだろうし、ここで始めるよ」
「何を？」
「答え合わせを。『外』も騒がしくなってきたみたいだし、オブジェクトの整備部隊の連中が島の調査にやってくると面倒な事になる。私の息がかかったナイトエッジ小隊……ユニコーンだけでは抑えきれない。だからその前に決着をつける。分かった？」
携帯端末のアプリの一つなのか、クレア＝ホイストは通話を始める。クウェンサーが天井に風穴を空けたためか、場所を移動しなくても電波のやり取りはできるようになったらしい。通話の相手はどうやら軍の高官のようだった。
それは『正統王国』の？
それとも『資本企業』の？
「准将。アフリカ南端のトリガーを引こうと思うんだけど」
『……動画チャットだからカメラも動いている事を通達しておく。何というか、奇抜な状況だな』
「新しい趣味よ。何しろ暇なもので」
適当な調子でクレアは言う。
准将と呼ばれた男の方が本題に切り込んでくる。

『タイミングは一任しているので君の判断に従うが、アフリカ南端のトリガーはまだ早くはないかね？』

「最高値はあくまでも理論上のものよ。現実にそこを狙うとかえってガタガタになる」

そこでクレアはスタンガンの電極でクウェンサーの頭頂部を軽くつついた。

注目を集めた上で、彼女は言う。

携帯端末ではなく、クウェンサーに向けて。

「……と、これがアフリカ南端を巡る内幕だ。雲を使った水資源ビジネスとメガソーラー発電ビジネス。競合する二つのビジネスを使った金融ブラックホールを利用して、『正統王国』内の有力者にダミーの投資話をバンバン誘って借金漬けにする」

『ちょっと待て。何故それを話す？』

「君は私が『資本企業』と繋がっていたと思っているかもしれないが、残念ながらそれはハズレだ。いるんだよ、『正統王国』の中にも『正統王国』の有力者を弱体化させようとする輩が。政争だの内部抗争だので色々な」

『口を閉じろ!!　情報の価値が分かっていないのか!?』

准将と呼ばれる男の叫び声が聞こえるが、クレアはニヤニヤしたまま言葉を続ける。この段階にきたら、どう思われようが知った事ではない。言外にそう語っているようだった。

「しかし無限に負債を拡大させる金融ブラックホールにもイベントは必要なんだ。ずーっと平

坦だと人は飽きる。頭をカッカさせていた熱が冷める。すると投資家はこれが危険な取引だと気づいてしまう。だからそうならないように、定期的なイベントを用意する必要がある。それは君もご存知の通り、アフリカ南端に派遣された……」

「『ベイビーマグナム』……？」

「『資本企業』とぶつけて派手に負ければ戦局が動く。水資源ビジネスは『正統王国』が、メガソーラーは『資本企業』が支援しているからね。投資家達の金は一斉にメガソーラーへ動くでしょう。ダミーの名義を経由して、『正統王国』の人間だって分からない形でね。でも結局、金融ブラックホールが壊れるほどじゃない。注げば注ぐだけ負債は膨らんでいく」

今回の私の仕事はね、とクレア＝ホイストはささやく。

スタンガンを、クウェンサーの頭頂部から離しながら、

「全世界規模の戦争やってる最中に、身内の争いで国力を削っている馬鹿を炙り出す事。ユニコーンを使って、軍上層部の監視を受けないネットワークを独自に作って行動していたのもそのためよ。罠にかける相手にこちらの動きを知られても困る訳だしね」

『……、……!!』

ブツッという音が聞こえた。

准将と呼ばれた男が通話を切ったのだろう。

だがクレアに慌てている様子はない。

「もう遅い。ウィスキーを呷って拳銃自殺する暇も与えずに、督戦専門の『黒軍服』達が踏み込むでしょ」

「……囮、捜査だった？」

「今回はそういう側面があっただけ。逆に私が汚い事をする時もあるよ。だから私は、これまでの一件で君達が妨害を仕掛けてきた事について、それほど怒っている訳ではない。別に机上の規律通りに事が進まないと胃袋が壊れる優等生って訳じゃないからね。清濁併せ呑む戦争っていうのはもっと歪なものだろう？　むしろ事情を知らない君達の目線で考えてみれば、とても清々しい決断だったと評価できる」

戦争。

クレア＝ホイストはそう告げた。

クウェンサーもまともに銃を握る機会は極めて少ないが、この女性はさらに少ないはずだ。生まれてこの方、一度でも撃った事があるかどうかも怪しい。

その彼女が。

「もっと大きく取り扱おうクウェンサー君。これが君達のもっと上にある戦争だよ。オブジェクトを使った戦争は莫大な金がかかる。そしてそれ以上の利益が発生する。そうでもなきゃ、こんな面倒な戦争を続けようなんて誰も考えないよ。そこではいろんな思惑が生まれて、いろんな衝突が生まれる」

「金融ブラックホールの方はどうするんだ？　『正統王国』の有力者は現にそこへ大量の金を注ぎ込んでいるんだろう!?」

「あれは、金融ブラックホールに見せかけただけのダミー市場よ」

クレアはすらすらと答える。

「アフリカ南端の胆は、雲を使った水資源ビジネスと太陽光を使ったメガソーラー発電ビジネスが、天候の面で競合を起こすという点にある。どちらかを立てればどちらかが倒れる、それを交互に繰り返す。シーソー市場によってどちらに資金を注いでも、収益より負債の方が大きくなってしまう。だから赤字しか膨らまない。そういう形の金融ブラックホールだね」

「それが……？」

「おやあ？　気づかないかな。我々はある程度、自由自在に雲を生み出して雨を降らせる仕組みを完成させているんだよ？」

クレアは楽しそうに、

「だったら施設を複数用意すれば良い。地域Ａに水資源用のプールとメガソーラーのパネル、地域Ｂにも水資源用のプールとメガソーラーのパネル。後は、地域Ａと地域Ｂへ『交互に』雨を降らせる。地域Ａで雨を降らせている時は、晴れている地域Ｂから電気を送電して、代わりに配管で水を送ってもらう。地域Ｂで雨を降らせている場合はその逆をする。……これで水と電気、どちらも恒久的な供給が可能となる。ビジネスの競合は解消されてみんな仲良く儲ける

事ができるって訳。お分かり？」

「そんな、簡単に行くのか？」

クウェンサーは疑問の声を発する。

「アフリカ南端は戦争国だ。勢力図をまたいでパイプラインを築こうとすればいろんな摩擦が発生する。場合によっては一国の中にあるパイプラインを越境してきた部隊が破壊する事だってある。簡単にはいかないぞ」

「そう思ったから、あの准将もアフリカ南端が本物の金融ブラックホールだと信じ込んだ」

しかしクレアの余裕は壊れない。

「そして私は広告塔代わりに慈善へ精を出す建築会社の株を丸ごと買収している。地域をまたいでアフリカ南端の広い範囲で顔の利く団体よ。彼らを使って地域間での協議を進め、まあそれでも協力的になってくれないヤツはユニコーンに襲わせたりもして、とにかく基盤は整えてある。パイプラインが破壊される事はない。……安定的なインフラ整備が進んで困る人は基本的にいないしね」

「……」

クレアには『正統王国』を裏切るつもりはなかった。

ユニコーンは軍上層部内の裏切り者に感知されず工作を行うための手駒として使っていた。

むしろ、金融ブラックホールプロジェクトに利用されようとしていた『ベイビーマグナム』

を救う側の立場だった。

が。

ホッとしたクウェンサーの背中へ大きくのしかかるように、クレア＝ホイストは一度腰を浮かせてから改めて体重をかけて座り直す。

「ぎゃあ!?」

「さて今度は君が私の答え合わせに付き合ってもらう時間だ。……工作室は丸ごと爆破。ユニコーンの四人組は見事に昏倒。どうやら通信を聞く限り、『外』ではティルトローターを改造したガンシップが一機、海に落ちたらしいね。さて君はこれにどうやって合理的な説明をつける気かな？」

クウェンサーは口をパクパクさせるが、言葉が出ない。

そんな彼を見下ろし、足を組んでクレアは笑った。

「つけられないなら左遷かな。でも、ここよりひどい場所に心当たりはないんだけど？」

13

そんな訳で最短記録だ。

『緩やかな牢獄』であるクック追加諸島から二日三日で別の場所へ転属させられる兵士はクウ

エンサーとヘイヴィアが初めてだ。自販機コーナーに佇むクレア＝ホイストが彼らを乗せた輸送機をノートパソコンのウィンドウで眺めていると、割り込むように通信が入ってきた。

ナイトエッジ小隊……の皮を被ったユニコーンだ。

『記録は改ざんできる状況だった。場所は工作室で、火薬が静電気で爆発したとかな。一度不問に付してから、我々の構造に組み込んでも良かったのでは？』

「ティルトローターの方は難しいなあ。そしてあの二人はワンセット揃っていないと効果は発揮しなさそうだし」

『それでも、生身でオブジェクトを破壊する戦績は大きい。あなたの掲げる「上の戦争」にとっては』

「いやいや」

クレアは楽しそうな調子で、しかし否定した。

「あれは四方を壁で覆えば全部叩き壊して脱出するタイプよ。どんな障害で待ち構えてもね。だったら手元に置いておくより、離れたところにやっておいた方が良い。だから仲間にならないからと言って、移動中の輸送機を太平洋の孤島独立系ゲリラの携行型ミサイルに見せかけて撃ち落とす算段はする必要がない。邪魔だ」

『……』

「睨むなよ。不確定因子は有益だ。自分に関係のない状況へ放り込む事においては。対岸の火

事を眺めるような気持ちで見守ろう。何しろ相手は停滞した状況を覆すびっくり箱だ。開けずに放置するのは惜しいが、自分で開けたいとは思わない。そういうもんだろう？」

こうしている今も、世界各国をまとめ上げる『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』などの世界的勢力は様々な陰謀を張り巡らせ、組織や個人の利益のためにオブジェクト同士を激突させて戦争を起こしている。

安定した盤面は富の集中を促し、その集中は停滞と腐敗を招く。

お決まりのコースだ。

そして分かっていながら、それを打破するのは意外と難しい。

「知っているか？　うちの上も『御前試合』の正式な日取りを決めたようだぞ」

クレア＝ホイストは肩の力を抜いてそんな事を言う。

しかし、ナイトエッジ小隊のまとう雰囲気が、わずかに切り替わる。

「ボルガ方面の王位を決めるために行われる、オブジェクト同士の激突。馬鹿みたいな私闘だよな。それで血税と人命が散るという事が、どうも上の上の王様連中には分からんらしい」

『彼らにお上品な決闘ごっこをかき乱せるとでも？』

「確証はない。だがふんぞり返った連中の慌てふためくところは見てみたい」

あくまでも適当な調子で、冗談だとしても場合によっては不敬罪が適用されそうな事を呟

くクレア。

さらに続けて、彼女はこう言った。

「あれは設計士には向いていないなあ」

ポツリと呟いて、クレアはノートパソコンの画面を閉じる。

壁に背中を押し付けて、天井へ目をやる。

「……あんなヤバい思想でオブジェクトを組み始めたら、第三世代どころか第七世代ぐらいまで時代が一気に進んじゃうよ」

第二章　地獄よりも辛い汚れ仕事チーム　≫　アサバスカ方面輸送戦

1

北米大陸のさらに北の方。

一面、足元どころか天空も眼前も全部まとめて真っ白な吹雪に覆われた極寒の地に、五台の大きな軍用トラックが一列に並んで走っていた。車列の前後には戦車のような砲塔を備えた八輪の装甲車までついている。

明らかに異質な面々。

その軍用トラックの一台、幌のついた荷台の中に、クウェンサーとヘイヴィアは放り込まれていた。彼らの他にも二〇〜三〇人の兵士達が詰め込まれている。どのトラックも似たような状況らしい。

ヘイヴィアは『偶然』隣に居合わせた同年代の兵士に向かって、

「だからよ、嘘じゃねえって！　こう、どかーん!!　って乳なんだよ。どかーん!!　って。効

果音としておかしいのは分かってる。普通はぷるんとかたゆんとかだろうって。だが、どかーん！　だ。うちの上官サマを表現する言葉はそれしかねえ」

「は、はあ。それしかないと言われましても、いまいちイメージが……」

「実際に見りゃ一発なんだけどよ。軍のネットワークに写真とかねえの？　バストアップの証明写真だけで確実に分かるぜあの存在感」

調理師免許だけが取り柄らしい、その若い男の兵士に助け舟を出す形で、横からクウェンサーが口を挟む。

「吐く息も白い中、良くそんな減らず口が叩けるね」

「何かしゃべってねえと凍え死にそうなんだよ。暖炉とベッドと美女が欲しい気分だぜ」

「地球のどこにいても欲しいアイテムだよ」

「まったくさー」

ヘイヴィアはうんざりした調子で、

「こっちに来てから雪に埋まった砲弾を掘り出しては液体窒素で信管固めて引っこ抜く作業ばっかりだぜ。あんな旧式兵器、どうせオブジェクト使う正規軍じゃなくて地元のゲリラがばら撒いたもんだろ。やってらんねー。自分で撒いた不発弾ぐらい自分で処理しろってのー」

ごんごん、という金属質な音が鳴った。

全員がそちらに注目すると、荷台の床を軽く拳で叩いたリーダー格の女が声を張り上げる。

「注目」

彼女の頭にはヘッドセットが取り付けられていて、他のトラックにも声が届くようになっているのが分かる。

「世界各地からかき集められた消耗品の諸君、これから楽しい不名誉任務のオンパレードだぞ。我が隊に正式な番号はない。存在しては困る部隊だからな。私達は死んでも国際上の戦死者数にカウントされないから気をつけろー。だが呼び名がないと連絡面の不都合があるから通称だけは用意されているぞ。バックグラウンド部隊。背景のように溶け込め。前に出るな。出る杭として打たれた諸君は座右の銘にすると良い」

「はいよ」

ヘイヴィアがニヤニヤしながら声を出す。どうやら顔が綺麗で胸がデカければ後は何でも良いらしい。

「今回のお仕事は何ですかね。軍高官の不倫相手を始末するとか？」

「良い質問だヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵。隊の半分はバックグラウンドの流儀を知らないだろう。先日、半分が吹っ飛んで補充されたのが諸君だからな。だから今回のクリスマスブーツ作戦について説明しておこう。発端は時代遅れのステルス爆撃機だ」

女は簡単な調子で言う。

「と言ってもどこかの都市を更地に変えるつもりはなかった。目的は秘密物資の運搬だ。しか

し隠密作戦を重視するあまり識別信号を切ってこっそり飛行していた結果……同じ『正統王国』の地対空ミサイルに落とされて、この白い山奥に不時着した」

「……馬鹿丸出しだ」

クウェンサーは思わず呟いた。

女は気にせず、

「この秘密物資、誰かが回収しなくてはならない。だから私達が派遣された。不発弾回収はこのためのデコイだな。おかげで同じ軍の中の人間でさえ、私達は『不発弾回収のためにあちこち奔走している下働き』という風に見えている訳だ。何が言いたいか分かるかな？」

「……基地にいる司令官に質問されても嘘をつかなきゃいけないって事ですよね？」

「そうだ。秘密物資については内外問わず回答禁止。まあ中身については気にするな。バックグラウンドに話が回ってきた時点で、相当ヤバい事情を抱えているはずだ。詮索すると多分死を招く。とにかく落ちたステルス爆撃機から秘密物資をトラックに積み替える。一番近くの軍用空港までは八〇キロ。そこまで運べばクリスマスブーツ作戦は完了だ」

「下着ドロで集めたコレクションですかね？」

「その減らず口が死を招くと警告しているんだウィンチェル上等兵」

寒さに耐えるためうずくまったまま、クウェンサーは片手を上げて発言する。

「秘密物資を運ぶトラックと同じものに俺達が乗せられている理由は？」

「このアサバスカ方面は戦争国だ。『情報同盟』の拠点とも隣接している。秘密物資について誰かさんに傍受されている場合、襲撃の危険も高い。となるとダミーをいくつも用意しておいた方が、秘密物資が損失するリスクも減る訳だ」

「……俺達は『ハズレ』で吹っ飛ぶって事ですか」

チッ、と軽く舌打ちして、クウェンサーは幌の結び目近くにある隙間から外の様子を観察する。

猛吹雪に、白い山の数々。付近は針葉樹が多いが、全ての山が木々で覆われている訳ではなかった。一面の木々が切り倒され、滑らかな斜面が広がっている場所がいくつもある。ゴンドラ用のものだろう。鉄塔が並んでいる場所もあった。

「『安全国』に変更される寸前だったのに……スキーリゾートも情勢不安一つでこのありさまか」

「動物愛護団体は歓迎しているらしいぜ。密猟で絶滅寸前だった鷹だの熊だのが数を増やしているって」

「……あいつらすごいよな。失業率が増えて兵隊や路上生活者がガンガン死んでいるっていうのに、街のカラスを守るために税金ドバドバ使いましょうだってさ。あとこのトラック何で右側に傾いてんの？」

「あそこでうずくまっている馬鹿デカいパワードスーツのせいだろ」

ヘイヴィアが親指で示すと、ゴツいパワードスーツがしなやかで女性的な仕草で軽く手を振

ってきた。

一体どんな重火器を備えているのか、クウェンサーぐらいならすっぽり収まりそうな四角いコンテナケースを左肩の後ろに接続している。

「中身は落ち目のアイドルだって。完璧に歌って完璧に踊って完璧な笑顔を浮かべるらしいんだが、完璧すぎて可愛げがないらしい。戦場レポーターかＡＶデビューかでクリーンな戦争に参加したようだが、そこでヘマやって本格的に飛ばされたんだと」

「美人？」

「美人過ぎてつまらねえって。あっちのビジネスも分かんねえよな」

「……なんていうか、同性から嫌われそうなキャッチコピーではあるな」

「おーおー、そんな噂もあったっけ。どっかの広告代理店の馬鹿が『ボルガの王女よりも美しい』なんて書きたてやがったもんだから、不敬罪でレギュラー番組降板させられたって。完璧アイドルもボルガの姫もノータッチだってのに、周りが勝手に騒ぎまくるってのも悲劇だよな」

「ボルガの王女ってのが指示したんじゃなくって？」

「一度夜会で見た事があるよ。流石に長話はできなかったがな。身長二倍の護衛の兄ちゃんの背中にずっと隠れて上目遣いだ。嫉妬とは無縁のお子様だな、ありゃ」

クウェンサー達は暇なので完璧アイドルへちょっかいを出す事にした。デカいパワードスーツの近くへ寄って行く。

「へいへーい。近頃のライブってパワードスーツの免許がいるの？」
『テレビ番組で小さな城を造ろうって企画があった時に、建築用の免許を取らされたの』
「そんなガッチガチに固めているって事は、顔に保険掛けたりはしてねえのか？」
『先週が更新期間だった。多分、ヘマをしたから更新されていない』
「……でもパワードスーツが支給されているって事は、所属事務所はまだキズモノになってほしくないとは思っている訳だよな」
『傷の程度にもよる。適度な弱点ができるのを期待されているのかもね』
クウェンサーはヘイヴィアの袖を軽く引っ張って小声で言った。
「（……すごい豊富な人材が集まっているもんだね。ただアクション映画みたいに、各々の専門分野を活かして無謀な作戦を成功させられそうな感じじゃないぞ）」
「（……ま、あっちのソバカス君なんか携帯ゲーム機が凍りついてキレてやがるしな。つか、何であいつ戦場でＦＰＳやってんの？）」
バックグラウンド部隊の兵員補充サイクルの速さ……つまり戦死者数の多さは、ひょっとしたら敵が強いのではなく味方に足を引っ張られているからでは？　と思わなくもない状況だ。
「諸君」
ごんごん、と荷台の床を叩き、女のリーダーが言う。
「間もなくステルス爆撃機の不時着地点に着く。クリスマスブーツ作戦が始まるぞ。その前に

全員ココアを確認するように。諸君に配ったスティック状の袋だ」

クウェンサーは眉をひそめて、

「こんなのどうするんですか？　匂いが強いの飲んだら犬に追われますよ」

「飢えた兵士ってのは犬より鼻をひくつかせるもんだしな」

違う違う、と女は首を横に振った。

「不意のトラブルで散り散りになっても回収部隊は編成されない。この吹雪の中、八〇キロ歩いて軍用空港まで戻るのは過酷だぞ。レーションは凍ったら使い物にならない。そんな時、ココアの粉末に涙するかもしれない。ちまちま舐めれば命綱の代わりになるしな」

「まじですか」

「……福利厚生も充実した、楽しい職場だぜ」

2

ステルス爆撃機は、ブーメランにも似た形の全翼機だった。白い雪山には漆黒の機体が必要以上に映えている。

不時着したのは山と山の隙間……凍った川がある河原のようだった。足元は小さな石でデコボコしているため、当然、爆撃機の車輪はパンクしているだろう。体勢を崩して火だるまにな

っていてもおかしくない状況で、ここまで奇麗に着陸させたからには、パイロットも相当の優等生に違いない。

ミサイルによって破損したのは機体の右手側らしい。端の方から黒煙が立ち上っているが、目立った破損はそれだけだ。

「かすり傷じゃねえか。何で落ちたんだ？」

「全翼機は大容量だけど安定性が悪いんだ。猛吹雪だし、『上』は乱気流かもしれないな」

軍用トラックを降りた巨大なパワードスーツが、アーク系のバーナーを持ち出してステルス爆撃機のハッチを焼き切っていた。

分厚いハッチを取り外したパワードスーツがこちらに手を振ってくるのを確認して、女のリーダーが爆撃機の中を覗き込む。

パン!!　という銃声が響いたのはその時だった。

「あ？」

「何だ何だ。何で引き金引く場面になっちゃってるの!?」

思わず雪に埋もれる形で身を伏せる二人だが、それ以上は何も起きない。顔を見合わせてステルス爆撃機の方に近づいていくと、軍服に返り血をつけた女のリーダーがハッチから出てくるところだった。早速、赤い色は凍り始めている。

「秘密物資を確認。運び出せ」

「何があったんですか!?」

「負傷者を連れて行く余裕はない。私達もギリギリでやっている。慈善に精を出すか？　その場合、負傷者の代わりに諸君の何人かをここに置いて引き上げるしかなくなる訳だが」

「……、」

「そんな顔はするなよ。そっちの乗組員もクリーンな戦争の中じゃ未登録の兵士達だ。死んだって国際上の戦死者数にはカウントされない。私達と同じようにな。報告書では『正統王国』の軍服を着た誰かが死んだって事だけ記載される訳だ。身元を識別する材料も機会もないから破壊工作専門のコスプレマニアだと判断される」

「なんて野郎だ……」

呻くように言うヘイヴィアだが、それ以上はどうしようもない。文句を言っても死者が復活する訳ではないのだ。

女のリーダーは特に気にせず、

「急げ急げ。私達バックグラウンドは同じ『正統王国』にも極力活動を知られたくない訳だ。最近、この辺でユニコーンが潜伏しているのが確認されたらしい。彼らとかち合いたくない」

「やだやだ！　その名前聞きたくない!!　トラウマしかない!!」

クウェンサーは半ばヤケクソ気味に叫んで作業を始める。まずは血まみれのコックピットに向かって、後部の爆弾積み込み用のカーゴドアを開けるボタンを押す。巨大なパワードスーツ

を操る完璧アイドルがそこから機内へ入っていき、冷蔵庫大の金属コンテナを持ち上げてトラックに運んでいく。コンテナのサイズは大小あるようだった。

胸がむかつく匂いしかない機内から飛び出したクウェンサーが、パワードスーツに問いかける。

「重さどれぐらい？」

『銅像でも運んでいるみたい』

「銅像の重さが分かんないよ」

しかし積み替え作業自体はパワードスーツに頼るしかなさそうだった。他の兵士達も、ステルス爆撃機の周囲に散らばって見張りの方に回っている。……単に面倒臭そうな仕事を他人にやらせたいだけかもしれないが。

秘密物資の箱は多く、トラック三台を満載にするほどあった。

すると、始めは五台に分かれて乗っていた兵士達は、残りの二台にすし詰めにされる羽目になる。

むさ苦しい熱気にヘイヴィアが呻く。

「最悪！　全体的に最悪すぎるぜ!!　東南アジア辺りの満員電車みてえ!!」

「はいはい凍死するよりマシだろう。ほら乗った乗ったー」

女のリーダーは適当に言いながら、

「撤収するぞ。全員乗ったな、時間になったら乗っていなくても発進する。だから急いで全員集合」

乱暴に荷台を揺さぶりながらトラックが動き出す。大勢を乗せたせいで車のバランスがおかしくなっているのかもしれない。

「こんなに乗せちゃって……パンクとかしねえだろうな？」

「このトラックのタイヤは空気詰めてないらしいよ。全部合成繊維でみっちり埋まっているんだって。衝撃吸収分野が発達したからさ、今後は戦車と装甲車の中間みたいな、分厚い装甲を持った高速で動く兵器が出てくる可能性も……」

「分かったよ設計バカ！　人間サウナの熱気をこれ以上膨らませるんじゃねえ!!」

ちなみにクウェンサーは完璧アイドルに抱き着いている状況だが、彼女の格好が巨大なパワードスーツなのでありがたみはゼロだった。温もりも柔らかさもない。熱気の影響で今は無事だが、幌の隙間から冷風が吹き込んだら、凍りついた装甲板に頬の皮膚が貼りつきかねない状況だ。

と。

ポン、ポン、という、シャンパンのコルクを抜くような音が聞こえてきたのはその時だった。分厚い幌の外、かなり遠くからだ。

「なん……？」

クウェンサーが疑問を口に発する暇もなかった。

ゴッ!!　という爆音と共に、いきなりトラックが急停止したからだ。

すし詰めにされていたトラックの荷台では、摑まるものは何もない。急ブレーキの勢いを誰も止める事ができず、車内の全員が同じ方向へ押し付けられる。クウェンサーは自分の肋骨が悲鳴を上げる音を確かに聞いた。

「ぎゃあ!?　げぶっ、一体何だ!?」

「ヤベえ。ヤベえ!!　多分今の迫撃砲だ！　何か焦げ臭い。先頭の装甲車が吹っ飛ばされたんだ!!」

迫撃砲は野球の遠投のように、一度大きく空へ打ち上げてから、標的の頭上へ落とすタイプの砲だ。世界のあちこちで活躍するお手軽兵器である。

「え、駄目じゃん！　だったら無理矢理でも装甲車押しのけないと！　ここで止まっていたら……!!」

直後に、今度は真後ろから爆発音が炸裂した。おそらく最後尾の装甲車が撃破されたのだ。車列の先頭と最後尾を破壊されてしまうと、間にあるトラックは立ち往生してしまう。

「教科書に出てきそうな典型例だぜ!!」

「降りろ降りろ！　端から順番にトラックもやられるぞ！」

女のリーダーの叫び声に合わせて、兵士達が一斉にトラックの荷台から降車していく。完璧アイドルが強大な膂力を使って分厚い幌を引き裂いたのに合わせ、クウェンサーは車の横から強引に転がり落ちる。

しかし彼らが散開するのを敵は待たない。

ポン、ポン、というシャンパンのコルクを抜くような音がさらに響く。

「散れ！　伏せろ!!」

女のリーダーが矛盾する命令を飛ばす。

爆音。

クウェンサーの視界が真っ白に埋まった。

二つの眼球と一緒に顔面が丸ごと潰れたのかと思ったが、実際には少し離れた場所に落ちた砲弾が雪を舞い上げただけだった。しかし猛スピードの雪が顔に叩きつけられただけで、彼の平衡感覚は一時的に失われる羽目になる。

近くに伏せていたヘイヴィアが叫ぶ。

「クウェンサー、馬鹿！　トラックの下に潜れ!!　装甲車がやられたのはタイヤとサスペンションがやられたからだ。直接装甲を抜くほどの破壊力はねえ！」

「この猛吹雪で風がビュービュー吹いてるのに、何でこんな正確に当てられるんだ!?　普通、

迫撃砲って二、三発は『照準補正用の基準点』として試し撃ちするもんだろ！」

「ＧＰＳ迫撃砲だ！　砲弾を適当に打ち上げりゃ、後は衛星の補助で尾翼を動かして標的へ突っ込んでくれる。雪の上を散らばったってタッチパネルで狙い撃ちされるだけだぞ!!」

クウェンサーは雪の上を這って軍用トラックの下へ潜りながら叫ぶ。

「だったらジャミング仕掛けろよ!!」

「デカい装置背負った通信兵は真っ先に潰されてる。ついでに威張り散らしてやがった女の上官もな！」

「あっさり死にやがって！　あいつラスボスだと思っていたのに!!」

さらにいくつかの爆発が続き、味方の数がごっそりと減っていく。一緒に雪が舞い上げられるため、赤と黒のグロテスクな景色が覆い隠されているのはクウェンサーにとって救いだっただろう。

「このトラックだって何発もは耐えられないだろ。早く何とかしないとスクラップに押し潰されるぞ」

「いたぜ。いやがった。北西、一七〇〇メートル付近。山の麓に『情報同盟』の兵員輸送車が何台か停まってる。おそらくあの裏に迫撃砲を設置してやがるんだ！」

クウェンサーが双眼鏡で確認すると、確かに、砲塔を外した戦車のようなものがいくつも固まっている場所がある。装甲も分厚そうで、ライフル弾程度では撃ち抜けないだろう。そもそ

も距離がありすぎる。

迫撃砲は『一度大きく上空へ打ち上げる』ため、物陰に隠れたまま一方的に砲撃を続ける事もできる訳だ。

「携行型の対戦車ミサイルは!?　さっさと肩で担げよ!!」

「盾になってる兵員輸送車を火だるまにはできる。でも鉄くずの残骸はそのまま残るんだ。陰に隠れている迫撃砲チームまでは潰せねえ！」

ヘイヴィアはうんざりした調子で、

「こっちの攻撃は届かねえ。一方的に野球のボールをぶつけられるだけ。どうするんだこんなの」

「なあヘイヴィア。連中、秘密物資について知ってて襲撃してきたと思うか？」

「秘密物資のトラックを盾にしてりゃ助かるかもって？」

ヘイヴィアは眉をひそめ、

「GPS迫撃砲だけで襲撃仕掛けるヤツなんていねえよ。ありゃ兵力の一部分。砲で足止めしている内に歩兵がわらわらと近づいてくるぞ。『情報同盟』の連中が盾に使ってる兵員輸送車だけで六〇～七〇人は運べるはずだぜ」

「だから何だ？　どっちみちGPS迫撃砲はさっさと潰さないと」

クウェンサーはバックパックから粘土のような爆弾を取り出すと、棒状の信管を突き刺しな

がら、トラックの外へ目をやる。
探しているのは、パワードスーツをまとっていた完璧アイドルだ。
「へい、へい！　まだ動けるか？　今から爆弾で雪を舞い上げてスモークの代わりにする。その間にお前は先頭の装甲車まで突っ走れ！」
『あの装甲車はもう壊れている！』
「だから砲塔だけ引っこ抜け！　発射方式は電気着火だ。千切ったコードを押し付ければ砲は発射できる！」
クウェンサーはトラックの下から這い出て、プラスチック爆弾『ハンドアックス』を雪の上に放り投げる。パワードスーツも巻き込む形で起爆すると、分厚い装甲に守られた完璧アイドルは装甲車に向かって走って行った。
後ろでヘイヴィアが叫ぶ。
「無理無理！　馬鹿野郎!!　装甲車の上についてんのは対人用の八〇ミリだ。見た目は戦車みてえだが、あくまでも破片で人肉を裂くためのもんだ。装甲車両を正面から撃ち抜くほどの貫徹力はねえんだよ!!」
「そんなのは分かってる！」
クウェンサーは叫びながら、完全にトラックの下から抜け出した。起き上がり、腰を低く落としたまま壊れた装甲車へ走って行く。

少し離れた場所へ、何発もの砲弾が落ちていく。
外れているのではない。GPS迫撃砲の狙いは正確だ。クウェンサーの代わりに、他の兵士達の命が散っているのである。優先順位が低いため、後回しにされているに過ぎない。
装甲車の上部から砲塔を引っこ抜いたパワードスーツの真下へクウェンサーは潜り込む。砲弾は基本的に自動装填だが、弾詰まりを起こした時のために手動排莢も残されている。クウェンサーは太いレバーを引いて、装填されていた砲弾を雪の上へ落とした。
砲弾のサイズは、二リットルの魔法瓶を三本ほど縦に連結させた程度。中にぎっしりと金属が詰まっているぐらい重たい。
『どうするの？』
「信管を差し替える」
砲弾の先端を工具でこじ開け、中にあった信管を普段自分が使っている無線信号式に付け替えて、カバーを閉じる。
肩を使って強引に砲弾を持ち上げ、腰が悲鳴を発するのを抑え込んで、クウェンサーは何とか砲弾を再装填していく。
「方位三四〇九！　仰角一二度！」
『それだと盾に使っている兵員輸送車まで届かない。手前に落ちる』
「それを狙ってるんだ！」

砲塔の真下で工具を動かすクウェンサーは、いくつかのコードを切断し、両手で摑む。

「構えろ。撃つぞ！」

むき出しの導線同士を接触させた直後、爆音が鳴り響いた。

雪の上にひっくり返ったクウェンサーのすぐ近くに、衝撃を殺し切れなかったパワードスーツが倒れ込む。

彼は砲弾の行方を見ずに無線機を強く摑む。重要なのは砲弾の位置ではなく正確な時間だ。

完璧アイドルの言った通り、砲弾はＧＰＳ迫撃砲を隠す兵員輸送車まで届かず、その手前の雪の上へと落ちた。

しかし信管を付け替えているので、着弾と同時に砲弾が起爆する事はない。

するとどうなるか。

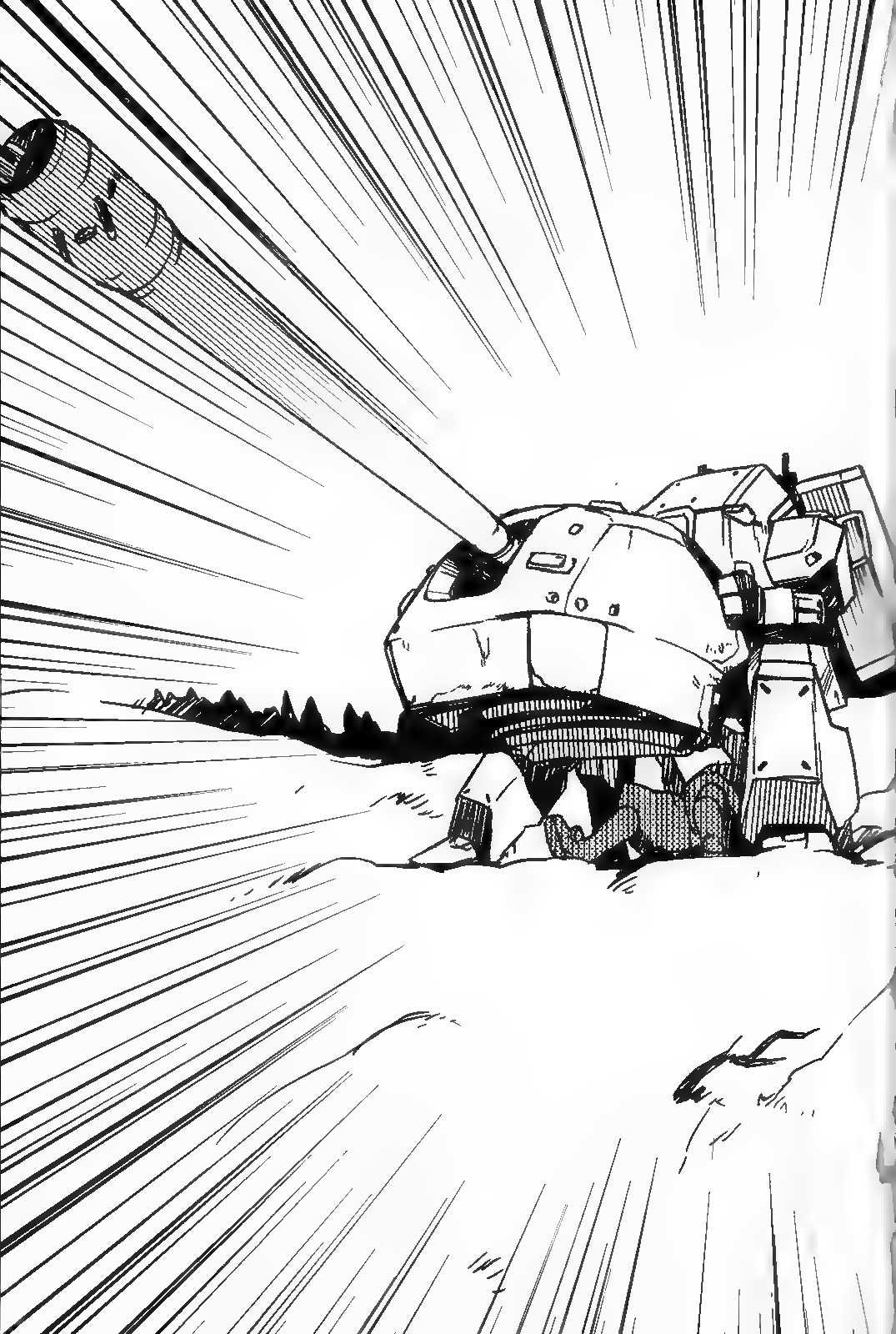
凄まじい速度で発射された勢いを殺す事ができず、砲弾はそのままバウンドする。勢い良く蹴ったサッカーボールのように。

それは兵員輸送車を飛び越えた。

直後に、クウェンサーは無線機のボタンを押す。

キュガッ!!　と。

ＧＰＳ迫撃砲とそれを操る兵士達の真上で、砲弾は数百の破片を撒き散らす。



「……GPS迫撃砲の沈黙を確認。くそ、耳が痛い。陸に上げられた深海魚の気分だぞ」

白い雪の上に突っ伏したままクウェンサーは呟く。

彼は首を振りながら、

「ヘイヴィア！　まだ生きている兵士と使えるトラックを確認して！　あとアイドルちゃんはそこどけ！　デカいケツに押し潰されるところだったぞ!!」

『それはセクハラだからね』

「馬鹿！　こんなゴツいの見せつけられたってピクリとも反応しないよ!!」

雪の上から起き上がるクウェンサーだったが、こちらへ集まってくる人間の数はあまりにも少ない。最初は一五〇人前後いたのに、今では一割程度しか残っていない。

「トラックや装甲車の乗組員もやられたのか？」

『トラックの方は迫撃砲の破片が強化ガラスを貫通したみたい。装甲車の方は先頭の車両がやられてる。ハッチを開けて機関砲を構えていたのが仇になって、車内まで衝撃波が入り込んだようね』

生き残ったのは百戦錬磨の白兵戦のプロフェッショナル……とかではなく、衛生兵とか調理師免許を持った補給兵とかばかりだった。クウェンサーも人の事を言えた義理ではないが。

ヘイヴィアが深い雪をザクザクと踏みながらこちらへ近づいてきた。

その表情に安堵はない。

「ヤベぇって！　さっさと離れねえと本隊が来る！」

「本隊？」

「ＧＰＳ迫撃砲は足止めだっつったろ！　兵員輸送車の数から見て、多分六、七〇人はいる。こんなメンツじゃ蜂の巣にされるだけだ!!　秘密物資が何だか知らねえが、こんなもん守りながら押し返せる訳がねえ!!」

クウェンサーは分厚い装甲に包まれた完璧アイドルを親指で示し、

「普通の歩兵が相手ならパワードスーツで何とかなるんじゃ？」

「携行型のミサイルでもありゃ一発だよ！　そもそもアイドルちゃんって兵装は何持ってんだ？　左肩の後ろにジョイントしているコンテナケースの中身は!?」

『んー？　「モーニングスター」とドラムマガジンをいくつか』

「よりにもよってだぜ……！　誤爆率ワースト一の擲弾機関砲じゃねえか!!」

ようは、缶コーヒーのようなグレネードをマシンガンのように連射する兵器だ。重量や反動が大きいため、普通は台座に固定したり、ヘリや装甲車に備え付けて運用するものである。

『対テロ関係の突入作戦ではハイスコアを叩き出しているって説明を受けたけど？』

「そりゃ狭い屋内を爆風で埋め尽くすだけだ。分厚い装甲があれば対人用の破片効果は強引に無視できるからな。だが周りにいる味方はもれなく破片の嵐に呑み込まれちまう」

『人質やコンピュータの近くの敵兵を撃ち抜くために、サブで五ミリの狙撃弾も使えるようになっているし』

「物陰からびっくり箱みてえにクソ野郎が飛び出してきた時、いちいち『切り替えてから』撃てるか？　ついうっかりで俺ら粉々になっちまうぞ。こっちは駄目な例として教本に掲載されるつもりはねえ！」

自分の命が関わる場合のみ驚くべき謙虚さを発揮するヘイヴィアなのだが、今はえり好みできる状況ではない。

コンテナケースの中から出てきた『いわくつきの一品』を見てガタガタ震える彼に、完璧アイドルは世間話のような調子で尋ねる。

『秘密物資を盾にして戦っては？』

「多勢に無勢だ。複数の方向から囲まれたらどうしようもねえ」

「へい、へい」

クウェンサーは呟いて注目を集めてから、

「ヘイヴィア。くたばった仲間から、狙撃銃とかロケット砲とか、一〇〇〇メートル超えの火器を片っ端から集めて来い。そしたら散開してこの場を離れる」

『クリスマスブーツ作戦を放棄するって事？』

「デカブツを守りながら戦うのは難しい。それは敵さんにとっても同じはずだ」

彼は軍用トラックを指差し、

「だったら立場を交換してもらおう。一度、連中にこのトラックを預けてから、複数の方角から長距離狙撃で数を減らす。……数では負けていても、トラックを守らなければならない『情報同盟』は思った通りの力を発揮できないはずだ」

3

クウェンサーの作戦は功を奏した。

複数の方角からの狙撃はもちろん、一時的な撤退の前に、クウェンサー達が雪の下にプラスチック爆弾や装甲車の砲弾の余りなどを埋めておいたのも役に立った。遠方からの銃弾と、足元からの爆発。その波状攻撃で『情報同盟』を潰走させるに至ったのだ。

「戦力差何倍って話だよ。隠密作戦じゃなきゃ勲章モノじゃないの？」

「そうも言ってらんねえぜ。七割撃滅で逃げ帰った。総数ならまだ連中の方が上だ」

『増援を呼ばれるかもしれない。早くトラックに乗って軍用空港に向かった方が良い』

と、クウェンサー達が軍用トラックの車列に取りつき、新しい運転役を配置した時だった。

遠方から雷雲が近づいてくるような音が聞こえた。

マイナス二〇度の中、それでも全身から嫌な汗が噴き出すのをクウェンサーは自覚する。

「まずい……。まずい!!」

「おいクウェンサー、この音って!?」

「お察しの通り、静電気式推進装置のものだ。オブジェクトが来るぞ!!」

連なる山の陰から、何か巨大なものが、ぬっと現れた。

数十メートル大の巨体。一〇〇門以上の砲。大都市圏破壊用のＭＩＲＶの直撃すら耐える分厚い装甲を備えた超大型兵器。戦争を象徴する鋼の塊だが、それはこれまでクウェンサー達が眺めてきた機体とはどこか雰囲気が違っていた。

球体状本体を廃した、ラグビーボールにも似た流線形。

主要な推進装置は巨大なソリにも似た機構なのだろうが、それとは別に、本体後部にロケットエンジンのようなものがいくつも取り付けてある。

「……何だありゃあ？　速度重視の第二世代か？」

「オブジェクトの本体が球体なのは、地面に埋めた核地雷も含めて、全方向からの大規模攻撃に耐えるためのものだ。あいつはその可能性を捨てている。この時代に核攻撃はありえない、オブジェクトとの戦闘のみを考慮した、前面装甲だけを分厚くしたモデルだ。これまでとは設計思想そのものが違うぞ……」

逆に側面の装甲はこれまでの機体より薄く、旧式兵器でもダメージを与えられそうな気もするが、あんな怪物と真正面から撃ち合うつもりはない。見るからに機動力が高そうな機体だ。

一度気づかれたら、雪の上のトラックではまず逃げ切れない。
そして幸い、クウェンサー達には逃走のためのチャンスが残されていた。
「おい、何だこの音。もう一機来るぞ……、おい、あれって!!」
『「ベイビーマグナム」だ』
「ヤバい。隠密作戦の途中だろ。多分、お姫様達は俺達の存在に気づいてない。ここで砲撃戦やられたら俺達も巻き込まれるぞ!!」
生き残った兵士達は慌てて軍用トラックに乗り込み、エンジンをかける。ヘイヴィアは運転席に、クウェンサーは助手席に、パワードスーツは荷台へ入ったようだ。車体が後ろ側へ若干沈み込んでいるのが分かる。
「おいおいおい！　『情報同盟』のラグビーボールの砲がこっち向いてるぜ！　多分捕捉されてやがる!!」
「だだっ広い雪原を進んで軍用空港に向かったら、途中で撃たれるって事!?」
「今はお姫様との戦闘を優先しているみてえだが、攻撃のチャンスを窺ってるって感じだな。どのトラックに秘密物資が積んであるか分からねえってのも躊躇している理由かもしれねえ。オブジェクトの攻撃は破壊力がデカすぎるからな」
「でもどうやって撒くんだ？　あれはレーダーだのセンサーだのの塊だろ？　遮断されやすい山間部だからって、そう簡単に消えられるものじゃないぞ」

「助手席に座ってんならナビやれよ！」

ヘイヴィアは片手でハンドル操作をしながら、もう片方の手でカーナビを操作する。小さな画面に目をやって、

「出てきた出てきた。トンネルがあるぞ。スキーリゾートだった時代に色々ショートカットするために、そこらじゅうの山に掘りまくってる。中は迷路だぜ。飛び込むならここしかねえ!!」

車載無線を使ってクウェンサーが他のトラックにも指示を飛ばす。トンネルまでの短い距離を全速力で突き進む間にも、二機のオブジェクトの戦闘が繰り広げられる。

『情報同盟』のラグビーボールは予想通りの高機動型だったが、素早いフットワークの他にも脅威的な性能が隠されていた。

「うわっ!?　クウェンサー、今の見たか!?」

「八本のレーザーが……いきなり曲がって『ベイビーマグナム』を取り囲んだ!?」

クウェンサーの肉眼では、雪の結晶を引き裂いたオレンジ色の光条の、さらにその残像しか捉えられない。しかしまぶたに焼き付く過去の像は、生々しい恐怖を与えてくるには十分なインパクトを備えていた。

ただでさえ、光の速度で襲いかかるレーザー兵器は旧式兵器にとっての死神だったのに、時代というヤツはいくらでも生身の兵隊を置いてきぼりにするものらしい。

「フォトニック結晶の粉末でもばら撒いているのか……？　この烈風の中で正確に方向まで整

えてきたところを見ると、連中、ナノテクまで軍事に持ってきているのかもしれない」

「……何でお姫様は回避できてんの？　あれ、砲の発射のタイミングを先読みして機体を動かしてんだろ。直角に折れるレーザーに対応できるとは思えねえんだけど」

「光に干渉するような『何か』があるんだ。アクティブ式の紫外線センサーとかで設置場所を読み取れるのかもしれない」

お姫様の砲がラグビーボールとは関係ない場所を撃っているのも、そうした『何か』を事前に潰すための策なのかもしれない。

しかし巻き込まれる側としてはたまったものではない。

外れた砲弾は、戦場のあちこちへ落ちてクレーターを作る。当然、それはクウェンサー達のいる方向もお構いなしにだ。

「ちくしょう！　死ぬ死ぬ!!　もっと地球に優しくなろうぜ!!　星が割れてるよ!!」

「なあヘイヴィア。敵と味方、殺されるならどっちの砲撃が幸せかな!?」

不気味に横滑りする軍用トラックを何とか操りながら、クウェンサー達の車列はトンネルへ飛び込んでいく。

「真っ暗！　今さらだけど自殺行為だよ!!」

「徐行しろ。徐行だ！」

ヘイヴィアは車載無線に向けて叫ぶ。

「どこで崩落が起きているか分かんねえ！　トラックのライトだけじゃ見つけるのは難しい。誰かトラックの前に立って、落石だの崩落だのがないか確認しろ!!　とりあえず何もしてねえクウェンサーは決定!!　ハンドル握ってないヤツは全員降りろ!!」

クウェンサーはＧＰＳ迫撃砲でベコベコに歪んだ助手席のドアを開けて外へ出る。トラックの荷台からパワードスーツの完璧アイドルが降りてくるのも確認した。

「……吐く息は白いけど、でもさっきまでに比べれば随分暖かく感じるな。風が入ってこないからか？」

『このトンネル、先はどうなっているの？』

「一本道じゃないよ。複数のトンネルが交差しているから、出口は何パターンもある。とりあえず山の向こう側まで行っちゃえば、ラグビーボールのセンサー走査を防いでくれるはずだ」

『……問題は、崩落で出口までの道が塞がれていないかどうかね』

「出口までの道が確保されているなら、こっちの入口を爆弾で塞ぐ事もできるんだけどな」

そんな訳で、徐行する軍用トラックの前に立って障害物の有無を確認しながら歩いていくクウェンサー達。あちこちに一抱えもあるコンクリートの塊が落ちていた。ライトを真上に向けると、トンネルの天井にいくつもの太い亀裂が走っている。塊はこれが剝離したものなのだ。

「……破片が落ちてきただけで頭蓋骨が割れそうだぞ」

五〇メートルサイズの巨体が潰し合っている事を考えると、これは見ていて楽しい光景では

ない。砲撃に合わせて今もトンネルは不気味に震動していた。山に直接コイルガンでも撃ち込まれたら、破片が剝離どころかトンネルごと生き埋めにされかねない。

「しかし、山を越えたら軍用空港までどれだけ遠回りする羽目になるんだ？　やられた味方からレーションを集めておくべきだったかも」

『生き残った兵士の中に、調理師免許持ってる子がいるって』

「食材どうするんだよ。トンネルの中って何住んでるの。ネズミ？　コウモリ？」

トンネルの壁にライトを当てると、掠れた文字で『出口まで七キロ』という表示が書かれているのが分かる。正直、うんざりする距離だった。常に足元に気を配り、崩落の危険に怯えながらコンクリートの塊をトンネルの左右へ押しのけるのだ。バイトの棚卸しの方がまだマシだろう。

「アイドルちゃん頑張って！」

『「正統王国」でレディファースト知らない男の価値って犬の糞以下だよね』

他力本願で力作業をすり抜けていき、トンネルを二キロほど進む。複数のトンネルが交差している場所だ。

クウェンサーはライトをあちこちに向けて、

「……正気かよ。ただでさえ薄暗いトンネルの中で、信号もなし、一時停止もなし。ちゃんと合流できたのかね。魔のトンネルとか呼ばれているサマが目に浮かぶよ」

『光源がある』

デフォルトでセンサーの恩恵を受けている完璧アイドルがそんな事を言った。

『ドラム缶。いくつかの燃えカスが残ってる。私達の接近に気づいた誰かが慌てて消そうとしたみたいに見える』

「発見発見。……ドラム缶の近くにデカいトラックが停まっているぞ」

無線で車列の方に報告すると、機材からヘイヴィアの声が返ってくる。

『「情報同盟」か？』

「知るかよ。でも車は民間モデルだぞ。戦争国のボロトラックって感じ」

言い終える前に変化があった。

ドン！　という銃声と共に、完璧アイドルのパワードスーツに火花が散ったのだ。

クウェンサーは慌ててアイドルの陰に飛び込みながら、

「撃ってきた！」

『結局「情報同盟」なのか現地の人間なのか、どっちなんだ!?』

「知らないけど撃ってきてる!!」

『なら撃ち返せ！　全員無力化しろ!!』

「嫌だよ！　ただ遭難しているだけの民間人だったらどうするんだ!?　お邪魔しているのはこっちなんだぞ!!」

盾にされている完璧アイドルのため息が、スピーカー越しに聞こえる。

『女の子の陰に隠れながら言う台詞じゃないね』

「うるさいな！　もう少しそのままでいろ。くそ！」

一五〇センチはある擲弾機関砲を片手で振るパワードスーツは適当な調子で、

『「モーニングスター」でやっちゃう？』

『何としても止めろクウェンサー！　ド素人に誤爆率ワースト一の大火力を扱わせるんじゃねえ!!』

しかしクウェンサーは答えない。パワードスーツの陰に隠れながら、プラスチック爆弾『ハンドアックス』を取り出している。

『おい、何してやがる？』

「ヘイヴィア！　射撃用の耳当てこっちに投げろ！　どうせ兵隊の数が減って機材は余りまくってるだろ!!」

眩いヘッドライトのある方向から何かが投げつけられた。ヘッドフォンにも似たものだが、コードはない。クウェンサーはそれを自分の頭にはめると、バックパックからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出し、小さく千切った塊に信管を刺す。

完璧アイドルが何か言ったが、防音の耳当てのせいで聞き取れなかった。

クウェンサーは構わずプラスチック爆弾を銃声の鳴る方向へ投げる。音源まで爆弾は届いて

おらず、手前に落ちたが、彼は構わず無線機のボタンを押した。
爆音。
耳当てを貫くほどの大音響と共に、全ての銃声が停止した。
クウェンサーは耳当てを外しながら、
「音響効果だ馬鹿野郎。密閉されたトンネルの中なら効果覿面だろ」
『テ、メェ……！　やるならやれって言えよ！　味方まで倒れてやがるぜ!!』
「なら味方だけ起こせば圧勝だ」
クウェンサーと完璧アイドルは一足先に、発砲してきた不明勢力の人間の方へと進んでいく。
大きな民間トラックに、古雑誌を突っ込んだ暖炉代わりのドラム缶、そして倒れているのは薄汚れた作業服を着た男達だった。
「……これだけじゃ民間人なのか地元のゲリラなのか『情報同盟』のカムフラージュなのか、判断できないな」
『荷物は不発弾みたい。ゴロゴロ積んであるよ』
「それだってなあ。ボランティアかもしれないし、俺達みたいに別の任務のためのカムフラに利用していただけかもしれない」
無線越しにヘイヴィアが話しかけてくる。
『素人だろ。先に仕掛けてきたのは向こうだぜ。プロなら分厚いパワードスーツ相手に鉛弾

を撃ち込んだりしねえって。第一射でクウェンサーの頭が吹っ飛んでるはずだ』

「かね」

『だよ。とにかく縛って捨てておけ。不発弾は役に立つかもな、信管差し替えりゃ即戦力になるし。民間ベコベコトラックももらっていこう』

「素人と分かった上でなお盗むかよ」

『撃ってきたのは間違いねえんだし、そこまで紳士になる必要はねえって』

味方の生き残りの中から、大型車を運転できる兵士が民間トラックに乗り移っていく。襲撃に備えて警戒しながらゆっくりと進んでいったが、その後は目立った銃撃戦は起こらなかった。外からの光によって、トンネル出口がぼんやりと浮かび上がる。

『山を挟んじまえばオブジェクトのセンサーやレーダーもある程度はごまかせる。しかも出口は複数あるから俺らのルートが特定される事もねえ。とにかく遠回りでも良いから、オブジェクトの目を逃れる形で軍用空港に向かおうぜ』

「外はマイナス何度だっけ？　安全安全言ってて、途中で氷漬けになったりしないだろうね」

『あのオブジェクトを前にして、お天気の心配できる辺りに勝算を感じようぜ』

しかしトンネルを一歩出たところで、いきなり眼前の分厚い雪の層がまとめて蒸発した。

ボッ!!　と爆発的に膨らむ水蒸気の塊に押され、クウェンサーは思い切りひっくり返ってトンネルへ逆戻りする羽目になった。

奥行五〇メートル、左右に二～三キロ。白い風景がまとめて液化し、ドロドロの土が露出している。

「何だオイいきなり!?」

『メートル越えの雪がまとめて蒸発した……?』

『オブジェクトだぜ。あの屈折レーザー、山を越えて俺らの進行ルートを塞ぐ形で落ちてきやがった!!』

だがどうやって?

巨大な山を挟んでいる以上、オブジェクトのセンサーやレーダーの波も弾かれるはずなのだが……。

「GPSだ……」

クウェンサーは思わず額に手を当てながら呟いた。

「『情報同盟』の連中、迫撃砲でも衛星の支援を受けていただろ。だったらオブジェクトだってありえる。真上から箱庭を覗かれたら、間に山を挟んだって関係ない!!」

完璧アイドルが、パワードスーツの中で息を呑む。

『それじゃあ逃げられない。こっちの軍用トラックがすでにマーキングされているなら、どんなルートを通ったって即座に位置を知られて襲われる!!』

そして一発でもオブジェクトのレーザーが掠めれば、人間だろうがトラックだろうが消し炭

になるのは間違いない。

『どうするクウェンサー。トンネル引き返すか？』

「こっちの位置は知られているんだろ。だったら歩兵部隊がトンネルの中を進んでいるって考えた方が良いんじゃないか？　逆戻りしたって風呂の配管掃除みたいに排除されるよ」

言いながら、クウェンサーは大量の不発弾を積んだ民間ボロボロトラックの方へ向かう。

「アイドルちゃんはその馬鹿力で金属を粉末状に削り取ってビニール袋に詰めろ。俺はこの中占品を片っ端から信管付け直す。爆風で大量の金属粉末を舞い上げれば電波障害を仕掛けられるかもしれない」

爆弾は信管がなければ爆発しない。不発弾を安全に処理するとは、この信管を取り外す行為を示す。つまり逆に言えば、新しい信管を再び装着すれば起爆できる状態に戻るのだ。

『上手くいくかね？　この猛吹雪だぜ。チャフの濃度なんてすぐに希釈されちまうぞ』

「例の秘密物資、民間のトラックの方に積み替えないか？　子供騙しなのは分かってるけど、軍用トラックでそのまま運ぶよりはマシだと思うぞ」

パワードスーツのアイドルはまず秘密物資の金属コンテナの運搬から始める事にしたようだ。クウェンサーが工具を使って不発弾の先端部分をこじ開けていると、背後で大きな音が響き渡る。

積み替え途中のコンテナをトンネル内の地面に落としたらしい。

「おい、やめろよアイドルちゃん！　耳掃除よりデリケートな作業しているんだ。全員揃って爆死したいのか!?」

『ちょっと待って。これ見て』

「何だよ。ストリップでもしてくれてんの？」

作業をしながらクウェンサーは振り返ったが、そこで動きが止まった。

地面に落ちて金具の外れた金属コンテナの中から、秘密物資が飛び出していた。

それは銀色の金属だ。煉瓦のようなブロック状になっていて、一つ一つがビニールで真空パックされている。ゴロゴロと外へ飛び出したブロック状の金属の表面には、アルファベットの記号と純度が刻まれていた。

「Li……リチウム？　九九・九九％のインゴット」

『おいおいおい！　毎度おなじみレアアースかよ』

『純金やプラチナに比べると相場が不安定で、貯金には不向きって話じゃなかった？　代替素材の研究ニュース一つでブレまくるって』

「逆に言えば、株や先物取引みたいな投機には都合の良い商品だな」

軍用トラック三台分。ざっと二〇トンほど。

「……今日の相場っていくらだっけ？」

『知るかよ。新聞の細かい数字眺めるの好きじゃねえんだ。ただ、五大塩湖が採掘ストップを

宣言してから高騰しまくってる。四年前の何十倍って話だぜ。これだけ山積みになってりゃ、安く見積もってもエーゲ海の別荘より資産価値は出そうだな。状況次第じゃすぐにでもガタ落ちするかもしれねえけど』

「これが隠密作戦の正体……？」

『軍高官の秘密のへそくりって事なの？　でもこのお金、一体どこから？』

『不発弾処理の話じゃねえの』

ヘイヴィアが無線を通して言う。

『俺らがダミーに使ったもんだが、あれだって本来は軍用空港に詰めてる部隊の通常任務だ。そいつをこなすために、国から税金の札束が投入されているはずだ。……ところが、さっき俺らが遭遇した素人連中も同じように不発弾処理を行っていた』

「作業を地元の人間に押し付けて人件費削減。その分の差額を自分のポケットに突っ込んでいたって訳か。でもって、アシのつきにくい投機用のリチウムに変換してマネーロンダリングを施し、ステルス爆撃機に乗せて安全な場所へ運ぼうとしていた……」

『で、そのステルス爆撃機が同じ「正統王国」の地対空ミサイルに落とされて、さらには「情報同盟」まで横槍を入れてきたって事で良いの？』

筋は通っているように見える。

だがおかしい。

「……だったら、『情報同盟』はどうやって秘密物資の事を知ったんだ？」

クウェンサーは疑問を口にする。

「ただ単にオブジェクトのレーダーや衛星で『敵兵』を発見しただけなら、今のレーザーみたいに『威嚇で足止め』なんてしないで、一発で全滅させようとするはずだ。にも拘らず、連中はやけに軍用トラックの積み荷を意識しているように見える。とすると、まさか……」

『……「情報同盟」に秘密物資のリチウムが渡る事も含めて、最初っから全部計画通りだったんだ』

ヘイヴィアが呻くように言った。

『一言で言えばワイロって事だろ。現金をそのまま敵国に渡すのはまずい。でもリチウムは「存在しないはずの秘密物資」だ。それを運んでる俺らだって隠密作戦に従事してる。死んだって公式の戦死者数にはカウントされねえ。だから！』

『秘密物資のリチウムが「情報同盟」に奪われたって、誰も表沙汰にする事はできない……。元々存在しない隠密作戦なんだから。それを利用して』

「爆撃機が落ちたのも、俺達バックグラウンド部隊が襲われたのも……『正統王国』の将校が『情報同盟』へ金を流すための、安全な受け渡し方法に過ぎなかったって言うのか？　クリスマスブーツ作戦は、敵国にプレゼントを贈るためのものに過ぎなかった？　こっちは一〇〇人以上死んでいるっていうのに!!　どっかの馬鹿の反逆罪に手を貸していただけだって!?」

リチウムは一七九度で溶けて液体になるが、空気中でそれをやると激しく燃焼するリスクがある。オブジェクトが一方的な砲撃でケリをつけたがらないのも、この辺りが影響しているのだろう。せっかくの高額商品を灰にしたがる人間はいない。

『ふざけやがって！　消耗品にもほどがあるぜ。こんな馬鹿げた作戦に付き合ってたって俺らには何も残らねえ。俺らの命を使ってどっかのデブの私腹が膨らむばかりだぜ!!』

「……」

クウェンサーはわずかに沈黙した。

彼は自分が信管を取り付けようとしていた不発弾の表面を指でなぞってから、

「補給兵の中に調理師免許を持ったヤツがいるって話だったな。連れてきてくれ」

『中華鍋とフライ返しで第二世代をぶっ壊すつもりかよ。胡麻油と豆板醤もいるか？』

「そうじゃない」

彼は即座に否定した。

「必要なのはエンジンオイル、金属コンテナ、後は信管処理用の液体窒素だ」

「？」

「俺達バックグラウンド部隊に命令を飛ばしたクソ将校の狙いはまさにそれだろ。『情報同盟』の部隊だのオブジェクトだのにぶつけて全滅するのを待ってる。……だとすれば、勝利条件は簡単だ。あいつらと戦わずに済む方法を探せば良い」

4

『情報同盟』の軍事衛星は、トンネルから出てくる大型トラックを即座に発見した。

しかし軍用のものではない。ボロボロになった民間のトラックだ。後部の幌は取り外され、荷台に大量の不発弾が山積みされているのが見える。

リチウムのインゴットが積まれている様子はない。

あれだけ膨大な金属の塊であれば、隠すのも容易ではない。トラックの周囲に散らばっている歩兵達が服の中に隠したり、民間トラックの車体の下に貼り付けた程度では、〇分の一も運べないだろう。

降伏したのかもしれない。

『情報同盟』の衛星担当官はそんな事を考える。天空から見られている事に自覚があるのか、『正統王国』の歩兵達の何人かは上空を見上げており、中にはライフルの銃口付近に白いハンカチをくくりつけて軽く振っている者までいた（ハンカチは寒さで凍りついていたが）。

衛星担当官は第二世代の『スナイプレーザー051』へ連絡を入れる。

「情報にあったバックグラウンド部隊は『正統王国』の軍用空港ではなく、アサバスカ方面内の民間居住地に向かっている模様。オブジェクトによる居住地への攻撃は国際法上認められな

い。攻撃のチャンスはこれが最後になる」

『それより、かれらのこうふくのサインをかくにんするのが先。おそらくトンネル内にぐんようトラックとリチウムのインゴットがおきざりにされている。それさえ回収できればもんだいない』

「見逃すのか？」

『てきぜんとうぼうはどこのくにでもじゅうざいだよ。手を下すまでもない』

ザザ、と別の通信が割り込んできた。

『正統王国』の『お客様』のものだ。

『「送金」の確認はできたか？』

「今やっているところだよ、中佐。空路の解放はそれからだ」

衛星担当官は呟きながら、心の中で思う。

厄介な事になった。

『スナイプレーザー051』は最先端のレーザー技術の塊だ。圧倒的な速度と、フォトニック結晶を利用した、自由に屈折する高出力レーザー砲撃。これは単純な戦争の他に、別の使い道まで提示してしまっている。

つまり、空路の封鎖。

元々、オブジェクトに搭載されている対空レーザーは、あらゆる航空機の天敵だ。しかしオ

ブジェクトの巨体そのものの進行ルートを把握し、そのルートを妨害するように自軍のオブジェクトを配置する事で、旅客機用の空路を確保する事もできる。

しかし、だ。

『スナイプレーザー051』は『全方向からの核攻撃に耐える』特性を放棄してでも圧倒的なスピードを実現し、複雑に屈折するレーザー攻撃を行う第二世代だ。既存のプレッシャー戦術の隙間をかいくぐって、安全な空路上にいる旅客機を落とす事だって難しくない。

その脅威に気づいた『正統王国』からの打診が、リチウムの塊を使った資金提供。見返りとして、『スナイプレーザー051』をアサバスカ方面に留め、空路の妨害を行わない事を約束する、というのが契約内容だった。

一見すれば、『情報同盟』のテクノロジーの勝利に見える。

『スナイプレーザー051』と同じコンセプトの機体を量産すれば、戦局はガラリと変わるのではないか、と。

（……ところが、『核で壊れる』程度の装甲しか持たない『スナイプレーザー051』は、『情報同盟』の保守派から嫌われているときた。それに目立った動きをすれば多数のオブジェクトに取り囲まれて集中砲火を浴びかねない。正面からの防御に特化した『スナイプレーザー051』は、そういう多面同時攻撃を最も苦手とする訳だし……）

間違いなく『スナイプレーザー051』は新しい時代の機体なのだが、今度は時代の方がつ

いてこれずに足を引っ張っている。
　そういう意味では、悲劇を背負う機体なのかもしれない。
『ほへいたちがトンネル内でぐんようトラックをはっけん』
『早く済ませてくれ。君達が見逃した連中が軍用空港にＳＯＳを発すると、こちらも調査用の部隊を送らなくてはならなくなる』
『コンテナのかずは50。じょうほうどおり。……しかしこれはどういうことかな、ちゅうさ』
『？』
『コンテナのなかみは空だ。何もない。やくそくのリチウムはどこにある？』
『馬鹿な……私はきちんと納品した！　そうだ、ヤツらが、生き残った連中が持ち去ったんだ！　それしか考えられない!!』
『どうやって？　あのトラックにはふはつだんしかない。あれだけたいりょうのリチウムをかくせるスペースがあるとはおもえないが』
　衛星担当官はため息をついた。
　大体の事は予測ができる。
　リチウムは一七九度で溶けて液体になる。そして砲弾の中に詰まっている火薬も、湯せんなどで溶かして取り出す事ができる。
　つまり、大きな爆弾の中から液化させた火薬を取り出し、今度はその中に溶かしたリチウム

を流し込んでいたのだ。

リチウムは空気中で熱すると燃える。しかし大きなコンテナの中に小さなコンテナを配置し、爆弾処理用の液体窒素を気体に戻して容器に充填させた上で、トラックのエンジンオイルなどをサラダ油のように熱してから湯せんのようにすれば不可能な事ではない。コックの卵でもいれば難なくこなせるだろう。

が、答えが分かったからと言って、衛星担当官が律儀に報告してやる義理はない。

自分達は『情報同盟』で、彼らは『正統王国』。

利害が一致すれば言葉を交わすが、それが破られれば関係も断絶する。その報いは、彼らが提示した利益の代わりをこちらで作る事で完結する。

『さて、ちゅうさ。やくそくのものが手に入らないのなら、わたしたちの対応もかぎられてくるわけだが』

『待て！　どこかにあるはずなんだ。リチウムのインゴットがどこかに……！　い、いや、必要なら金はまた用意する。だから!!』

『ひとまず、分かりやすいサインをのこしておこう。われわれをばかにするとどうなるか、というサインを。ちゅうさ、あなたののっているゆそうきのいちはこちらではあくしているわけだが……これが何をいみしているかは分かるな？』

あまりにも先鋭的過ぎて、同じ『情報同盟』の上層部からも嫌われている『スナイプレーザ

1051』。

その状況を打破するための方法もまた簡単。

多くの戦果を挙げ、そのキャリアによって上層部に有用性を認めさせる事だ。

5

「吹っ飛んだね」

「吹っ飛んじまった。これで俺らテロリストじゃねえの？」

白い吹雪の空の一角で、溶接のような眩い閃光が発せられた。輸送機が対空レーザーに焼かれたものだ。メインディッシュは当然、バックグラウンド部隊に死を命じた『正統王国』の中佐である。

クウェンサーやヘイヴィア達がいるのは『正統王国』の軍用空港ではなく、アサバスカ方面の民間居住地メープルクイーン……つまりありふれた都市だった。元々は三～五階建てぐらいの低いビルが連なる小さな街のようだが、平たい屋上の上へさらに多くのボロ屋を増築しまくっているせいで、相当カオスな絵面になっている。しかも無秩序な増築や雪の重みに負けて、ところどころでビルが崩壊している場所もあった。

道路の方も尋常ではなく、崩れたビルで塞がれているところもあれば、逆に壁の壊れた建物

の中を車が通ったりもしている。

「俺達の任務は『秘密物資を軍用空港まで運ぶ事』だろ。『情報同盟』に射殺されて秘密物資を明け渡す事じゃない。……入れ物が多少変わったり、移送ルートが若干変更してタイムスケジュールがズレた程度で軍法裁判にかけられたりはしないさ」

「一応、この『不発弾』を軍用空港まで運べば大義名分は守られる訳か」

ヘイヴィアは民間のボコボコトラックの荷台を軽く叩きながら、

「……ホントにお行儀良く運ぶのか？　エーゲ海の別荘以上の価値があるんだぜ」

「そりゃ運ぶよ。ただし俺達に任されているのは『秘密物資を軍用空港の中に運び込むまで』だ。欲しがっている人誰もいなくなっちゃったし、そのまま帰りの便に乗せちゃっても良いんじゃないの？」

「外道」

「だねえ」

クウェンサーは適当に頷きながら、近くにいたパワードスーツを掌で叩く。

「車を変える前にメシ食おう。何か買ってくる。ちょっとトラック見張ってて」

『テリヤキバーガーお願い』

「味のないレーションばっかりには染みるリクエストだね。行こう、ヘイヴィア」

クウェンサーとヘイヴィアはトラックを離れ、薄汚いスーパーマーケットへ向かって歩く。

「次はどこに配備されるんだろうね。そもそもバックグラウンド部隊のままかな？　ほとんど壊滅状態だけど」

「どこだって地獄だろうぜ。あのリチウム、レート低くても早めに換金して電子バンクのパスワード通帳に変えちまった方が良いな。私物の持ち込み制限に引っかからねえやり方で」

「清潔で安全なオフィス街でスーツ装備なんていう風にはならないもんかなあ……？」

「何でも良いが、できれば南米は避けたいとこだな。アマゾン方面とか最悪」

「何でまた？」

「新聞読めよ馬鹿野郎。ボルガ方面の王位を決める『御前試合』の舞台になりそうなんだと。つまりオブジェクトとオブジェクトの激突だぜ。進んで巻き込まれてえとは思えねえよ」

とはいえ、木っ端の兵隊であるヘイヴィア達には、自分の配備先など決められるはずもない。考えても仕方のない事でぐじぐじ悩んでも仕方がないので、彼らは無理に話題を変える。

「なあクウェンサー、そういやこの辺の連中って何食ってんの？　サーモン？　アザラシ？」

「ハンバーガーショップなら世界共通のがあるじゃん。それより『正統王国』のユーロ紙幣が使えるかどうかが心配だよ」

「ダーティな戦争国なら両替商ぐらいそこらじゅうにいるんじゃねえの？」

しかし、彼らが具体的にユーロ紙幣でハンバーガーを買う事はできなかった。

ゴッ!!!!!　と。

背後で、いきなりリチウムを積んでいた民間トラックが大爆発を起こしたからだ。

冗談抜きに呼吸が止まった。というか数メートルも前方へ飛ばされた。ろくに受け身も取れずに雪の上を転がる。倒れたまま爆心地へ目をやると、民間トラックは粉塵で見えなくなっていた。近くのビルの壁がまとめて剝がされている。分厚い装甲のパワードスーツが倒れていた。至近距離で爆風を浴びた……はずなのだが、その装甲に救われたのか、太い指は震えるような動作を繰り返している。

「げほっ、ごほ！　くそ、何だ？　俺らのトラックじゃねえか!?」

「爆発する理由がない！　砲弾は全部リチウムに詰め直していた。窒素とゴムで密閉しているからリチウムは安定していたはずなのに!!」

「だったら何で吹っ飛んだ!?」

ヘイヴィアの質問に、クウェンサーはわずかに唇を噛む。

瓦礫の破片が散乱する雪の上から起き上がりながら、彼は呟く。

「……可能性は一つしかない。どこかでトラックが丸ごとすり替わったんだ」

「すり、何だって？」

「すり替わった！　トラックは複雑に増改築した民間居住地の中を徐行で移動していた。乗っ

ていたのは運転手だけで、俺達は周囲に散らばって警戒していただろ。その『運転手』が敵の一人なら、崩れかかったビルの下を潜る時とかに、こっそり同型のトラックにすり替える事はできたかもしれない！」

そもそも、クウェンサー達が利用したトラックや不発弾自体、この民間居住地のものだった。事前に『連絡』さえあれば、全く同じ車種や爆弾を用意するのは難しくない。

となると、真っ先に確認するべき事がある。

「運転手は交代でやっていたよな。最後に担当していたのは誰だった？」

「調理師免許持ったヤツだろ。ほら、エンジンオイルを熱してリチウムを溶かしていた……」

「じゃあそいつが裏切ったんだ」

「コック野郎はどこと組んでんだ!?　『情報同盟』か!?」

「不発弾の中身がリチウムになっている事がバレていたら、あのラグビーボールからの『足止め』は中断してない。歩兵部隊を使って俺達を皆殺しにした方が確実にリチウムを入手できるだろうしな」

「だったら敵の正体は何なんだよ！」

「知るか！」

クウェンサーは切り捨てた後に、

「ただ、『連中』はどうやって爆弾を起爆した？　時限式か？　違うね。俺達はいつトラック

のすり替えに気づくか分からなかったんだぞ。好みのタイミングで吹き飛ばして証拠を消したがっているなら、絶対に無線式を使う」

「それがどう繋が……待てよ」

「そうだヘイヴィア。入り組んだスラム街の中じゃ電波は遮断される。そう遠くまで無線電波は飛ばない。……近くにいるぞ。無線機のボタンに指をかけたクソ野郎が！　そいつを捕まえれば『連中』の正体も見えてくるはずだ!!」

ヘイヴィアは肩に下げていたアサルトライフルを構え、周囲に目をやる。

薄汚れたビルの二階。窓からこちらを覗いていた男が、銃口を嫌うように後ろへ下がった。ただ武器を向けられてパニックになったのとは違う。些細な仕草だが、明らかに『銃口を向けられる事を想定していた』動きだった。

「野郎!!」

パパン!!　と、アサルトライフルの貫通力を信じて二階の壁へ短く連射するヘイヴィアだが、仕留めた手応えはない。裏通りに面した別の窓が砕ける音が聞こえた。二人が慌ててそちらへ走ると、先ほどの男が飛び降りたところだった。

一瞬、目が合うが、男は迷わず背を向けて逃走に移る。

ヘイヴィアが舌打ちした。

「くそ、駄目だ！　威力が高すぎて民間人まで撃ち抜いちまう!!」

ヘイヴィアが拳銃に持ち替え、クウェンサーが民間人を伏せさせるためにプラスチック爆弾に信管を突き刺した時には、すでに男を見失っていた。

しかし手がかりがない訳ではない。

二階から男が飛び降りた時、上着が大きくまくれていた。そして、男が隠していた首元には特徴的なサインが記されていたのだ。

「……見たかよクウェンサー」

「首回りをぐるりと取り囲む縫い痕」

クック追加諸島の護衛部隊ナイトエッジ小隊……を隠れ蓑にしていた、『正統王国』の部隊。

第二〇二機動支援中隊。

世界各地で暗躍し、この部隊を追うだけで写真週刊誌が出版不況を跳ね除けられるとまで噂される黒いチーム。

「ユニコーンか!!」

第三章　人間の欲を刺激する陰謀バンク　〉〉アマゾン方面砲撃戦

1

民間トラックに積載されていた不発弾の爆発事故の詳細。

死者二名、負傷者四二名。民間から死者は出ていない。

不発弾は地元の独立系ゲリラが使っていた旧式兵器のものだったが、信管の残骸からは『正統王国』のものが検出された。人為的に起爆した可能性もありえる。

被疑者クウェンサー＝バーボタージュ、ヘイヴィア＝ウィンチェルらがアサバスカ方面の民間居住地メープルクイーンに滞在していた理由は不明。ただし、彼らが主導して民間トラックをメープルクイーンへ運び込んだ事は、居住地のカメラの映像などから確認されている。

両名の主張する第二〇二機動支援中隊『ユニコーン』が介入していた痕跡は認められず。また、リチウムのインゴット二〇トンについても、存在したという確証はない。

被疑者達は限りなく黒に近いと推測されるが、バックグラウンド部隊は表向き存在しない事になっている。また、クリスマスブーツ作戦も『ネガティブノイズ』扱い……つまり公式記録には残さない軍事行動であり、我々の権限では資料の閲覧はできない。

よって、正規の手順による戦場捜査活動は続行不能。

通常の法規に則った軍法裁判による裁定もできないと結論し、以降の活動は督戦専門の『黒軍服』に譲るものとする。

……私見だが、『黒軍服』の手で被疑者達が射殺される事を強く願う。

2

南米、アマゾン方面。

応は戦争国に分類されるものの、ほぼ『正統王国』が実質的に支配している地域だ。広大

なジャングルに眠る動植物などの生物資源に、コーヒー豆から抽出したカフェインなどの研究と特許取得、バイオエタノールを中心とした大規模なプランテーションを外貨獲得手段としている、『最先端のテクノロジーを駆使した、消毒薬の匂いがする一次産業』の雄。

政情の問題としては、王政による領地の支配を望む『正統王国』が、数千年前から文明を繋げてきた先住民の王と、大航海時代にやってきて、以降人口の九割を占めるようになったヨーロッパ系の王、どちらを立てるかという爆弾を抱えていたりもする事だ。

比較的安定しているとはいえ戦争国。その特徴を随所に表すアマゾン方面は、簡単に言ってしまえばとてつもなく雑多な街が広がっていた。公共キャンペーンで建てられた清潔感溢れるビルの横にはバラックの小屋が無理矢理に増築してあり、歩道にはゴミと金品がまとめて山積みにされている。経済系のコメンテーターの話では、その価値に気づくのにまだ一〇年はかかるとの事だった。

そんな『何種類かのジグソーパズルをぐちゃぐちゃに混ぜて組み直したような』街並みの一角に、オープンカフェがあった。

このコーヒー大国でここまで不味い一品を出せる店も珍しい。商品の味でもウェイトレスの笑顔でもなく、賭けドミノの場所代で儲けていますといった風情のテーブルには、胡散臭い連中が集まっている。

そんな中であれば、彼らの異様な雰囲気も上手く隠してくれる事だろう。

額に槍を突き刺した馬の紋章。

第二〇二機動支援中隊『ユニコーン』の印を肩に掲げる連中が集まっていたとしても。

「ソギアさん、葉巻なんて良いんすか？」

比較的色白の青年が、頭蓋骨の太さがそのまま首回りになっていますと言わんばかりの大男に声をかける。

「そんなにパカパカ吸っていたら犬に追われますよ。安価なセンサーとして未だに現役なんだから」

「アマゾン方面って言ったってジャングルで撃ち合うんじゃねえんだ。むしろ生活臭がある方が溶け込みやすいよ。……マルス君、チミはどうも獣の匂いがしやがるね。街には不向きだ。シャワーを浴びて香水をつけるように。紳士的にね」

チッ、という舌打ちが聞こえた。

同じテーブルについている銀髪に褐色の女性、サーニャだ。

「新入りが」

「新入り関係なくないすか!?　関係ないすよね!?　つーかもう三年目すけど!!」

金切り声を上げるマルスだが、いつもの事なのでテーブルの誰も気にしない。テーブルの残りの一人、小柄な少年がドミノの牌を指先で弄びながら、オドオドした調子で声を出した。

「……でも、彼らには悪い事をしてしまいましたね」

つい最近まで調理師免許を持った補給兵という扱いを受けていた少年だ。

対して、『手慣れている』ソギアはニヤニヤと笑いながら、

「ドラゴンキラーの二人組の事かねフラット君。戦場で哲学すると大体ろくな死に方しねえよ。ところであのリチウムどうなった？　誰の担当だっけ」

はーい、と手を挙げたのはサーニャだ。

「念のためにもう一度溶かしてから、備蓄系ファンドに流して換金。レートは〇・七五」

「ぼられたね」

「ええまあ。完璧に足元見られていたから、帰りがてらにレアアースの輸送船を沈めておいた。連中も少しはレートについて考えるでしょ。でもって、その金は小切手で『情報同盟』に。連中が資金協力しているテログループを動かしてくれるそうよ」

ならよし、とソギアは適当な調子で答えて、人差し指で軽く首をかく。

他の全員と同じ、首をぐるりと囲む縫い痕。

『ユニコーン』の人隊儀式の印を。

「あっちこっちに散らしていた部隊の他の連中も、概ねコネ作りを成功させた。最後のピースも何とかなった。それじゃあそろそろ始めるか。マキアーレ大佐に繋げ」

格好つけてコーヒーカップに口をつけ、あまりのひどい味に地面へ黒い液体を全部吐き出してから、ソギアはもう一度言い直す。

「……これだけ美味い素材を用意したんだ。『正統王国』の舌の肥えたＶＩＰサマ達に、最高の料理を振る舞ってやろうぜ」

3

そんなアマゾン方面の軍港。

オブジェクトの補給を担う中継基地として、大規模な港湾と空港の双方を備える大規模施設。

現状、主役である超大型兵器はないが、それでも巡洋艦や要撃機など多数の一般兵力を備える一大拠点。

その敷地外周を囲うフェンス沿いで物語は始まる。

「最悪だ」

左遷にはぴったりといった湿度抜群の炎天下で、クウェンサーはポツリと呟いた。

自らの境遇に納得できないのか、それはすぐに叫び声へ変わっていく。

「最悪でーす!!　あっちもこっちも視線がギスギスギスギス!!　当局からセックス教団ばりの監視を続けられております！　誰かどうにかして!!」

「叫んだって仕方ねえだろ。ユニコーンは完全に俺らの上を行ってる。下から眺める俺らは連中が撒き散らした鳥の糞を顔面に頂戴するしかねえって訳だ」

ヘイヴィアはうんざりしたような調子で、

「……それにしても、あれだけ嫌だっつったアマゾン方面かよ。ボルガ方面の王様決める『御前試合』に向けてあっちもこっちも浮き足立ってやがるし、まーた寿命を縮められそうな雰囲気だぜ。一一五の『白熊』がくたばってから、ボルガも随分荒んじまったよな」

さっきまで大きな機材を持ってその辺をうろついていたのは、多分テレビ局の人間だろう。国内メディアか海外メディアかは知らないが。

当然、オブジェクトをぶつけ合う軍事行動である『御前試合』のど真ん中にカメラのクルーやアナウンサーが近づけるはずはないが、超望遠で覗き込んでナレーションをつけるだけでも、結構な視聴率を稼げるかもしれない。

「王様なんてどうでも良いよ。シンデレラの魔女みたいに都合の良い人間はいないんだ。お高い舞踏会とか『平民』に関わる余地もないし」

クウェンサーとしては、他人の王位継承問題に巻き込まれる巻き込まれないなんていうのは些細な事だ。それより前に、自分達自身がユニコーンのでっかい陰謀にどっぷり浸かってしまっている。

リチウム強奪に不発弾を装った爆破事件。

「真相って解き明かせると思う？」

「意味がねえな。真相一つ解き明かすためにドンパチやったら、そっちの罪で刑務所にぶち込

まれちまう。ハリウッド映画みてえに途中の戦闘を真相でチャラにできるようにはなってねえ」

ヘイヴィアは呆れたように、

「……幸い、今のところは『隠密作戦』が上手に作用してやがる。このまま黙ってりゃ手錠をかけられる事だけは避けられる訳だ。俺もテメェも積み上げてきた貯金は全部すっからかんになっちまったがな!!」

南の島で何もさせずに腐らせておいても勝手にトラブルを起こす。

北極圏で犬死に同然の作戦に従事させても何故か生き残って問題を撒き散らす。

そんな訳でクウェンサーとヘイヴィアは上層部から相当持て余されているようだった。このままだと、『捜査活動中に抵抗されたので』というダミーの報告と共に鉛弾を額にプレゼントされかねない感じである。

もう戦うな。

政府の監視を直接つけられる場所で大人しく単純作業だけしていろ。

比較的『安全な戦場』であるアマゾン方面に放り込まれた背景はそんなところだろう。現地のヤンキーに唾を吐きかけられてもにこやかに微笑んでハンカチを取り出せ。さもなくば射殺する。そんな意思がありありと伝わってくる。

ヘイヴィアはフェンスに背中を預け、うんざりした調子で周囲を見回す。

「ただまあ、『黒軍服』は今日も真面目だね。この炎天下で真っ黒な軍服を着こなすとかあり

えねえ。ひょっとして連中も決算期だから結果を残したがってんのか？」

「『黒軍服』って何だっけ？」

「前に説明しなかったっけ。戦場で兵士が行う犯罪行為を専門に調査する独立部門だよ。平たく言えば同じ国の人間を撃つための部隊だ。捜査妨害に対しては水平射撃で応じるってな。銃口を向ける方向を完全に間違えてやがる」

「……ひょっとして、天敵ですか？」

「何言ってんだ馬鹿、今の俺らにゃ敵しかいねえよ。とにかく大人しくしてろ。一発ギャグも禁止だ。それで撃たれかねない程度には冗談が通じねえ連中だからな」

「俺は『軍人』じゃなくて『学生』だからって事で何とか見逃してくれないかなあ」

「それ一発ギャグのつもりなら俺が撃ってやるよ」

実際には管轄の難しいところだが、ヘイヴィアは黙っていた。クウェンサー一人を喜ばせたって得られるものは何もない。

しかしこう、大人しくしておきたい時に限って、トラブルは向こうからやってくるものである。

今回は書類を入れるための大きな封筒だった。

厳密には、それを手にしたラテン系の男の兵士だ。

「へい、へい。アンタらが噂のドラゴンキラーだろ。ファンからの歓迎の挨拶だ。因縁深い

『ユニコーン』の資料を詰めておいた」

「……いらないなあ。金もないよ」

「良いから良いから。受け取っておけって。金もいらないよ。ファンって言ったろ」

一方的に封筒をクウェンサーに押し付けると、ラテン系の兵士はそそくさと立ち去ってしまった。

「これどうしよっか？」

「俺に聞くな。こっち見んな。テメェがイレギュラーな行動しやがったから、早速『黒軍服』がこっち睨んでやがる。撃たれるならテメェだけにしろ」

こそこそと小声で牽制してくるヘイヴィアは完全なチキン野郎だった。

ため息をつくクウェンサーが大きな封筒をひっくり返すと、隅の方に手書きで何か書かれていた。

『さっさと撃たれちまえ同族殺しのマザー××××ー』

改めて立ち去っていくラテン系の兵士の方を見ると、彼は堂々と中指を立てていた。

「たまんないね。刑務所みたいな歓迎会だよ」

クウェンサーが鼻歌でも歌いそうなぐらい気軽な調子で言うと、ヘイヴィアも呆れたように口を開いた。

「絵に描いたような馬鹿野郎だな」

「この軍港全体が悪い意味での優等生って事だろ。だから少しでもレールからはみ出しているヤツが許せない。しかも人から聞いた話、ネットで広がっている話程度で善悪を設定して好き放題に攻撃する。誤射したって『いやー情報に踊らされました。私は被害者』とか平気な顔で言う訳だ」

どうやらこの軍港の連中は、クウェンサー達に対して『黒軍服』相手に体を張るお笑い芸人的な活躍を期待しているらしい。アクシデントが起こればなおよし、といったところか。

舌打ちするクウェンサーは、ひとまず封筒の口を切る。

ヘイヴィアが怪訝そうな顔で、

「ホントに開けんのか？　トラブル誘発剤だろ。役に立つ情報が入っている可能性は低いってのによ」

「受け取った時点でもう巻き込まれているよ。怖い姉ちゃんに睨まれてるんだろ」

「中身が爆弾とか思わねえ訳？」

「爆弾だったら中を改めないと危ないよ」

幸い、中身はきちんとした書類だった。

ところどころが黒く塗り潰されているが、書式はしっかりとしている。

「なになに、えーと……ちょっと何だよ、何この匂い？　人が集中しようって時に、さっきっからぷんぷん漂っているんだけど」

「ゴミだよ。ゴミの山。歩道にも車道にも溢れ返ってる。風向きによってはこっちにまで漂ってくるんだろ。占雑誌の束から政治家の愛人まで何でも捨ててあるって話だぜ。家電を拾っていく馬鹿がいるから、ゴミなら何でも拾うヤツがいるんだろうって勘違いされて、そこらじゅうに撒き散らされているんだと」

「政治家の愛人もリサイクルされるの？」

「集中できてねえじゃん」

「……ちょっとした興味で読破できる量を超えてるっぽくてね。ページの端に一つずつ女の子のメアドでも書いててくれれば良いのに」

ブツブツ文句を言いながらも、クウェンサーは中身に目を通していく。

『第二〇二機動支援中隊、通称ユニコーン。その主要活動は戦場に潜伏し、敵オブジェクトの整備基地周辺にある輸送車両やそのルートなどを破壊する事で、敵オブジェクトの足をこっそり引っ張る事にあるとされている。

しかし実際には戦場に潜伏する特性を活かし、「情報同盟」「資本企業」「信心組織」……さらにはそれら世界的勢力に属しない地元ゲリラやテログループなどとの接点を作るところに目的があるらしい。

つまりは、泥沼を回避するための事前協議。

クリーンな戦争の裏側に存在する、八百長の小細工である』

「どうよ？」

「何とも。二時間の年末特番と同レベルの陰謀論が書いてあるね」

『地元ゲリラの本拠地を襲っては、そこに眠っていた旧式兵器をそのまま別の地元テログループへ売り飛ばす。「信心組織」から渡された金を洗浄して「資本企業」へ渡す。地元有力者を暗殺し、その混乱の中で別の有力者の用心棒として雇われる。

表向き存在する国家や勢力の枠組みをまたいだ人脈を構築するためなら、彼らはおおよそ考えられるあらゆる手段を実行する。

それ自体は、諜報部門などを中心にひっそりと行われている作戦行動ではある。

問題なのは、完全に戦場で潜伏する彼らの動向が、軍上層部の管理を離れているところにある』

クウェンサーはレポートをめくって、そこで顔をしかめた。

「どうしたクウェンサー？」

「ランク三って何だっけ」

「BC兵器を使用する可能性が極めて高い危険分子に相当するリスク。それが？」

『ユニコーン本隊の正規構成人数は二〇〇人前後とされるが、勢力をまたいだ人脈の間接的協力関係はどこまで広がっているか不明。しかも、そのいずれもが汚れ仕事によって「クリーンな戦争を八百長として支える」屋台骨となる。

ユニコーンの最終目的は不明だが、仮に軍上層部の管理を離れたネットワークを形成している場合、戦術情報の漏洩などから我々のオブジェクトの運用状況を先読みされ、敵オブジェクトの手で大破に追い込まれるリスクが発生する。

ランク三相当の戦術リスク。

彼らの所属が本当に「正統王国」であるか、その時点から早急な調査の必要性がある』

クウェンサーは適当に舌打ちすると、サバイバルキットの中からライターを取り出した。封筒にしまった書類に火を点ける彼を見て、ヘイヴィアが声をかける。

「結局どうだった？」

「可もなく不可もなく。ミミズの肉で作ったハンバーガーよりは信憑性がある程度かな。そもそもトラブル誘発剤として渡されたものだし、どこまで本当かは判断できないね」

「オトナになったねえ」

「自分で何も努力する必要もなく、ただ手渡されるだけの資料に世界を転覆させるほどの陰謀が載っているなら、そのまま『黒軍服』に渡せば解決してくれるよ。面倒臭い。こんな分かりやすい餌に飛びついてどうするんだ」

言いながら、クウェンサーは燃え続ける封筒を手放す。地面に落ちた書類の束には目もやらなかった。彼らの目的は明快。謹慎期間を一刻も早く消化して、各々の目的のために第二七機動整備大隊へ復帰する事だけである。だからタイムテーブル通りに軍港の周辺を警備し、常に身だしなみに気を配って、道案内を求める地元の老人に完璧な笑顔で接する。ファストフード店の一ユーロコーヒーに『貴族』限定サロンの味を求める大変グルメなお客様にペコペコ頭を下げるアルバイトと比べればまだマシだと思うしかない。

しかし現実は甘くない。

この世のトラブルの半分は、向こうからやってくるものなのだ。

今回の場合、空襲警報のサイレン。

軍港周辺に太い電子音が鳴り響いた時には、すでに状況は進行していた。

滑走路脇で待機していた要撃用の戦闘機のスクランブル発進は間に合わない。何か小さな影が複数、クウェンサー達の頭上を通過して軍港の敷地上空へ突入していく。

その翼から何か細長い物が切り離されるのを見て、クウェンサーは仰ぎ見たまま叫ぶ。

「何だ!?　軍のレーダーは何していたんだ!?」

「馬鹿野郎!!　文句言う暇で伏せろ!!」

ヘイヴィアがクウェンサーを押し倒した直後、細長い何かが正確に軍港内の建造物へ突き刺さっていく。

轟音、衝撃波、熱風。

鼓膜に突き刺さり腹の中身を絞り上げる『それら』は、数百メートルの距離など気にせず、明確に『死』の恐怖を突き付けてくる。クウェンサーの心拍数が一気に跳ね上がり、全身から嫌な汗が吹き出した。

「航空機からの、空爆？　オブジェクト満載、対空レーザーどっさりのクリーンな戦争はどこ行ったんだ!?　空港側の機能がほとんどやられたんじゃないか!?」

「アトポーシスだ。『信心組織』開発の地上攻撃型ＵＡＶ」

ヘイヴィアはクウェンサーの上から、横へ転がるように場所を移動し、

「連中の道楽だった潜水航空母艦計画のオプションさ。徹底した小型化、軽量化を施した無人攻撃機。ただし肝心の母艦のサイズがデカすぎてな。海中で静穏性を確保できずすぐに居場所を察知されちまうってんでプロジェクトは凍結したはずだった。……まあ、『オブジェクト主流』を望む軍高官に難癖をつけられた、って説も濃厚だがな」

「じゃああれは何なんだ？　海の底から撃ち出されたって訳じゃないんだろ!?」
「アトポーシス自体は開発成功していたんだ。さっきも言ったように小型で軽量。運ぶのも隠すのもうってつけ。プロジェクト失敗の負債を消化する意味でも『信心組織』があっちこっちに売り飛ばしたおかげで、今じゃテロリストの象徴になっちまってるって訳だ」
　タタタンタタン！　という銃声が軍港の敷地内から聞こえてきた。ようやく始まったらしい反撃の音色を耳にしながら、ヘイヴィアは続ける。
「追加のブースターとランチャー設備があれば垂直発射もできるって話だしな。多分、軍港の防衛ラインの内側、数百メートルのラインからいきなり離陸されたんだろ。だから早期警戒レーダーでも間に合わなかった」
「ていうか、ちょっと待って。何であいつらアサルトライフルで撃ってるの？」
「当たる訳ねえが、パニクッてんじゃねえのか？」
「じゃあいくつかの銃口がこっち向いてるのはどうして!?」
「ちくしょう!!　また俺らのせいにされてんのか!?　遠隔操縦でオモチャ操ってるとかよ!!　あーあ、あのラテン系め。私は優等生ですって顔で照準覗き込みやがって!!」
　クウェンサーとヘイヴィアは慌ててフェンスから離れるように走り、民間道路の脇にあるゴミの山の陰へと飛び込んでいく。
　あまりの臭いにクウェンサーは顔をしかめて、

「プライドを売って命を買っている気分だ……」
「つか何でライフル弾をきちんと弾けるかね。自動車を横から撃ったら反対側のドアを突き破るって話じゃなかったのかよ」
「古雑誌の束や家電ゴミは偉大だって事じゃないの？」
と、そこでクウェンサーのポケットから何か小さな振動音のようなものが聞こえてきた。
ポケットから携帯端末を取り出した彼は、
「ありゃ、何か受信した」
「衛星画像か!?　ＵＡＶ操ってる敵の分布が分かりゃ少しは……!!」
「いや、結婚詐欺師のジェニーリアと完璧アイドルから今さらのようにメールが」
「どっちも夢を与える素敵なお仕事だがよ!!　今は一〇〇パー必要ねえよな!?　あといつの間にアドレス交換してやがった!?」
「あれ、でも……完璧アイドルちゃん、パワードスーツを降りると……おおっ、おっぱい……」
「なになに!?　どういう事!?　ナニが添付されてんの!?」
俄然ヘイヴィアが喰らいついてきたが、そこで空中に新たな爆発が連続する。身をすくめ、ゴミの山へ寄り添いながら二人は周囲の状況を確認する。
第一波の攻撃から、軍港の兵士達も持ち直してきた。残った対空火器を集中させ、ミサイルや機関砲の掃射でＵＡＶアトポーシスへの反撃が始まっていく。

速度重視のジェットエンジンではなく、航続時間重視のプロップエンジンが採用されていた事もプラスに働いただろう。

無人攻撃機の回避挙動は間に合わず、地対空ミサイルの爆風とその破片が主翼や胴体に食い込んでいく。バランスを失ったアトポーシスは、黒煙の尾を引きながら軍港の中心へと落下していく。

「おっ」

「馬鹿!!　ここからが本番なんだよ!!」

思わずゴミの山から顔を覗かせようとしたクウェンサーの首根っこをヘイヴィアが摑んで引き戻す。

直後に、凄まじい閃光と爆音が吹き荒れた。

ゴミ山が黒いシルエットになり、それ以外の全てが白く染まる。

ストーブの間近に長時間立っていたかのように、全身の皮膚という皮膚に突き刺さるような痛みが広がっていく。

クウェンサーは息を吸おうとして、その口をヘイヴィアの手で塞がれた。

実際に吸い込んでいたら、体の中まで焼け爛れていたかもしれない。

たっぷり数十秒経ってから、ようやくクウェンサーは呼吸を許可される。

「なんっ……だ？　今のは!?」

「燃料気化爆弾と同じ原理だ。無人攻撃機っつったろ。航行不能になると自分自身の燃料を化学的に周囲一帯へ撒き散らして火を点ける。自分を落とした敵機を巻き込んだり、ターゲットの地上施設へダメージを与えるためにな。自殺の名を冠している理由だよ」

「燃料気化爆弾……？　だったら俺達、ゴミの山の仲間入りしているはずじゃないか？」

「爆弾専用の燃焼剤を使っている訳じゃねえし、『残った燃料』を撒き散らしているだけだからな。万全でも効果圏は半径二〇〇メートル前後だろうし、タンク内の状況によって威力は減衰していく」

「まずい……。残った機も一斉に軍港へ落ちていくぞ！」

「最初の一発目で周りのアトポーシス自身が巻き込まれやがったんだ。遮蔽物から出るなよ！　息を止めて伏せろ!!」

即席とはいえ、さらに七発の燃料気化爆弾。

真っ白な爆発は、軍港の主要機能を片っ端から奪っていく。

クウェンサーは轟音の渦に放り込まれた。ドラム缶の中に詰め込まれて金属バットで外から殴られたような痛みだ。自分がうつ伏せに倒れているのか仰向けに倒れているのか、それすらもしばらく分からなくなる。

「死ぬ……死ぬよちくしょう！　何でここまでやられてまだ死んでないんだ俺!?　俺超スゴイ!!」

「騒ぐなラッキーボーイ。次が来るぞ!!」

タタタン!!　というライフルの発砲音がクウェンサーの耳に入ってきた。アトポーシスは全機起爆したはずなのに何を今さら……？　とクウェンサーは思ったが、そうではなかった。

軍港の南側。

立て続けの爆発で薙ぎ倒されたフェンスを踏み潰すようにして、軍服を着た男達が何十人も軍港の敷地内へ突撃を仕掛けている。

今の所は車輪の壊れた装甲車の機銃などを無理矢理に動かして、その弾幕で敵兵達を押し返しているようだが、それもいつまで続くか分かったものではない。

そして予想通り増援の要請が無線に届く。

先ほどのラテン系の兵士からだ。

『軍港南側からの敵兵侵入を阻止する。動ける兵士は火器を拾って集合してくれ！　第三兵器庫は半壊したがまだ中身は使える!!』

「クソ掃除の押し付け合いだけは達者だな。どうするヘイヴィア!?」

「ほっとけ。優等生のわがままなんか聞いてられるか」

あっさり言われて、クウェンサーは動きを止めた。

思わず瞬きしてから、改めて尋ねる。

「……マジ？　邪見にされたからって見殺しにまでする？」

「そうじゃねえよ。アトポーシスがあれだけだって保証はどこにあるんだ？　見ろ。北と西だ。五〇〇メートルの辺り、地上から真っ直ぐ飛行機雲みてえなのが伸びてるだろ。おそらくアトポーシスの垂直発射用ブースターのもんだ。早いとこランチャーを吹き飛ばさねえと、第二群をセットされるぞ。打ち上げられたら軍港はもう保たない」

ヘイヴィアは二ヶ所の飛行機雲を交互に指差し、

「港っつったって軍事施設だぜ。分厚いコンクリートに守られた地下空間は結構ある。見た目の被害ほど死傷者は出てねえはずだ。だがそれだって確実な安全地帯って訳じゃねえ。何度も燃料気化爆弾で攻撃されたら、生存者はまとめて瓦礫の下に埋められちまう」

「……北と西、どっちからやる？」

「どっちでも同じだ。ついて来い」

ヘイヴィアからサイドアームの軍用拳銃を投げ渡されたクウェンサーは、とりあえず西の方から攻める事にする。

五〇〇メートルと言えば、アサルトライフルなら届いてしまう距離ではあるが、間の道のりがあまりにも雑多だった。元々は小奇麗なオフィスビルの並ぶ大通りだったようだが、歩道どころか車道にまでバラックが増築してあり、さらに狭い道のあちこちには様々なゴミが山積みにされている。道幅など道具街の小道程度しかなかった。遮蔽物も多く射線は確保されていない。

「ゴミ山に沿って進めよ。敵兵が紛れている場合、バラック程度なら貫通しやがるぞ」

家の壁よりゴミの方が硬いというのもあんまりだが、事実なのだから仕方がない。

「敵って結局どこだと思う？　やっぱり『信心組織』かな」

「アトポーシスは外貨獲得のために売り出されてるっつったろ。これだけで分かるもんじゃねえよ。大体、アマゾン方面の軍港だぜ。海を北に進めば『情報同盟』と『資本企業』の本国がある。オブジェクトの中継基地としては要所だよ。襲いたがっているトコなんていくらでもあるぜ」

ただ、ランチャー自体は隠しようがなかった。

何しろロケットのように無人航空機を大空に向けて次々と発射したのだ。発射前は隠せたかもしれないが、してしまった後はどうしようもない。人々の注目は軍港の爆発の方に向いているが、混乱の波のいくつかはランチャーの方に向けられていた。逃げ惑う人々に混じって、遠巻きに観察するような視線がいくつもある。

「あれか」

二〇〇メートルまで近づいたところで、ヘイヴィアが呟いた。

「大型トラックの荷台に無理矢理ランチャーを取り付けてる。クレーンで吊ってるのは四機ワンセットのアトポーシスだな。翼を折り畳んでいるからいまいち分かり辛いが」

「セット前にケリをつけよう。敵は全部で何人いる？」

「見て分かるだけで一〇人はいるぜ。しかもこの人混みの中にどれだけ混じっているか……」

言い終わる前に、二人はガチリという小さな金属音を耳にした。

すぐ近く、五メートルほどの距離にあるバラックの物陰から、軍服の男がサブマシンガンの安全装置を指で弾いた音だ。

「っ!?」

クウェンサーはとっさに使い慣れていない軍用拳銃を構えようとしたが、それより前にヘイヴィアが動いた。腰の大型ナイフを抜き、勢い良く投げつける。

大振りの刃は男の喉に深々と突き刺さり、敵兵は満足に悲鳴を上げる事もできずに崩れ落ちる。

ナイフを回収するため、ヘイヴィアは死体に近づきながら、

「音を立てるんじゃねえよ馬鹿野郎。派手にやるのはあと五〇メートルは近づいてからだ」

「……軍の学校って、そんな事まで教えるの？」

「いいや、教科書通りじゃ駄目だな。ここまで重いと投げ斧のやり方じゃねえと。刃の回転で安定させるからさ、意外と刺さらねえもんなんだぜ」

調子に乗って解説を続けている間に他の敵兵に発見された。

馬鹿二人が慌ててゴミ山の陰に飛び込むと同時に一発の銃声が鳴り響き、それが凄まじい連射音の渦を誘い込む。

「死ぬ死ぬ死ぬ!!」

「つーかここまで連射されてんのにまだ生きていられるのが不思議でならねえ！　あいつらちやんと狙って撃ってんのか？　ただパニクッてるだけじゃねえだろうな!?」

とはいえ、誰がどんな意思で撃った弾だろうが当たれば死ぬ。そして数の上では圧倒的に不利。下手に遮蔽物から顔を出しただけで、弾丸の嵐に叩かれて死にかねない状況だ。

「どうにも素人臭せえな。どうするクウェンサー!?」

「その素人代表に言われてもさ！　そういえば街の人達ってもうみんな逃げたと思う？」

「ここは戦争国だぜ。これだけバカスカ撃ちまくってりゃ逃げようって考える程度の危機管理能力はあるはずだ!!」

「なら携行型の対戦車ミサイル取り出せ」

クウェンサーはヘイヴィアの肩を叩き、注目を集めてから、遠方にあるランチャー車両を指差す。

「クレーンでぶら下がったままのアトポーシスに撃ち込んでやれ。航空燃料満載だろ。周りの兵士はみんな吹っ飛ぶぞ」

「外道」

「連中はあれで俺達の基地を襲ったんだ。文句は言わせない」

ヘイヴィアが肩に下げたミサイルから安全ピンを抜いている間、クウェンサーは両手で構え

た軍用拳銃を適当に撃って敵兵を牽制しようとする。

しかし明らかに失敗した。

「痛ぁ!?　手首もげそう！　何でこんな無意味にデカい拳銃使ってる訳!?　そもそもサイドアームの意義が消えかかってる!!」

「五〇口径だぜ。やっぱ男ならデカい銃を持たねえとな！」

「人間の頭蓋骨ってこんな硬くないだろ……」

「どけどけ。ミサイルの準備完了だ！　これから楽しいキャンプファイアーだぜ!!」

「キャーヘイヴィアカッコイー!!」

「派手に踊れよ馬鹿野郎!!」

ミサイルの発射筒を肩で担いだヘイヴィアが、センサーの補助を借りて照準を合わせ、躊躇なく引き金を引く。

ボシュッッッ!!!!!!　という発射音は、爆発というより圧縮空気の噴射に似ていた。

それはバラックの隙間にある細い道を一気に突き抜け、ランチャー車両の真上を通過し、クレーン車に吊り下げられていた四機ワンセットのアトポーシスへと直撃する。

轟音が消えた。

閃光に塗り潰された。

自分で作った爆発の余波でひっくり返ったクウェンサーとヘイヴィアの上に、今まで自分達

が盾にしていたゴミの山が崩れてのしかかってくる。慌ててその場から転がり出るも、今度はボロボロのバラック小屋の壁がそのまま倒れてくる。

「何だろう！　この勝利に名誉を感じられない!!」

「勝っただけでもありがたいと思おうぜ!!」

斜めに傾いたバラックの壁は、細い道を挟んで隣のバラックへとのしかかった。馬鹿二人はその隙間に潜り込み、何とか事なきを得る。

「クウェンサー、クウェンサー。さっさと拳銃構えろ！」

「？」

「連中、ほとんど火柱になったが生き残ったヤツらが撤退を始めてやがる。最低でも何人か生け捕りにしねえと犯人が誰だったのかも分からなくなっちまうよ!!」

「ならヘイヴィアはそっちに集中しろ！」

「テメェは!?」

「見ろ。四機ワンセットのアトポーシスがまだ何セットか残ってる。北にもランチャーがあるんだろ。何とかしてあれを飛ばして、もう一方のランチャーを空爆する。そうしないと結局軍港がやられるだろ!!」

4

そして地元のテログループが使う安物の無線暗号を傍受しながら、『ユニコーン』のソギアは双眼鏡で戦況の確認をしていた。

首回りを囲む縫い痕を軽く指でかきながら、

「どうなってるー？」

「西のランチャーはほぼ全滅。北の方は奪われたアトポーシスで空爆を受けている最中」

答えたのはサーニャだ。

「軍港に突っ込もうとしていた連中は、航空支援が遅れているおかげで押し返されている。テログループ残存勢力はいずれも抵抗を諦め、撤退にシフトしているようね」

「車どうしてたっけ？」

「乗ってきたものが破壊された時は、私達が隠しておいたものを使いなさいと言ってあるわ。車体の下に爆弾、不発時のために燃料タンクにも細工済み」

うへえ、とマルスが嫌そうな声を上げる。

ソギアは無視して言った。

「用済みだしテログループは始末しろ。途中下車の心配のない、幹線道路に入ってからね」

「さーいえっさー」

ふざけた調子でサーニャは呟き、タブレット端末の画面でGPS発信器の位置情報を確認する。

人差し指一本で人命が散る状況で、気弱なフラットがか細い声を出す。

「中将は喜びますかね？」

「表向きは困った顔をする。だが内心では絶対にほくそ笑む。そもそも相手は『ユニコーン』と手を結ぶような悪党だからな」

適当な調子でソギアは言って、太い指でマルスを指差す。

「さー仕事だ仕事だ。狙い通りならカボチャの馬車のルートが変わるぞ。これから忙しくなる。ゴミ掃除に忙しいサーニャの分もみんな働け働けー」

5

『おいおい、How long will you stop crying. 一体いつまでメソメソ泣いてやがる。You will be smile soon もうそろそろ笑う番だぜ』

そう言ってくれた誰かはもういない。

彼女の頭を撫でてくれた無骨な掌の持ち主はもういない。

他の多くの兵士達と共に、ユーレンザックは南米の砂漠で散った。

そして彼女も他人に何かを期待するのをやめた。
だから、こうなる事も、心のどこかでは覚悟していた。
「移送ルートを変更しました」
高級車のハンドルを握る、メイド服をまとった下女がそんな事を言う。
一四歳程度の少女は表情を変えずに質問した。
「理由は？」
「安全保障上のリスク増加に伴う変更です」
聞いた話では、最寄の軍事施設まであと一〇分という話だった。手を伸ばせば届く所にゴール地点があったから、地獄のような逃避行にも何とか耐えられた。しかし蓋を開けてみればこれだ。安全地帯は目の前で奪われた。次の目標地点に着くまで命がもつかは分からない。いいや、着いたところでそこが安全地帯なのかどうかも判断できない。
最初は多くの護衛を含む大規模な車両団だったのが、今ではこの一台だけになっていた。
外部からの敵に襲撃されて数が減ったのではない。
彼女を護衛しているはずの兵士達が、まるで示し合わせたように自らの護衛対象へ攻撃を仕掛けてきたのだ。高級車が防弾仕様でなければ、蜂の巣どころか車体ごと炎上させられていただろう。
思えば、これまでも数々の政争に巻き込まれてきた。

だが、今回は毛色が違う。一線なんてとっくに越えている。多分、もう助からない。四六時中吹き付けられる悪意のせいで、すっかり硬化してしまった心が、いやに冷静にその事実を予測させる。

静かに息を吐き、少女は言った。

「これ以上付き合う必要はありません。降りてくださっても結構です」

「私の意思による行動です。何かに強制されている訳ではありません」

「なら命令します。降りなさい」

「それなら命令違反の罪を償うためにも生き残らなければ」

ゴッ、と高級車の真上に影が差した。

そう思った時には、眼前にビルに何か細長いものが突き刺さり、壁面が勢い良く爆発した。UAVが放った空対地ミサイルだ。降り注ぐ大量の瓦礫を見て、下女は慌てて高級車のブレーキを踏む。滑る黒塗りの車は瓦礫の山の直前で停まった。タイヤを擦りつけるようにバックする車体を追うように、瓦礫は二次的に崩れて路上に広がっていく。

無理にバックしたおかげで高級車の後部が街灯に激突する。

下女は高級車の後部ドアのロックを外し、運転席から飛び出した。後部ドアを開け、少女を引きずり出す。

「自動車では空対地ミサイルから逃げ切れません。細い路地を徒歩で移動しましょう！」

手を引かれるままに少女は足を動かし続けるが、どこへ向かっているかは予想がついた。自分達は誘導されている。

そもそも、変更前の目的地だった軍港が、彼女達にとっては最後の安全地帯だった。そこが使えなくなった以上、もはやゴール地点は限られている。

ここが潮時だ。

これ以上は巻き込めない。意味がない。

だから少女は言う。

「後は一人で何とかします。あなたはあなたで逃げなさい」

「何を馬鹿な」

「では質問します。我々はどこへ向かっているのですか」

下女から返答はなかった。

少女の手を掴む掌に、わずかに力が加わる。

「レックスポップ貸与フロート、厳密にはその跡地……ではないのですか」

「……」

「『連中』の予想通りのルートに追い込まれているだけ。それなら、あなたが死力を尽くす必要はありません。私一人が右往左往しても、いずれ同じルートへ誘導される事でしょう」

「……それでも、王の血筋をお守りするのが私の誇りなのです」

かつては、少女もそうした声に期待した事があった。
すがり、寄り添い、信用して。
そうした先に、『正統王国』第一一五独立近衛中隊、ホワイトベアーは全滅した。
あの野卑なジョークも。
頭を撫でてくれた大きな手も。
全て消えた。遺体の回収すらもままならない惨状の中で。
数多くの政争から少女一人を守るために、それだけの危険な状況へ彼らが身を投じ続けていたと知ったのは、何もかもが終わった後だった。
そして。
少女は、誰かに何かを期待するのをやめた。
やめなければならないと、思った。

6

テロリストの掃討もあらかた終わると、クウェンサーはＵＡＶアトポーシスを操っていたタブレット端末を放り捨てた。
遠方からヘイヴィアが帰ってくる。

彼は何故か泥まみれだった。

「運動会でもやってきたの？」

「駄目だ駄目だ。逃げたテロリストどもの車を追っていたんだけどよ。途中でいきなり爆発しやがった。トカゲの尻尾でも切られたんじゃねえのか」

「そりゃまた露骨な」

「なんかバックボーンありますって張り紙をベッタリ貼ってあるって感じだよな」

とはいえ、クウェンサーやヘイヴィアは作戦司令室で大きな地図の上に駒を置いていくような仕事はしていない。自分が戦っている相手の正体やスケールは気になるが、逆に言えばそれ以上の興味はない。相手にどんな思惑があろうが、やるべき仕事は何も変わらないのだ。

つまり、

「……テロリストはまとめて吹っ飛んだんだろ。やる事なくなっちゃったね」

「また優等生だらけの軍港に帰んのか？　駆け足で、足並み揃えて？　良いよ良いよ。あの混乱でしばらくは安否確認できねえ状態続くだろ。せっかく市場まで来たんだ。露店でなんか食っていこうぜ」

「こっちもこっちで大騒ぎだよ。銃撃戦に爆発だぞ？　一般市民の皆さんみんないなくなってるけど」

「金はカウンターに置いときゃ良いだろ」

「アマゾン方面の家庭料理って何？」

「とりあえず食えるもんだろ。ワシントン条約に引っかかったりはしねえさ」

言うだけ言うものの大きな冒険はできず、結局、どこにでも売っていそうなフライドチキンを（勝手に）購入する臆病者二人。小型トラックを改造した屋台に寄りかかりながら鶏肉にむしゃぶりついていると、ようやくクウェンサーは強張っていた頬が元に戻っていくのを自覚できた。

「あーあ。こんな安物が超美味い。グルメだよねえ、俺達」

「よおクウェンサー。〇パーセントのビールって任務中に呑んでもオーケー？　〇パーだぜ？」

「フライドチキンの時点でアウトだよ」

適当に言い合っていると、無線機から面倒臭そうなヤツの声が飛んできた。

『……動ける者は第三滑走路へ。部隊の再編を行う。負傷兵、およびその救護に当たっている者以外は至急第三滑走路へ集合しろ……！』

「あのラテン系だぞ」

「まだ生きてやがったのか、がり勉野郎が。どさくさに紛れて軍港にも弾丸撃ち込んでおくべきだったんじゃねえの？」

ひどい言いようだが、彼らはあくまで口に出しているだけ。襲撃時、実際に無言で撃ち込んできていたのは軍港の連中である。本来なら軍法裁判モノだが、あの混乱の中でまともな目撃

証言など得られないだろうし、軍港の連中が結託して仲間を庇ってしまえばそれまでだ。

『負傷したキャメリア中佐より指示がある。当軍港ではイエローレーベルが展開中。繰り返す、イエローレーベルが展開中。本来は将校のみが知る機密情報だが、作戦続行のためにやむなく情報を開示するとの事』

「イエローレーベルって？」

「面倒臭せえ仕事ってヤツだ。諸々の事情で追われている国のＶＩＰ様を、大使館、領事館、軍事施設なんかに避難させる作戦だな」

『当軍港の被害状況から、要人は我々の防衛能力を失格とした。しかしイエローレーベルは継続している。サブの拠点候補へ向かう要人と合流してお守りする。動ける者は動け。部隊を再編してからイエローレーベルのリカバリーを行う！　移動中の無防備なステイビア＝ニコラシカが地元のテロリストやマフィアにさらわれでもしたら歴史に名前が残るぞ!!』

「……ニコラシカ？」

と、それまでふざけっ放しだったヘイヴィアの声色に、わずかな硬さが混じった。

クウェンサーは怪訝な顔で、

「どうかした訳？　『貴族』サマの夜会で飛び交ってたお名前とか？」

「馬鹿野郎！　上だよ上、俺よりさらに上！　ニコラシカっつったらボルガ方面の『王族』だぜ!?　ステイビアは末っ子の王女様だが、王位継承争いでは最有力候補って言われてやがる。

本来なら一生護衛つきだよ！　ボルガ方面じゃ女王の即位二〇年で次期継承者を決める事になってるから、今一番ステイビア王女の価値は跳ね上がってやがる!!」

「美人さん？」

「美人っていうか年齢的に美少女」

そして二人はやる気を出した。

骨だけになったフライドチキンを適当に放り捨て、クウェンサーは改めて会話に参加する。

「つまり軍港が襲われたのって、ステイビアとかいう箱入り娘の移動ルートを変更させるためだったって事？」

「だな。使い捨ての駒だったテロリストのバックにいる『誰かさん』は、移動ルートを変えた上で、その途中で何かを仕掛けるつもりなんじゃねえのか？」

そもそも『王族』なんていう『正統王国』の頂点がその辺をウロウロしている理由も不明だが、利用したい人間からすれば千載一遇のチャンス。特に恨みがなくったって、とりあえず金のためにさらってみようと考える人間だって珍しくないはずだ。

……と、思われがちだが、

「なあ。『王族』なんてさらってどうするんだ？」

『平民』のクウェンサーは眉をひそめて言った。

「いくらなんでもレア過ぎる。ゴッホやピカソの名画を盗んだって簡単には売り出せないのと

同じだろ。しかも王女を盾に脅迫されたなんて事態になったら、王家や『正統王国』全体の『国家の威信』ってヤツが関わってくる。家族の絆なんてものとは別次元の力が働いて、たとえ王女を犠牲にしてでも犯人を皆殺しにしようとするはずだぞ。……それができなきゃ舐められる。有力諸侯が暴れる火種になりかねない」

『正統王国』では、誘拐の狙い目は『平民』の富豪』だとする意見が強い。『貴族』を相手にしてしまうと、金銭、権力、人脈などを徹底的に駆使して抵抗されるからだ。まして、『貴族』のさらに上にある『王族』へ手を出してしまえば、もう引き際なんてものは全て失われる。『情報同盟』や『資本企業』など、他の勢力へ高飛びしたとしても、様々な外交手段を駆使して『正統王国』へ送還させるか、それができなければ暗殺部隊を越境させるかといったところだろう。

しかし、『平民』のクウェンサー以上にそうしたセオリーに詳しそうな『貴族』のヘイヴィアは、首を横に振った。

「ステイビア＝ニコラシカについては事情が違うな」

「？」

「そもそもボルガ方面っていう、東欧でも一〇本指の王位継承問題があるんだ。敵対する候補者の一派か、あるいはそいつらに自分を売り込みたい勢力なんかがステイビアを潰しにかかったって不思議じゃねえ」

「……それ、軍が絡むほどヤバいの？」

「つまりそんだけ焦りまくる理由が、他の『候補者』にはあるって訳だ。噂だがな」

ヘイヴィアはフライドチキン店の屋台の壁に背中を預け、

「ディミクシ＝ニコラシカ。三〇過ぎのオッサンだ。すでに他の『候補者』を最低でも二人は殺ってるなんて話なら、そこらのサロンに行きゃあ嫌でも耳にするぜ。とはいえ、年齢の面で言えばディミクシは一番上だ。ステイビアだけじゃねえ。他の『候補者』全員を並べてもな」

「だったら継承順位もディミクシが第一位じゃないのか？　先天的な病とかで余命が極端に短い場合は順位の変更があるなんて話もあるみたいだけど」

国家のトップに立つ者は、心身の都合によって職務遂行が困難な場合、第三者の手で権限を解除させられる場合も珍しくない。

さらに『正統王国』の場合は何よりも血統を重んじるため、王家の血筋全体に遺伝的リスクを与えかねない事態を回避したがる風潮もある。

だが、

「ディミクシ＝ニコラシカが抱えているのはそんなレベルじゃねえんだよ」

「じゃあ何で継承順位の変動が？　他の『候補者』を消しまくってるなんて話が出ているぐらいなんだから、順位は相当低く設定されちゃってるんだろ」

「ボルガ方面の女王は聡明で多才、軍事も政治もお手の物だって話だが、欠点がない訳じゃね

え。『モスクワの女神』と呼ばれた女王も、男を見る目のなさについては歴史に残るレベルなんだと」

「……つまり、夫の方が浮気してたって訳か？」

「代理母が出産したって事になってるがな。愛人の方の連れ子って説が濃厚だが、調べたライターは川に浮かんだ。『正統王国』は戸籍じゃなくて血統が全てだ。ボルガ方面の『王族』の血は女王の方に連なっている。仮に、だ。夫と愛人の連れ子がディミクシだとしたら、あいつにはボルガ方面の『王族』の血は一滴も流れてねえ事になっちまう」

もしもその話が本当だったとしたら、ディミクシ＝ニコラシカは継承順位が低いどころか、存在すらしない事になってしまう。

それでも彼がボルガ方面の王位を獲得しようとした場合、採るべき選択肢はかなり絞られてくる。

他の『候補者』を皆殺しにする。

『疑惑』も問題だが、王の血筋そのものが『断絶』してしまうよりはマシだろう。やむを得ず、周囲の者は『疑惑』のディミクシに王位を与えようとするはずだ。

「でも、『正統王国』には血統局があるだろ？　王位継承の際は絶対にＤＮＡ情報を調べるはずだ。ディミクシが何をやったってＤＮＡ情報が適合しなければおしまいじゃないのか？」

「その血統局が正常に機能していればな」

あっさりと。

予想通りの質問に答えるといった調子でヘイヴィアは即答する。

「血統局は表向き、政治からは切り離された組織だ。じゃねえと『貴族』やら『王族』やらのお家騒動の調停ができなくなっちまうからな。……ただし、血統局の重役ってのは王室御用達の家庭教師協会経験者で固められている。つまり、平たく言えば天下りってヤツさ」

「……まさか」

「『王族』ともなればご子息一人に数十人の家庭教師軍団がつく。そしてここ数年でディミクシの息がかかった経験者が立て続けに重役の椅子を手に入れている。過半数を独占って訳だ。記録の一つ二つ、差し替える事は難しくねえ状況だな」

ディミクシ＝ニコラシカにはボルガ方面の王位の不正獲得という疑惑がある。

その野望の成就のために、本来の継承候補者であるステイビア＝ニコラシカを舞台から追い出そうとしている可能性がある。

となれば、テロリストを使って軍港を襲撃させ、ステイビア王女の逃走ルートを変更させたディミクシ派の狙いは誘拐ではなく暗殺、という事になるのだろうが……。

「えげつないね。莫大な権限があるとはいえ、家の中で殺し合いとか」

「何言ってんだ？　継承問題ってそういうもんだろ」

「……あーあ。なるほど、『貴族』も『貴族』でイカれている訳か」

『平民』には分からん、とクウェンサーは適当に吐き捨ててから、

「……でも、『王族』と『王族』の争いだろ。そんなもん、直属の近衛部隊の衝突だけでも戦争になるぞ。まして、政治的な力を存分に振るったらオブジェクト同士がかち合う可能性だって……」

「ステイビアは孤独の王女だ。他の『王族』と違って直属の近衛部隊は持ってねえ。もっとも、以前は違ったようだがな」

「……？」

「正統王国第一一五独立近衛中隊。通称ホワイトベアー。王女を守る盾として機能していた部隊だ。三年前に軍事演習の途中で『情報同盟』に襲撃されて壊滅した。……ただ、軍事演習への参加経緯がかなり強引でな。ディミクシ派の横槍があったって話も出ている」

「……となると、『情報同盟』の軍服を着ていた連中ってのも、本当に『情報同盟』だったって証拠はない訳か」

『安全国』の中で一人殺せば大事件だが、『戦争国』なら事情が違う。一〇〇人いようが二〇〇人いようが、新聞の片隅に記事が載る程度の規模に圧縮されてしまう。……何しろ、今は世界中で絶えず小規模な戦争が続けられている時代なのだから。

政敵の力を削ぐ。

それだけのために行われた、周到な虐殺。

「それと同時期に、ディミクシの周囲を新参の部隊がうろつくようになった。『入学試験』に合格して、ディミクシのご機嫌取りに成功したって話が出ているんだが……」

そこでヘイヴィアは自分の親指を使って、喉を掻っ切るようなジェスチャーを行った。

そして言う。

「その部隊ってのが、第二〇二機動支援中隊……つまりユニコーン。連中の悪名の中でも、燦然とそびえ立つ金字塔ってヤツだ」

7

「嫌な感じだ」

集落からわずかに離れた高台の上で、咥えた葉巻に火を点けながら、ユニコーンの大男、ソギアは呟く。

「このじっとりした感じ。砂漠のオアシスを思い出すね」

それを聞いて、トラックの荷台に寄りかかっている女性隊員サーニャが皮肉げに笑う。

「いつのどこを思い出したって後味の悪さしかないでしょ」

「まーそりゃそうなんだけどね」

と、無線情報の傍受を行っていた青年隊員マルスがソギアの方へ声をかける。

「まずい、まずいっすよ。軍港の連中、意外と早く持ち直したっぽいっす。このまま部隊を再編されると基地の機能を取り戻されかねないっす。イエローレーベルの拠点としての機能が回復したら、せっかく遠くへ逃げ始めた『小鳥』が引き返して籠の中に入っちまうっすよ」

「ど、どうするんですか？」

フラットがおどおどしながら尋ねると、マルスはサーニャが寄りかかっているトラックの荷台を指差した。

「センパイの『コレクション』を使ってみては？　『情報同盟』なり『信心組織』なりの軍服を身にまとってロケット砲でも撃ち込めば一網打尽っすよ。連中、生存者点呼のために、障害物ゼロの滑走路で整列しているみたいっすから」

女性隊員サーニャは皮肉を込めてコスプレマニアと呼ばれている。彼女は『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』といった世界的勢力から地域のゲリラやテロリストまで、あらゆる軍服や装備品を調達しているのだ。

そしてユニコーンは一つの戦場で様々な軍服に着替えて破壊工作を行い、大きな混乱を誘発させる。『情報同盟』の軍服を着て『資本企業』の部隊を襲い、その血も乾かない内に『資本企業』の軍服に着替えて『信心組織』の部隊を襲う。『信心組織』の救難信号を発して、近づいてきた回収部隊を皆殺しにし、彼らの輸送ヘリを使って安全に戦場から逃げていく。

少数精鋭でありながら『戦争の大きな流れ』に介入し、なおかつ安全に生き残るためには、

正攻法ではどうにもならない兵力の差を、ダーティな手で埋め合わせるしかない。もちろん、ユニコーンはそうした方法が大の得意だった。

しかし、

「それじゃ何のために地元のテロリスト使ったのか分かんねえだろ。第一射こそ成功するものの、戦闘が長引けば多勢に無勢だ。四人で何とかなる数と状況じゃねえよ」

ソギアは煙を吐きながら、適当な調子で言う。

「大体、深刻に考える事はねえ。連中の再編は絶対に失敗する。人員・兵器をかき集められたとしても、上層部が軒並み死んだ状況じゃ、誰が指揮を執るかで内輪揉めが起こるからな。……同じ部隊の中でも派閥はある。誰もが急がなくちゃならねえ場面だって理解していても、やっぱり人の欲を完全に消す事はできねえ」

トラックの荷台に寄りかかったまま、サーニャはジロリとした目つきでマルスを睨む。そして短く言った。

「新入りが」

「いい加減その新入り扱い何とかなんねーんすかね!? 部隊に入って三年は経ってるんすけど！」

「失敗から学ぶ方法を体得できねえ内は何年経とうがルーキーだよマルス君。それとサーニャ、『コレクション』からフライトバーグ空軍基地の軍服を出してくれ」

「フライトバーグ？」

マルスが眉をひそめると、ソギアは火の点いた葉巻を指で挟んで、オレンジ色に輝く先端で上空を指し示した。

「黒塗りの高級車でお出迎えだ。こっちもドレスコードに引っかからねえようにしねえとな」

ステルス性を意識した、漆黒の輸送ヘリが近づいてきた。物資の輸送というより、殺し屋の投下目的で使われる事の多い機種だ。二つのローターを持つ大型機はソギア達の周囲を軽く旋回した後、フラットが設置した紫外線マーカーを受光すると高台の上へゆっくりと着陸してくる。

数名の護衛に守られる形で降りてきたのは、濃いグレーのベレー帽を被り、サングラスを掛けた初老の男だった。階級は大佐のようだが、胸元の勲章の数は同ランクの平均値に比べると若干少ない。

ソギアは敬礼したが、口には葉巻を咥えたままだったので、小馬鹿にしているような雰囲気が残ってしまっていた。

「やあやあマキアーレ大佐。あなたのような方がわざわざ迎えに来てくれるとはね」

「一本いただいても？」

「市場に転がっていた、どこ産のものかも分からない安物ですけど？」

「安酒を呑みたい気分なんだ」

ソギアが差し出した煙草の端を口で噛み切り、人差し指と中指で挟むマキアーレ。ソギアがライターを取り出す前に、マキアーレの護衛が大佐に火を差し出す。

軽く吸って、マキアーレの顔の皺がわずかに増えた。

ソギアは悪びれず、

「だから言ったのに」

「軍港の損害が一定値を超えたと報告を受けている。ステイビア王女のイエローレーベルも目的地は変更された」

「どうせ襲撃失敗して王女が軍港の中に入ったって、軍港の上層部は買収済みなんでしょ？」

「二ヶ月前にやっと買収に成功できた程度の不確定因子だ。土壇場で寝返る危険性は拭えない。作戦通り、イエローレーベル変更の方がやりやすいだろう」

当然、『味方』扱いだった軍港の上層部は、自分達が襲撃される事など知らされていない。

この一点を見てもマキアーレ大佐の性根がユニコーン並に腐っている事が窺えるだろう。そしてユニコーンの面々は腐りきっているので、そんな程度でいちいち顔色を変えたりはしない。

「フェイズの変更に伴い、諸君らを我々の隠れ家に移したい。準備は？」

「今着替えますんで、その後に。ユニコーンの格好のままフライトバーグ空軍基地をうろついたら目立つっしょ？　……ああ、そこのトラック、うちらの備品なんで。ヘリで吊り下げてもらえます？」

「そのサイズなら機内に格納できるよ」

ユニコーンの四人は軍服を着替えると、大型の輸送ヘリに乗り込む。

ヘリが完全に離陸してから……つまり万に一つも盗み聞きされる心配がなくなってから、マキアーレ大佐は口を開く。

「……『御前試合』の図式がようやく完成したな」

「こちらは誰を出すんです？」

「ディミクシ王子自らが。土壇場でステイビア王女を撃ちたくないなどと操縦士エリートに駄々をこねられても困るのでな」

ソギアはわずかに驚いた顔をした。

「比較的安定しているとはいえ、『戦争国』に？　情報が漏れたらよその連中が活気づきますよ」

「王子はアマゾン方面で一番頑丈な場所にいるから問題はないさ。肥料を使った鼻の曲がりそうな爆弾程度でどうにかなるセキュリティではない」

なるほど、とソギアは軽く呟いた。

おそらく、最新型のオブジェクトの中にこもりっきりなのだろう。

「では、後は成り行きを見守るだけですか」

「王女に恨みはないがね」

マキアーレの言葉に、ソギアはニヤニヤと笑う。

ディミクシ＝ニコラシカの味方は多い。しかしそれは彼の人徳によるものではない。権力者を持ち上げる理由は昔から変わらない。

利用しやすいか否か、その一点に尽きる。

ディミクシ王子は評判通りのクソ野郎だが、利害関係がはっきりしている分、制御しやすい。『周囲の状況を観察し、ディミクシが自ら選択した』ように見せかけておいて、実は『周囲の状況』そのものをこっそりとセッティングしておいた……という風にしておけば、簡単に言動を誘導し、操り人形にできる。

対して、ステイビア王女は未知数だ。その幼さから操り人形にするのは容易いという意見もあるが、幼い故の正義感や奇麗ごとが利害を無視して働き始めると、舵取りが一気に難しくなるリスクがある。

という訳で、清廉潔白な白雪姫をぶっ殺して、どす黒い白馬の王子様を飾り立てようという動きが生まれている訳なのだった。

「危ない橋を渡りましたね。『将』の位はそれほど眩しいものですか、大佐？」

「そちらこそ。金も殺しも全ては『人脈』拡大のためという考えは少々理解できんね」

大型の輸送ヘリはひっそりとフライトバーグ空軍基地へと向かっていく。

黒幕どもを包み隠し。

国民の税金を使って陰謀の証拠を防衛する形で。

8

クウェンサーとヘイヴィアは早々に、軍港の生存者達と合流する事を諦めた。
錯綜する無線のやり取りを聞いているだけでも、誰が主導権を握るかで揉めまくっているのが窺える。マニュアルの抜け穴を探すために書類の束と睨めっこしている辺り、今が即応性の求められる緊急時である事がまるで分かっていないようだ。
「……その内、味方同士で撃ち合いでもやりかねねえな、この優等生ども。下手に近づいたら列に並ばされてそれっきりになっちまうぜ」
「でも軍港の連中の正規情報がないと、ステイビア王女の『次の避難ルート』は分からないんじゃないの？　トップシークレットでしょ。普通の軍の端末で全員が閲覧できるようにはなっていないと思うけど」
「考えろ。推理するのだよクウェンサー君」
ヘイヴィアは携帯端末で周辺の地図を表示して、
「比較的安定しているとはいえ『戦争国』だぜ。本物の王女サマがウロウロしているって分かったら『情報同盟』だの『信心組織』だのが今やってる作戦を放棄してでも殺到するぞ。あの軍港が使えねえって分かった以上、最短ルートで第二候補へ向かうはずだ。単純に、一番近い

『正統王国』の軍事施設を目指すはずじゃねえの？」

「その最短っていうのが三〇〇キロは離れているじゃんか。防弾処理もしていない一般車で馬鹿正直に突っ走ると思うか？」

「地図に表示されてんのは『今も現役で機能している施設』だけだ。だが、王女サマは一刻も早く安全ってのを手に入れようとしている。なら、『廃棄されたが耐久性は保持している施設』に逃げ込もうとしたって不思議じゃねえ」

ヘイヴィアが操作をすると、地図上に新しいマーカーが追加される。

軍港と同じ、海沿いの施設だ。

「レックスポップ国際空港跡地。数年前に流行ったレンタルフロート政策の夢の跡だ」

「……『安全国』から『戦争国』への支援活動の一つだったよな。金のまま渡すと役人のポケットに入っちゃうから、国際空港だの上下水道だの発電所だの、大規模インフラ設備をフロートに乗せてそのままレンタルするっていう……」

「レックスポップ国際空港は『正統王国』からのレンタルフロートで、表向きは民間空港だったが実際にはオブジェクトの整備施設も兼ねていた。それを地元のゲリラが嫌って、牽引用の船舶を魚雷で吹っ飛ばしたのさ。速度を落とせなくなったレンタルフロートは沿岸に激突して浸水した」

「強度の方は？」

「オブジェクト絡みの運用が想定されていたんだぜ。フロート自体の硬さはかなりのもんだ。内部の非常電源を回せりゃ、防塩高耐久の対空防御システムも再起動するかもな」

レックスポップ国際空港跡地は襲撃された空港から南へ八〇キロの位置にある。ヘイヴィアはゴミの山から小型のバイクを引っこ抜くと、ドライバーを使って鍵穴を強引に破壊してエンジンに火を点けた。

後ろに乗るクウェンサーは相棒に質問する。

「途中の道で見つけられると思うか？」

「さあーね。つかステイビア王女側は同じ『正統王国』の中に敵がいるって認識している訳だろ。俺らみてえな不良軍人がうっかり近づいても蜂の巣にされねえもんかね？」

「……ぬいぐるみを振り回す程度の反撃だとありがたいね、そりゃ」

ヘイヴィアはレックスポップ国際空港跡地までの最短ルート……つまりステイビア王女側が採るであろうコースを全速力で進んだようだが、途中でそれらしき車列と遭遇する事はなかった。

それどころか、

「何だ何だ。王女どころか道中で暗殺したがっているディミクシ派の罠も兵隊も待ち構えてい

ないじゃないか。フロートへの全てのルートを塞いでいるとしたら、どこかでバリケードの一つにでもぶつかるはずなのに……」

「となると……こりゃヤベエな。連中、ステイビア王女がレックスポップ国際空港跡地に入る事を目標に設定していやがる。罠があるとすればフロートだ！　噂の王女サマはもう中に入っちまったのか!?」

レックスポップ国際空港跡地の近くで、ヘイヴィアは小型バイクを停めた。緩やかに湾曲するコンクリートの堤防の一部分が、真四角のフロートの激突で強引に破られている。フロート側も若干のへこみがあり、四つある角の一つに向かって傾いているものの、大きな損害があるようには見えない。……もっとも、傾いてしまっている時点で空港としては使い物にはならないだろうが。

人工物のフロートと言っても、国際空港の機能を丸ごと搭載したものだ。当然ながら広大。実に二キロ四方の大地が浮かんでいる光景は異様の一言に尽きた。

「？　ヘイヴィア、何でバイク停めた訳？　急いでステイビア王女と合流するんだろ」

「人の説明聞いてやがったのか？　レックスポップ国際空港は表向き民間空港だったが、実際にはオブジェクトの整備能力を担っていたんだぜ。って事はだ……」

ヘイヴィアの説明が終わる前に、状況が動いた。

上空を、大型の輸送用ティルトローター機が何機も通過していったのだ。降下用の人員はお

ろか、軽量の戦車ぐらいなら搭載できそうなモデルだ。

『正統王国』の機種だが、クウェンサーとしては安心できない。そもそもステイビア王女の命を狙うディミクシ派も同じ『正統王国』の人間である。

クウェンサーは双眼鏡でティルトローター機の胴体部分を観察し、

「……軍港の識別コードがあるな。派閥争いはもう終わったのか？　あの優等生ども、一応、ステイビア王女を守る気はあったって事か」

「ちくしょう！　ボケッとしている暇はねえぞクウェンサー。俺らもさっさと行かねえと!!　お城に閉じ込められた眠り姫を助けに行こうぜ!!」

「何で？　優等生の大部隊がステイビア王女を救出してくれるなら……」

クウェンサーの声が爆音に遮られる。

オレンジ色の閃光が上空で炸裂し、その後に巨大な太鼓を叩くような衝撃が馬鹿二人の腹にのしかかってきた。とっさに身を低くするクウェンサーは、ティルトローターの一機が空中で爆発し、黒煙と残骸を撒き散らしているのを目撃する。

「撃たれたぞ!?　空港跡地のフロートからだ！　ミサイルとガトリング砲をジャンジャンばら撒いている!!」

「非常電源が回れば整備いらずの対空火器が再起動するかもっつったろ！　あのままじゃ狙い撃ちだ。空飛ぶ宝箱が一つ残らず御開帳されちまう!!」

鈍重な輸送機に乗ったまま粉々になる愚を避けようという動きは、軍港の連中にもあった。カーゴハッチを開いて強引に兵士達や空挺戦車、装甲車などが降下していくのがここからでも見える。

しかし戦争条約を無視すれば、パラシュートなど格好の的でしかない。

ふわりと速度を落とした人間や装甲兵器の一部へ、容赦なくガトリング砲の曳光弾が襲いかかっていく。

「何だ何だ。助けに来た味方を撃ちまくって！　噂の眠り姫の寝相の悪さは恐怖政治レベルなのか!?　そりゃ優等生どものニヤケ顔を見れば撃ち込みたくなる気持ちは分かるけどさ！」

「……いいやクウェンサー、様子がおかしい。さっきから無線を使ってコンタクトを取ろうとしているんだが、どの周波数帯でもノイズだらけだ。誰かがジャミングしていやがる。まるで王女サマの本音を覆い隠そうとしているみてえだ」

「非常電源や対空火器は、ディミクシ派が事前にセッティングしていたって事？　ステイビア王女を孤立させるために」

「自動迎撃モードなら王女サマの意思は無関係だ。ここでの同士討ちが全部あの子のせいにされちまう！　早いトコ空港フロートに潜り込んで非常電源を落とさねえと、いけすかねえ優等生どもが全員血の雨の材料にされちまうぜ！」

まともなルートを通っては機銃やミサイルの嵐に呑み込まれる。

クウェンサーとヘイヴィアはフロートから少し離れた沿岸部から、海の中へと入る。巨大船舶の運航を前提として開発しているのか、潜ってみると驚くほど底が深いのが分かる。ざっと見ても数十メートルはありそうだった。

「うっぷ！　最悪、最悪です！　超臭いよ!!　ここの人間は海洋資源を何だと思っているんだ!?」

「それが分かるようになったら先進国の仲間入りだろうさ。ちくしょう、ライフルもミサイルも全部捨ててぇ。浮き袋を用意してから飛び込むんだった！」

フィンやボンベなどの補助もなく、何かと重たい軍用品をしこたま抱えたまま、ほとんど溺れるような格好でフロートへ近づいていく馬鹿二人。

「秘密の入口とかってあるの？」

「アホか。近づいてよじ登って上陸する。基本中の基本だぜ」

幸い、魚雷や対艦ミサイルなど『海』関係の防御システムは手薄なようだった。いくつかの機雷が浮いていたが、船舶サイズのものなので、生身の人間であるクウェンサー達なら簡単に素通りできる。

しかし、海の中を進んでいく二人は、フロートに辿り着く前にもっとまずいものを見つけた。

フロートの真下。

数百本の金属ワイヤーで、海中に吊り下げられている巨大なシルエット。

その正体を知って、クウェンサーは思わず呟いた。

「……オブジェクト……？」

9

つまり、構図自体は単純だった。

そもそも、あのオブジェクトは何なのか。

「俺達『正統王国』の第一世代だよ。……それもかなり古い。確か『アサルトシグナル』だ。ミリタリーサイトで見た事がある。『ベイビーマグナム』とは系統が違うが、参考にはなっているはずだ」

巨大なフロートの壁面をよじ登りながらクウェンサーは言った。

「それが何でまた……？」

「知るかよ。そもそも運用できる訳ないんだ。セットになっている操縦士エリートは五年前にテロで爆死している。『安全国』の中でな。……今じゃ無用の長物なのに、誰かが秘密裡に取り寄せた」

では、使い物にならない『アサルトシグナル』を用意するメリットはどこにあるのか。

平べったい敷地の上へ辿り着いたヘイヴィアの予想はこうだ。

「ステイビア王女の翼をもいだ、第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーの壊滅の時と同じだぜ」

「……『安全国』の中で一人殺せば大事件。でも、『戦争国』なら一〇〇人殺したって小さな記事にしかならない」

「どうにかしてステイビア王女をオブジェクトに乗せちまう。王位継承問題をオブジェクト同士の対決で決着をつけるっていう形に整える。そうすれば『クリーンな戦争』の範囲内で、堂々とステイビア王女を暗殺できるって寸法だ。戦争条約にも違反しねえ。オブジェクトとオブジェクトをぶつける『御前試合』は、ステイビア王女一人を暗殺するための馬鹿デカい計画だったって訳だ」

狙撃や爆破などの方が簡単だが、権力闘争の末、年端もいかない少女を殺したとあっては、国民の不満が募るばかりだ。絶対君主制の『正統王国』では痛くも痒くもないと思われがちだが、周辺の有力諸侯から『国家元首に相応しいとは言えない』と判断されるのは、いくら『王族』でも面白い状況とは言えないだろう。

『クリーンな戦争』の中で歩兵が血を流す事は（公式記録の中では）珍しいが、逆に、オブジェクトに搭乗する操縦士エリートが死闘を演じる事については、民衆は刺激に慣れてしまっている。

オブジェクトに乗っている以上は、死ぬ事も覚悟しているはずだ。

そういう図式がすでに完成してしまっている。

「でも、合法的にステイビア王女を消す下準備のために部隊を丸ごと消したり本来のエリートを暗殺したり……本末転倒じゃないのか？」

「世の中には揉み消せる問題と消せねえ問題ってのがあるのさ。ディミクシの消しゴムのサイズが分かるってもんだぜ」

ヘイヴィアは自分の胸を親指で示し、

「かくいうヘイヴィア様だって有力『貴族』ウィンチェル家のお家騒動の真っ最中だ。普通に考えりゃ『戦争国』をウロウロしてたら暗殺を企てられそうなもんだぜ。敵国の銃や爆弾を調達すれば簡単に完全犯罪ができる訳だしな。それをされずに済んでいるのは、ビッグな俺様が『消しゴムで消せる程度のサイズじゃねえから』の一点に尽きる」

下っ端の『平民』からすればやりたい放題に見える『貴族』や『王族』にも、彼らなりの事情というものがある訳か、とクウェンサーは適当に結論付ける。

そうなると。

当然、

「ステイビア王女のために、秘密裡に運び込まれたオブジェクトはガラクタ同然だろ。一発で確実に撃ち抜くためだけに用意されてんだからな」

「ディミクシ派の陰謀に気づいて、王女サマがオブジェクト搭乗を拒んだ場合は？」

「オブジェクトで生身の王女サマを嬲り殺しにすれば国民の反感しか買わねえ。……が、オブ

ジェクトがあるのに乗らなかったってなれば話は別だ。単に怖じ気づいたってみなされるだろうな。そもそも、だ。俺らの世界じゃ果たし状を受け取る受け取らないは自由だが、一度受けた決闘をすっぽかすなんて真似すりゃ、社会的地位はどん底まで落ちるぜ。生存権も剝奪されるかもな」

つまり、ディミクシ派からすれば、ステイビア王女をレックスポップ国際空港跡地に運び込んだ時点で、ほぼ作戦成功。

後はディミクシ派のオブジェクトが出動し、『正規の手順通りに』大火力で殲滅してしまえば、安全に暗殺する事ができる。

重要なのは、『ステイビア派もオブジェクトを持っていて、ディミクシ派と対等に戦える』という公的な事実のみ。慌てふためくステイビア王女が、海中のオブジェクトを動かせるかどうかは問題ではないのだ。

「……イカれてるよ」

「状況をどうにかするにしても、まずは対空火器を何とかしようぜ。非常電源を潰せば防御システムは止まるはずだ！」

またしても上空のティルトローター機がガトリング砲に撃ち抜かれ、クウェンサー達の近くへと落ちてくる。炎上する残骸のすぐ近くを通り抜け、クウェンサーとヘイヴィアはフロートの上を走っていく。

フロートの内側まで入ったせいか、無線通信用のジャミングは弱まっていた。

ディミクシ派の使っていない周波数帯で手当たり次第に情報を発しているのか、特にチューニングをしていないクウェンサーの無線機にも女性の声が届いてくる。

『……こちらは、ジジ……。フロートの防御システムは制御不能です！　勝手に、攻撃……こちら、止められな……。識別もしていない……。このままでは撃ち抜かれるだけです!!』

「へい、へい！　空には届いちゃいねえよ！　アンタが噂の王女サマで良いのか!?　レックスポップに上陸した。『御前試合』の構図についても、アンタをオブジェクトに乗せたら全部終わるのも了解している。これから非常電源を吹き飛ばしてやるから情報を寄越せ!!」

『私は宮仕えしている下女です。名前はミクファ。あなたの方は!?』

「ディミクシ派には染まっちゃいねえ『正統王国』だ。ヘイヴィア＝ウィンチェル。サロンの噂話を耳にする程度の情報収集能力がありゃ、ディミクシ＝ニコラシカとの利害関係はねえ事ぐらい分かるはずだが!?」

『なるほど。敵対するバンダービルト家のご令嬢を相手取り、シェイクスピアの悲劇をひた走っている変わり者と聞いていますが』

「今に喜劇に変えてやるよ」

この辺りは『貴族』だの『王族』だの、『正統王国』の上部構造に詳しいヘイヴィアの方がやりやすいだろう。正直、『平民』のクウェンサーには理解のできないパワーバランスが絡ん

でいる。

『ステイビア様を連れて、ここレックスポップへ避難しましたが、どうやらこれもディミクシ派の罠だったようです。防御システムの動力源はフロート内に潜伏していたディミクシ派に押さえられています！　あれをどうにかして破壊しなければ!!』

「ディミクシ派の数は？」

『私とステイビア様以外の全員です』

そりゃ分かりやすい、とクウェンサーは呟く。

ヘイヴィアはフロートの上を走りながら、無線機に向かって尋ねる。

「アンタは今どこにいる？」

『ディミクシ派の手で捕らえられて発電施設の近くに軟禁されています。私は自分の力でステイビア様のお側にいたつもりでしたが、どうやらこれもディミクシ派の工作の一つだったようです』

「分かりやすく頼むぜ」

『私の命を盾にして、ステイビア様にオブジェクト搭乗を迫るつもりのようです。そして残念な事に、ステイビア様は博愛の精神が強すぎる。私は拷問に耐える覚悟を決めていますが、それを眺めさせられているステイビア様の方がもちそうにありません』

チッ、とヘイヴィアは舌打ちした。

そして根拠のない約束を口に出す。

「一〇分で行く。それまで死ぬな」

『協力には感謝しますが、ステイビア様の救出と非常電源の破壊を優先してください』

無線を切り、ヘイヴィアは予備の拳銃をクウェンサーに投げ渡す。

「クソ掃除の時間だぜクウェンサー！　王女サマの前菜にメイドさんを助けに行こう!!」

「メイドは良いものだ。国が総力を挙げて保護すべきっていうのを教えてやる！」

ディミクシ派は防御システムに頼り切っているようで、一度フロートに上ってしまったクウェンサー達への妨害はほとんどない。おそらく、遠からずディミクシ派のオブジェクトがこのフロートを襲うので、速やかに撤退できるように、人数を抑えているのだろう。

ガラスの全部砕けたターミナルに入り、下りの階段を駆け下りて地下構造に向かう。

「間に合うと思うか？」

「救出作戦は専門じゃねえが、今ある力で何とかするしかねえ！」

客に見せる所ではないためか、階段を下りると雰囲気が一変した。剝き出しの金属でできた壁に、狭い通路、天井近くを走る数多くのパイプ群。開放的な空港とは違い、タンカーの中にでもいるような気分になる。不思議と、外の様子が一切見えなくなった方が『揺れ』を感じさせた。

「しっかし、仕組みは分かっていても、こんなデカい塊が浮かんでいるってのはやっぱ違和感

があるよな」

「まあ、空気さえ閉じ込めておけばサイズは関係ないからね」

「それでも発泡スチロールみてえなので壁を作りたがるのが人情ってもんじゃねえの？」

「海が時化たら大波に揺られてボッキリ折れそうだよ」

元々そうなのか、非常電源使用時はモードが切り替わるのか、照明もまばらだった。所々にＬＥＤ電球があるだけで、光よりも闇の方が圧倒的に多い。先導するヘイヴィアはアサルトライフルのセンサーに頼りがちになる。

そして、いくつかの角を曲がった時だった。

ささやくようにヘイヴィアが言う。

「（……しっ。角の向こう、扉の前に誰かいやがる。多分見張りだ）」

「（……音を立てずにやれそう？）」

「（……試してみるさ）」

言いながら、ヘイヴィアは腰から大振りのナイフを抜いた。こっそりと接近して背後から喉を掻っ切る……つもりはないようで、角から身を乗り出したヘイヴィアはそのままナイフを勢い良く投げつける。

回転しながら通路を飛ぶナイフは、まるで斧のように見張りの側頭部を叩き割った。悲鳴すら上げず、そのまま真横に薙ぎ倒される。

「同じ手を二回も使っちゃってさ。もう専用の投げナイフ持ち歩いたら？」
「普通のヤツじゃ防弾ジャケットだのメットだのに弾かれるっての」
通路を進み、倒れた兵士の頭から自前のナイフを引っこ抜いて鞘に納めるヘイヴィア。クウエンサーは両開きの鋼鉄の扉に耳を寄せるが、中の物音は聞き取れない。
ついでに見張りの兵士の装備品を確認していたヘイヴィアが言う。
「携帯端末だ。部屋の中が映ってやがる」
小さなウィンドウには、部屋を斜め上から眺めている映像が表示されていた。ごちゃごちゃした物置のような部屋の真ん中に椅子が一脚。その脚や腕置きに四肢を縛られている女性が一人と、彼女を取り囲むように二人の男が立っている。
防犯カメラの映像のようだが、これは音声も記録するタイプのようだった。
『さて、休憩時間はおしまいだ。そろそろ業務の方に戻ろうか』
『……』
『何故こうしていちいち拘束を解き、傷口を消毒し、自由時間まで細かく与えていると思う？簡単に死なないようにするため、心が鈍くならないようにするための配慮だ。だから、苦しみは、長く、続く。覚悟をしろよ』
床に唾を吐きながらヘイヴィアが言う。
「……お楽しみの真っ最中って訳か」

「女の人は一人しかいないな。メイドさんの拷問をステイビア王女に見せるって話だったろ？彼女はどこだ。カメラの死角にいるのか？」

「いいや、こいつを仲間内でライブ配信しているのって、王女サマに見せるためじゃねえのか？　だとしたら肝心のステイビアは別の場所に連れて行かれたのかもしれねえ」

「施設の周囲はジャミングで遮断されている。っていう事は、ステイビア王女もまだフロートのどこかにはいるんだろうけど」

ともあれ、中の様子を突入前に閲覧できたのは僥倖だ。クウェンサー達は間取りや敵の配置などをチェックしていく。

「内壁は軍用のステンレスだ。『ハンドアックス』で風穴を空けるのは難しくない」

「問題はこれだぜ。パワードスーツ」

ヘイヴィアは画面を指差しながら、

「拷問を楽しむために二人はパワードスーツから降りているが、一人は着たままだ。パワードスーツは爆破時の衝撃波じゃ怯まねえ。中に踏み込む前に『モーニングスター』の擲弾の嵐をもらう羽目になるぜ」

「……だったらノックの仕方に気を配れば良いのさ。それよりあのパワードスーツ、俺達の火力で倒せるのか？」

「ミサイル使えば一発だが、メイドさんも巻き込みかねねえな」

「もうちょっと、こう、ふわっとしたのはない訳？　グレネードの砲弾とか何揃えてるの？」
「これでもマシな方だぜ。基本的に装甲兵器対策なんてシグナルマーカーぐらいしかねえよ。GPS、レーザー、紫外線なんかで照準情報をオブジェクトに送って、ピンポイントで砲撃してもらった方が簡単で確実だろ」
ヘイヴィアは死体の装備を漁って、使えそうなものを取り出す。
「スモークグレネードがある。アルミの粉末を混ぜてセンサー殺しも兼ねたモデルだ」
「アルミね。……使い捨てのカイロとかないか？　酸化鉄の粉末があればテルミットを作れる」
「ここはぶっ壊れて放置された空港フロートだぜ。錆の粉なんかそこらじゅうにあるだろ」
クウェンサーは非殺傷のスモークグレネードを一度分解し、材料を詰め直して三〇〇〇度以上の高温を出す対装甲兵器を作り出す。
手札の用意が終わると、両開きの扉から一度離れ、壁にプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を貼り付けた。
「中の様子は？」
「メイドさんに夢中でこっちには気づいちゃいねえな。美人の扱い方を完全に間違えてやがる」
「じゃあさっさと済ませよう」
クウェンサー達は設置した爆弾から距離を取った。起爆信号を送るための無線機に親指を掛ける。

「命乞いの時間だ、サディストども」

10

壁のプラスチック爆弾が起爆した直後、室内には大量の破片と粉塵、そして衝撃波が一斉に襲いかかった。

四肢を固定された下女は椅子ごと真後ろに倒れ、彼女達を取り囲んでいた二人のディミクシ派兵士は衝撃波の煽りを受けて床へ投げ出される。頭への揺さぶりが、一時的な意識の混濁を生み出していく。

そんな中、唯一パワードスーツをまとっていた兵士だけが冷静だった。

爆破され、壁に大きく開いた侵入口へと、擲弾機関砲の『モーニングスター』を立て続けに放っていく。半径一〇メートル前後に死の破片をばら撒く爆発物が室外の通路へ投げ出され、連続した爆発を巻き起こす。

しかしクウェンサーもヘイヴィアもそこにはいない。

彼らは壁を爆破するのと同じタイミングで、両開きのドアを蹴破っていた。爆破の轟音と衝撃波がその単純な事実を覆い隠す。すっかり壁の風穴へ注目させられたパワードスーツに向けて、クウェンサーは粘着テープでくっつきやすくした手製のテルミット手榴弾を投げる。

カッ!!　と、普通のオレンジ色の炎ではなく、溶接のように真っ白な閃光が炸裂した。金属の溶ける独特の異臭が立ち込め、パワードスーツの装甲表面を蠟のように崩していく。

『が……ぎゃ……!?』

スピーカーから絶叫が響いたが、スピーカーそのものの機能が壊れてそれも聞こえなくなった。ごろんと転がったパワードスーツは四肢をばたつかせようとしたらしいが、溶けた装甲が関節の駆動を阻害するのか、死にかけの芋虫のような挙動しかしない。同じ理由で脱出もできないようだった。

その間に、ヘイヴィアが床に投げ出された二人の兵士へ容赦なく発砲する。一人は頭を砕かれ、もう一人は腹の中心へまともにライフル弾が突き刺さる。

「パワードスーツは!?　確実にやったか!?」

「死んだ死んだ。装甲自体は切り崩せなくても、高温が内部回路と生肉を焼いてるよ」

パワードスーツはライフル弾ぐらいなら弾く強敵だが、別に無敵ではない。戦車や装甲車が未だに現役である事からもそれは分かるだろう。

「う……」

腹に弾丸をもらった『敵兵』が呻いていた。

ヘイヴィアが無言でアサルトライフルを構え直すと、彼は怯えたように言う。

「助けてくれ、同じ『正統王国』だろ……?　上官の命令だった。兵士なら逆らえない。こん

な事、好きでやっていた訳じゃなかったんだ」

対して、ヘイヴィアは椅子ごと倒れた下女の、拘束された一〇本指をチラリと見た。

その真っ赤な色彩を確認し、冷めた顔で彼は言う。

「嫌々やってる人間なら、そういう傷口にはならねえよ」

「待っ……」

言葉を終える前に、ヘイヴィアは短く連射した。胃袋と背骨をグズグズに崩すように数発。

もう手の施しようはないが、死ぬまでには数分かかる。そういう傷口だった。

吐き捨てるように、容赦なくヘイヴィアは言い放つ。

「召し上がれ、サディスト」

一方、クウェンサーは椅子ごと倒れた下女を引き起こす。手足を縛っていた針金を工具で切断すると、彼女は両手の傷の手当よりも先に大声でまくし立てる。

「ステイビア様は別働隊の手で連れ去られています！　急がなければ彼女はオブジェクトに搭乗してしまう！　そうなったらディミクシ派の狙う『御前試合』の構図が完成してしまいます!!」

「……王女サマは、アンタの身の安全のために言いなりにされているんだろ？　解放された今なら抵抗を再開するんじゃないのか？」

「いいや、まずいぜクウェンサー」

ヘイヴィアが『敵兵』の持っていた携帯端末を、クウェンサーへ軽く放り投げた。

先ほどまで映っていた室内のライブ映像が、ノイズで埋まっている。

「突入時の爆発でカメラがぶっ壊れたんだ。噂の王女サマはメイドが救出された事実を知らねえ。このままじゃ脅迫が続行されちまうぞ！」

ゴゴン!!　という鈍い震動が響いたのはその時だった。

単なる大波とは違う。巨大なフロート全体の重心が、明らかに変動している。

「……オブジェクトを吊り下げているワイヤーが外されているんだ……」

「ヤバい、となるともうステイビア王女はオブジェクトに乗っちまってんのか!?　『御前試合』が始まっちまうぞ!!」

11

使い物にならない第一世代のオブジェクト『アサルトシグナル』のコックピットの中に、ステイビアは収まっていた。

レバーだけでも一〇本を超え、ボタンともなれば数百に上る。レーザー光を使って眼球の動きを読み取るゴーグルに至っては、テストを行った途端に激しい眩暈に襲われた。ろくな訓練も受けていない人間が操縦できるものではない。

いいや。

仮に操縦できたとしても、できたらできたで凄まじいGが華奢な体の中身を押し潰すだろう。どのみち、最初からステイビアに反撃の機会など与えられていないのだ。これはドラム缶の中に詰め込まれて、射撃の的にされるのと同じである。

『「御前試合」の交戦規定の説明を行わせていただきます』

まるで合成音声のように的確な女性の声が、無線越しに聞こえてくる。

全帯域でジャミングがかけられているという話だったが、超短波の中にいくつかの『穴』が空けられているらしい。

『基本的な規定はイエローマニュアルに準拠。アマゾン方面のエリア21を交戦区域とします。王位を決定するため、ディミクシ王子とステイビア王女、双方を代表する機体同士をぶつけ合い、交戦不能になるまで戦っていただきます。参加は自己責任ですので、その過程で出る負傷・死亡などに際し勝者が責任を取る必要はありません』

この帯域を下女のミクファに知らせる、というのも一つの手だろう。あるいはオブジェクトの無線装置を使って直接外部へ救援を求めるか。

『両勢力は、各々の保有する歩兵や一般装甲兵器などの支援を受けても良いものとします。ペナルティは発生せず、決着までは試合を止める事はありません』

いいや、とステイビアは呟いた。

今さら伝えて何が変わる？　変える事ができる？

ステイビアは最後まで自分についてきた下女のミクファを盾に取られて『アサルトシグナル』に搭乗した……という事になっている。

しかし。

仮に下女を人質にされなかったからといって、それで結果は変わったのか。

どうせディミクシ派の兵士に無理矢理腕を引っ張られて、『アサルトシグナル』のコックピットへ放り込まれていただろう。何をどうやったところで、行き止まりに詰め込まれるのは変わらないのだ。

だとするなら。

『決着はオブジェクトの破壊によってのみ成立します。故に、「白旗」などのシグナルは一切効力を発揮しないものとします』

無意味な説明が続く中、ステイビアはこう思う。

どうせ自分の運命が何も変わらないのなら、せめて巻き込む人数を少なくするのが義理ではないか。無意味で無価値な闘争のために、自分を慕ってくれる人間を死なせてしまう事は、それこそ愚行ではないか。

かつて幼い彼女の頭を撫でてくれたユーレンザックはもういない。第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーは闇に葬られた。

最後まで慕ってくれた下女のミクファも喉元に刃を突き付けられている。
その全ての元凶が自分にある。
そう思って全てを遠ざけ、その結果、誰からも相手にされなくなった。周りはみんな敵だらけで、当の護衛にさえ裏切られて銃口を向けられるようになった。おそらくステイビアがオブジェクトの無線機能を使って救援を求めたとしても、もう答えてくれる者はいないだろう。
その繋がりを、自らの手で切ってしまったのだから。
だから言葉が出ない。
何を言って良いのか分からない。
すぐそこに無線用のマイクがあり、『外』へと繋がるチャンネルも解放されているというのに、ステイビアは口をパクパクさせるだけで、叫び声の一つも発する事ができない。
無様な結果ではあるだろう。
でも、少しでも被害を軽減した結果、最後に残ったのがこの結末だというのなら。
やはり、ステイビア＝ニコラシカにとって、この終わり方が最良だと判断するしかないのだろう。
使い物にならないオブジェクトに乗せられて、たった一回の反撃もできずに大火力で焼き尽くされるのが。
「あーあ」

コックピットの椅子の背もたれに体重を預け、真上へ目をやりながら、公的な場面では決して出さないような声をステイビアは漏らしていた。

ボロリと。

誰にも聞かせられないからこそ、奇麗に固めた飾りが剝がれ落ちるように。

「……死にたく、なかったなあ……」

殺しの舞台の幕が開く。

たった一四歳の少女に、戦争を象徴するオブジェクトの主砲を突き付けるという暴挙。

それを、あらゆるお膳立てによって完璧な正当化が施され。

誰にも文句を言えない形で。

12

フライトバーグ空軍基地へ、ユニコーンの四人組は輸送用の大型ヘリで降り立った。すでにアマゾン方面の各地に散らばっていた他のメンバー達も集められていたようで、ソギアを見つけたいくつかの影が軽く敬礼してくるのが分かる。

濃いグレーのベレー帽を被ったサングラスの男、マキアーレ大佐は簡潔に言う。

「ディミクシ王子の『御前試合』が終わるまでは、この基地に滞在していただく。『御前試合』自体は合法だが、そのセッティングにかなりダーティな手を使っているからな。結果が確定するまで、横槍を入れられそうな要素は封じ込めておくに限る」

「口封じのために消されないようで安心しました」

「そんな事を企めば、君達は世界の果てに雲隠れしてしまうだろう。元々、カオスな紛争地域に潜伏する事を旨としているのだし。いくつか渡り歩くだけでも足取りは簡単に消せる」

「『戦争国』という名の『暗殺特区』を維持しているのは、あなた達上層部ですよ。実際は完全になくす事はできなくても、もっとコンパクトにはできたはずだ。俺達はそのシステムを利用しているに過ぎません」

その声を聞いて、マキアーレはニヤリと笑う。

ホームグラウンドまで戻った余裕からか、彼の口は本音を隠す事をやめている。

「必要なものは維持されるものだよ。ただし誰もが似たような利権を求めるから、常に供給過多になるがね。街に溢れるコンビニと同じだ」

「こりゃ驚いた。大佐のような方でも利用するんですか、コンビニ」

「ふん。アンティークショップと仕立て屋に通うだけでは空腹は満たされんよ」

広い滑走路を横切るためだけに、彼らは4WDのオフロードカーに乗り込む。ここで働く一〇〇〇人以上の人間が全員ディミクシ王子の片棒を担ぎ、現在進行形で国家反逆罪を犯してい

るというのだから壮観である。

「軟禁はいつまで？　我々も総数で二〇〇人近くいます。衣食住でかなりかかりますが」

「我々は営利団体ではないのでな。資金について頭を悩ませるのは仕事ではない」

「血税は魔法の宝箱から出てくる訳ではありませんよ？」

「戦争が続く限りは搾り取れるさ。拒めば売国奴の烙印を押されるだけだ。……我々からではなく、善良で無知な隣人からな」

４ＷＤが管制施設の近くで停まった。ソギア、サーニャ、マルス、フラットの四人はマキアーレに案内される形で建物の中に入っていく。

ユニコーンは軍服をフライトバーグ空軍基地のモデルで統一してしまっているため、見た目には誰がどちらの勢力に属しているのか判断できなくなっていた。

と、ここでマルスが言った。

「……すみません。便所借りても良いっすか？」

「大佐、漏らすよりはマシだと思いますが、必要があれば我慢を命令させます」

「自由行動で構わんよ。場所が分からなければ部下に案内させよう」

マキアーレから行動の許可をもらってから、ソギアはパチンと指を鳴らした。

「サーニャ、口座の入金状況を確認。フラットはユニコーンメンバーの隊員点呼。全員集まっているかどうか確認しろ。終わったら厨房でも借りて、なんか料理を作ってくれ。市場のジ

ヤンクフードは少々舌が痺れる。ていうか何の肉を食っているのか分からん。俺はリトルグレイでも食わされているのか」

それを聞いたマキアーレが適当な調子で言う。

「我が隊は金曜日にカレーを作る以外はレーションで済ませているよ」

「簡易クッカーでも意外と人間らしいものは作れます。まあ作るのは俺じゃありませんが」

他のメンバーと別れたソギアは、マキアーレの先導でさらに施設内部を進む。

士官用の私室まで入ると、マキアーレは上質な軍服の上着を脱ぎ捨てて、ソファに向かって放り投げた。備え付けてある小さな冷蔵庫の中から、良く冷えたシャンパンの瓶とグラスを二つ取り出す。

ソギアは小さく笑った。

「祝杯にはまだ早いのでは？」

「深い意味はないよ。喉が渇いたらこれを呑むと決めているだけだ。どうせ軍の予算で買えるものだしな」

黄金の液体の入ったグラスを受け取ると、ソギアはそれを一息で呷った。それを見たマキアーレは、薄く笑いながらグラスをゆっくりと傾ける。

「君は相変わらず嗜み方を覚えん男だな」

「まだ血圧を気にするような歳じゃありませんので」

空になったグラスをテーブルの上に置くソギアに、マキアーレは思い出すように語る。

「……君達と手を結んでもう三年になるか。南米の砂漠でステイビア王女の護衛部隊を襲って以来だ。燃料気化爆弾の小型化については聞いていたが、クラスター化してホワイトベアーの頭上へ大量にばら撒いた時は流石に度胆を抜かされたよ」

「ま、こちらにとっても危険な賭けではありましたがね。あなた達と『人脈』を築くためには、ド派手な手土産が必要かなと思いまして。相手は精鋭のホワイトベアーという事で、容赦をしている余裕もなかったんです。死体が判別不能になってしまった時は、今度は逆に信用してもらえないかと焦りましたが」

「ユーレンザック率いる一一五には我々も手を焼かされていた。やはり、本気で消すとなればそれぐらいは必要か」

軍事演習中だったステイビア王女専属の近衛部隊を排除したのがソギア達ユニコーンだが、それは別にマキアーレ達の指示で行われた事ではない。

より正確には、マキアーレ達も計画していたのだが、それより先にユニコーン達が実行してしまったのだ。

「第二〇二機動支援中隊、か」

マキアーレは呟く。

「外国人部隊の枠を利用した、詳細不明の秘密部隊ユニコーン。全員が整形手術を施し、指

紋や掌紋も火傷の治療を逆手に取った方法で強引に歪めている。他人の骨髄を移植する事で血液型すら変化させているという話も聞く」

「……外国人枠という制度自体、血統やDNA情報にうるさい『正統王国』の血統局をごまかすためのものですしね。あの枠の中に入っていれば、血統の登録は必要なくなる。ハナから『外』の血の人間だと宣言している訳ですし、いわゆる規格外なんですよね」

ソギアは自分の首元をさすり、ぐるりと囲む縫い痕をなぞりながら言う。

良く見れば、その縫い痕を境に肌の質感は若干変わっていた。

「そこまで自分自身をごまかしているのは、やはり『人脈』構築のためか？」

マキアーレは興味深そうに尋ねる。

「『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……。勢力図を無視した『人脈』の構築と言えば聞こえは良いが、そこにはどうやっても宗教、民族、思想などの壁が邪魔になる。『どこの出身なのか』という情報をぼやかす事ができれば、その辺りを都合の良いように調整できるようになる訳だ」

「それが？」

「君達が水面下でどこまで『人脈』を広げているかは正直把握できていないが、それは確実にディミクシ王子の力になる」

時間を掛けてグラスの中のシャンパンを呑み干し、マキアーレは語る。

「ただし、それはプラスにのみ働かなくてはならないのだよ。ディミクシ王子が無駄に増長しては困る。『我々』は、あくまでも操りやすい、使い勝手の良い権力者を求めているのだからな」

「……コントローラー構築のため、我々の『人脈』のデータが欲しい、と？」

「権力者周辺の勢力図の網羅こそが、パワーゲームを利用したコントローラー構築の土台となる。ディミクシ王子を自身のシステムに組み込みたいのなら、そちらも協力しろ。バグの残ったプログラムをネットワークに登録しても、共に倒れるのがオチだぞ」

「なるほど、一理ある」

ソギアは軽く笑ってそう言った。

言った上で、さらに付け足した。

「しかし大佐。あなたは誤解している」

「なに？」

「そもそも、我々が自らの顔に整形手術を施し、指紋や掌紋などの生体情報を書き換え、他人の骨髄によって血液型を変更し、血統局の登録までごまかした理由は、『人脈』構築のためではないんです」

訝しむマキアーレを無視して、ソギアはさらに続ける。

「というか、三年前の第一一五独立近衛中隊ホワイトベアー……いわゆるステイビアの懐刀が壊滅した顛末にしても、あなたは間違った解釈をしている。もっとも、そういう風に間違え

るように俺達が仕組んだのだから、こちらに責める資格はありませんが」

「さっきから一体何を言っている……？」

「分かりませんか」

ソギアは手を伸ばし、テーブルに置いたシャンパングラスを軽く指で押す。

繊細なグラスは簡単に倒れ、硬い音と共に砕け散る。

不穏な音を響かせながら、ソギアは告げる。

「新参の第二〇二機動支援中隊、我々ユニコーンが日の目を見たのは、第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーが壊滅した時だった。コンタクトを取ってきた我々に対し、あなた達は急いで秘密部隊ユニコーンの情報を集めたはずだ。そして納得した。機密レベルが高いのか軍のデータベースから情報は抽出できなかったが、民間のミリタリー報道サイトのあちこちにユニコーンの『悪行』の爪痕が記事として残っていた事で。……実際に、その記事が『いつ』差し込まれたのかは誰にも分からなかったのにね」

「ま、さか」

「そして第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーは葬式にも出せないほど徹底的に遺体を損壊させられた。という事になっていて、そもそも誰も死体なんて確認していなかった。ワクチンが不足していた、当時の南米の『空白地帯』では時代遅れの伝染病でバタバタ人が倒れていて、早急に燃やさないと困る死体には事欠かなかった、という情報も加味すれば、もう答えは出る

でしょう？」

　ソギア、いや、そう名乗る誰かは薄く笑う。

「……丸っきり消えた部隊と、時同じくして浮上した整形手術の部隊。ここまで言って分からなければ、あなたは本当の馬鹿だ」

「ステイビア王女の懐刀は壊滅したのではない……まさか、ユーレンザック率いる近衛部隊はユニコーンに名前を変えて存続していたのか!?」

　とっさにテーブルの上の電話機を取ろうとしたマキアーレだったが、ソファから立ち上がったソギアは電話機ごとマキアーレの手を踏み潰した。

「まあ、ディミクシ王子が『御前試合』の仕組みを使ってステイビア王女の命を狙うために準備を進めている事は、五年前から分かっていた訳ですしね。分かっていながら『流れ』を変えられない事も承知していた。だから、ちょいとした荒療治が必要だった訳です。そのために俺達は第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーという立場を捨て、異なるポジションからこの問題に取り組めるように『新しい立場』を作る必要があった」

「がっ!?」

「ユニコーンの伝承の一つを教えてあげましょう、大佐」

　短い悲鳴を発するマキアーレの前で、ソギアは滑らかな動作でＰＤＷを取り出した。ビジネスバッグに収まるほど小さな機関銃を片手で持ち、その銃口を初老の男の顔に突き付ける。

「……それはあらゆる権力にも財宝にも興味を示さず、ただ清浄なる乙女を守護する獣なり、って事だよ。この外道」

13

パパパン!!　という短い銃声の連続は、空軍基地全体へ響き渡った。

基地には一〇〇〇人以上のプロの兵隊が詰めており、いかにユニコーンであっても真正面から撃ち合えばまず間違いなく勝ち目のない戦力差がそびえ立っている。

ただし。

突然、爆発や銃声が炸裂した際、訓練された兵士はほぼ反射的に手近な物陰に隠れようとする『習性』が体に染みついている。『プライマリースクリーン』とも呼ばれるスポットだが、兵士達の巡回ルートさえ分かっていれば、簡単に空軍基地内のスポットを把握する事ができる。

では、もしもの話。

この『プライマリースクリーン』と呼ばれるスポット全てに、爆弾やトラップなどを配置しておくとどういう事になるか？

答えは単純。

最初の銃声に後押しされ、ほとんど全ての兵士達が、わざわざ爆弾の仕掛けてあるタコツボ

に身を隠してしまう。

空軍基地を徘徊していたサーニャ、マルス、フラット達は、示し合わせたように無線機のボタンを押した。

第二波が炸裂する。

無数の爆発音と共に、正攻法では決して倒せないはずの大戦力が、面白いように削り取られていく。

『どうだったの？』

かつてサーニャはそう質問した事がある。

五年も前から、すでにステイビア王女を暗殺する動きが生まれていた。政治的なパワーゲームで第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーは対抗しようとしたが、ディミクシ派の攻勢は予想以上に力強く、何より迅速だった。

ソギアはこう答えたものだ。

『……やりやがった。「アサルトシグナル」の操縦士エリートがカフェで吹っ飛ばされたぞ。おそらくは「御前試合」の駒を揃えるための工作だ。ここまでやった以上、連中はもう減速しねえ。今さら止まったところで牢獄送りは避けられねえんだからな。こんな陰謀、物的証拠が

集まりゃ「甘い毒の杯」どころの騒ぎじゃねえぞ。広場で首を落とされる』

『猶予は？』

『長くて五年、最悪で二年』

ふう、とサーニャはため息をつく。

職務、キャリア、プライベート、それら全てを思い浮かべ、その上で切り捨てる。

『……で、私達はどう動けば？』

『そりゃお前、その五年後を見据えるしかねえだろ』

「始まっちゃったねえ」

サーニャが呟いた。

応じるようにマルスが言う。

「始まっちまったっすね。つーか俺、第一五独立近衛中隊に来て最初の任務が『古い自分を殺す事』っすよ!?　やってらんねー！　そこからずっと汚れ仕事ばっかりだよ!!」

軽口を叩きながらも、彼らの銃撃には容赦がない。『プライマリースクリーン』を利用した第二波攻撃から何とか生き残った兵士達へ次々と弾丸を叩き込み、息の根を確実に止めていく。

ユニコーンが利用しているのはアサルトライフルではなく、わずか二〇センチ未満の超小型

ＰＤＷの銃身下部に、無理矢理グレネード砲を装着したものだった。

元々は片手でも扱えるフルオートの銃を装備する事で、ステイビア王女を避難誘導しながら高火力を叩き出すための火器だった。

しかし今は純粋な返り血にまみれている。

センサー類の恩恵のためか、『新入り』と評されるマルスの射撃精度も良好だった。彼が使っているのは『マルチダット』と呼ばれる照準補正器だった。レンズの中央には基本となる赤い光点が映っているが、それとは別に、青や緑の光点が追加されている。

例えば、拳銃弾を使うＰＤＷの射程は一五〇メートル前後だが、マルスは二五〇メートル以上先にいる相手にも平気で弾を当てている。

この時、赤い光点とは別の青い光点は、中心よりも下に表示されていた。この光点に敵を合わせると、銃口は自然と上を向く。この状態で引き金を引けば、弾は野球の遠投のような曲射弾道を描き、真っ直ぐ飛ばすよりも遠くまで届くようになる訳だ。

他にも、細かく移動する敵兵の予想地点を表示するモードなどもあり、基礎体力さえ満たされていれば射撃の腕は補正できる。

ＦＰＳなどで良くある、銃口を適当に向けると自然に標的の急所へ狙いが修正されるあの感じ。それをイメージしてもらえば分かりやすいかもしれない。

二年前の南米の砂漠で、入隊直後だったマルスは嘆いた事がある。

『あーあー！　何だ何だ、何なんすかこの面倒臭い事情をしこたま抱えた部隊は!?　「平民」でも大手を振って王室に出入りできるっていうから志願したのに、一番最初の任務がこれっすか!?　全滅を装って足跡全部消せだってさ!!』

『……流石にここまで強要するつもりはねえさ』

ソギアは砂まみれの頭をかきながら答える。

『正直、割に合う仕事じゃねえ。勝算は薄い。その準備のためにこれまでのキャリアも全部捨てなきゃならねえ。たとえ何かの奇跡が起きてディミクシ派に勝ったとしても、待っているのは軍法裁判に営倉送りのフルコース。何より、スポンサーがいねえんだから報酬なんてほとんど何もねえ。誘う理由を探す方が難しいぐらいだな』

ただ、とソギアはそこで区切った。

一拍置いてから、彼は静かに言う。

『……それでも、下衆野郎の権力欲からあの子の命を守りたいと思う馬鹿野郎だけ俺について来い』

『ちえー。……乗った上で言いますけど、アンタも相当な卑怯者っすね』

『今のを卑怯と呼んで渋々引き受けてしまう時点で、お前も相当なお人好しさ』

チッ、とマルスは舌打ちし、目を逸らして頭をかく。
苦し紛れに彼は尋ねる。
『で、俺達が得るものは？　報酬は「ほとんど」何もないって言いましたよね』
『ゼロじゃあねえだろ』
ソギアは小さく笑って即答する。
『騎士の誇りと、正義の証明を。……得られるものはそれだけだ』
『へっ、この欲張りめ。そんなにもらえりゃ上々っすよ』

しかし、
「早っ!!　センパイもフラットも超早いっす!!」
「目で見て照準覗き込んでいる程度じゃ遅すぎるのよ、新入り！」
サーニャやフラットは、そもそもセンサーの恩恵など受けていない。照準を覗き込んで狙いを定めるのではなく、ほとんど手癖で銃口を動かして撃ち続けている。ギターやピアノを弾く時、いちいち手元に目をやって一つ一つのコードを確認しながら演奏はしないだろう。それと同じ。肉体と一つになった火器は、目で追う必要もなく正確な射撃を連続で成功させる。だから早い。衝撃さえ適切に逃がせれば、教科書通りの構えを取る必要さえない。セオリーの延

長線上で精度を上げても、根本的なところで追い着けない。

『クリーンな戦争』の産物にすがる者と、世界各地の『戦争国』をオブジェクトなしでダーティに渡り歩き、そこから存分に戦闘の経験を吸収していった者の違い。

「化け物どもめ！　まるで追い着ける気がしないっす！」

「それができないからルーキーなのよ！　ほらそこ。壁から離れろ!!」

不用意に突撃しようとするマルスの首の後ろをサーニャが摑んで引き戻す。直後に横合いの壁が破壊され、パワードスーツが勢い良く現れた。そのまま進んでいれば交通事故並の衝撃で吹き飛ばされていたところだ。

サーニャは片手でマルスの襟首を摑んだまま、もう片方の手でＰＤＷのグリップをグレネード用のフォアに持ち直し、正確な砲撃をパワードスーツへ撃ち込む。元々は歩兵が扱う携行フレアとして開発され見事に失敗した代物だが、それでも『戦闘機のジェット噴射とセンサーが間違うほどの高温』を発する一品だ。硝酸ナトリウムを軸とした複数の化学薬品は二〇〇〇度以上の熱源を六〇秒前後も持続させる。パワードスーツの装甲を溶かせなくても、内部回路を熱暴走させるには十分な威力だった。精密機器はただの缶詰に切り替わる。

さらにフラットが対人用の破片手榴弾を投げつけ、動けなくなったパワードスーツを爆破の衝撃でゴロリと転がす。搭乗用のハッチが下になったので、クレーンか何かでひっくり返してもらわなければ兵士は外へ出られない。

「……何で襲撃が読めるんすか？　前ふりゼロでしょ」
「五感の情報だけで察知しようとするから不意打ちを受ける。自分が敵ならどう動くのかを頭の中で考えるの。分かったか新入り」
ボン!!　という爆発音と共に、横合いの通路から黒煙が噴き出してきた。
慌てて飛び出してくる敵兵達を、やはり通路から飛んできた弾丸が的確に撃ち抜いていく。
最後に出てきたのはソギアだった。
「ほらー、やるならちゃっちゃとやっちゃえー！　奇襲で連中が動転している内にダメージ与えないと後で死ぬほど面倒臭い目に遭っちまうぞー！」

第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーは第二〇二機動支援中隊ユニコーンとなり、世界各地の水面下で数々の悪行をこなしていった。
その手は不要な血にまみれ、代価としてユニコーンは様々なコネクションを構築していく。
そういった一仕事が終わった後に、フラットはソギアへこんな風に切り出した事がある。
『僕達、地獄に落ちますね』
『これでも最短コースを進んでいるつもりなんだがね。何しろこっちは時間がねえ』
『ステイビア派はそれまでもつでしょうか』

『メイドのミクファはできる女だ。あいつが本気を出せばギリギリまで延ばせるだろ。そしてギリギリまで粘ったって二年が限界だ。それまでに、徹底的にネットワークを拡大していくぞ』

『……こうしている今も、多分ステイビア様は一人で泣いているんでしょうね』

ただの記号や書類の名前だけではなく、彼らはステイビア＝ニコラシカという人間を知っている。

乗り物酔いするから船や飛行機に乗りたがらない事も、どんなに機嫌が悪くてもビーフストロガノフが出てくれば大抵は元通りになる事も。

そうした些細な人間味を知りながらも、なお耐える。

そもそもにおいて、ステイビア王女が一滴の涙を流した時点で、近衛の護衛部隊としては屈辱の結果だ。

今すぐにでも黒幕のクソ野郎を殴り飛ばしたい。涙を流させる元凶を叩き潰したい。

その想いを封じ込め、ひたすらに兵士達は牙を研ぐ。

『なら、やる事は一つだ』

ソギアはポツリと呟くよう言った。

『仲直りは命懸けでやろうぜ』

ソギア、サーニャ、マルス、フラット。
戦場で揃った四人はあちこちに銃弾をばら撒きながら、目的地を目指す。
「おーい。そういやお前達、装甲車両の方はちゃんと潰してる？　あと航空機も。連中の火力はパワードスーツなんて目じゃねえぞ」
「チームブラヴォーとデルタが潰して回ってたよ。タンクの中に砂糖をドバドバ注いで工作済み。航空機の方はあれだね。滑走路で待機していたガンシップの弾薬スペースに火が回ったせいでそこらじゅうが地獄になってるよ。死を招く巨大ねずみ花火って感じ？　引火につぐ引火で規模は拡大中」
「クリア、クリアっす！」
「……マルスさん、普通に撃ち漏らしがあります。ちゃんと撃ってください。クリア」
狙いは中央司令室。
そこには、ディミクシ派が用意した最先端のオブジェクトへの、最初で最後の切り札が眠っている。
「マルスが何だって!?　また新入りが何かやらかしたの!?」
「こういう時だけいちいち首突っ込まないでくださいっすよ！　クリアクリアー!!」
と、ここでソギアが呑気に言った。
「おー、そうだそうだ。そういやディミクシ派が丸ごと国家反逆罪やらかしてるって証拠集め

はどうなってたっけ？」

「今まさに僕達がその証拠を火の海に変えようとしています」

「駄目じゃん！　それ押さえておかないと俺達ただの虐殺犯っすよ!?」

「軍法裁判は諦めなさい。どのみち軍所有の部隊が勝手に雲隠れした時点で有罪確定よ、新入り」

混乱が新たな混乱を生み出す阿鼻叫喚の銃撃戦を繰り広げながら、ソギアは敵の通信兵が所持していた大型通信機に手を伸ばす。

マイクの部分を軽く指で叩きつつ、

「あっあー。何だこりゃ？　ちゃんと繋がってんのか？？？」

「地球の裏側にだって届くでしょうよ。旧式のオブジェクトに詰め込まれているあの子にだって」

「あーそう」

適当な手つきで周波数のメモリーを呼び出すと、短い連射の応酬で的確に敵兵の数を減らしながら、ソギアは何気ない調子で改めてマイクを口に寄せる。

そして言う。

その声は、海の中から浮上した『アサルトシグナル』のコックピットにも届いていた。
ステイビア＝ニコラシカの両目が見開かれる。
彼女は確かに聞いたのだ。
かつて無邪気にすがっていた声。
大きな手の持ち主の言葉を。

『おいおい、一体いつまでメソメソ泣いてやがる。もうそろそろ笑う番だぜ』（Hey baby, How long will you stop crying. You will be smile soon）

五年越しの奇跡は完成した。
徹底した流血と根回しの元に、この腐りきった戦争だらけの世界で、なお。
騎士の誇りと正義の証明を成し遂げる、小さな奇跡が。

14

一方その頃クウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人は床にぶっ倒れていた。
オープンな無線で飛ばされた『ユニコーン』とステイビアのやり取り、そして下女のミクフアの補足情報（とはいえ、彼女も今、初めて状況に気づいたようだが）で、大体の事情を知っ

てしまった訳である。

そして説明役のミクファが慌てたように声を発する。

「なっ、何故唐突に打ちひしがれているのですか!?　燃え尽き症候群にはまだ早いですよ!!」

「どぅわーってさあ……!!」

「完敗だよ、完敗!!　ヴぁー駄目だ駄目だ!!　あいつら馬乗りになってボコボコにしてやりたいのに、ここまで奇麗に収められたら今さらイチャモンつけらんねえ！　はい美談です、どうもありがとうございました！　割り込めば割り込んだだけ俺らの格が下がっちまう!!」

「こんなのどうしろっていうんだ？　掘り下げれば掘り下げるだけ俺達がダメージを喰らうんだぞ……。どうせあいつら軍法裁判は覚悟の上とか何とか格好良い事フツーに呟いたりするに決まっているんだぞ!!　いやあ！　噛ませ犬はいやよお!!」

どうやらユニコーンの決め台詞がよほど突き刺さったらしい。

しかしミクファとしては粗チン並にどうでも良い馬鹿のプライドなどどうでも良い。

形勢に変更があったとはいえ、今もまだステイビア王女は『アサルトシグナル』の中に乗せられて、的にされているのである。

「お、おそらくユニコーンは中央司令室にあるオブジェクトの緊急停止コードを取得しようとしているんだと思います。基本的に操縦士エリートがワンマンで動くオブジェクトが独断で暴走するのを止めるための命綱です」

「それを俺達にどうしろと!?　脇役ザコキャラクウェンサー君に今から一体どうしろって!?」
「緊急停止コードは必ず手に入るとは思えませんし、強制停止前にディミクシの乗るオブジェクトが主砲で攻撃してくればそれまでです！　ステイビア様を助けるためには、何としても時間を稼がなくては!!」
「……」
「……」
クウェンサーとヘイヴィアの二人はわずかに黙った。
内心ではそれなりに焦っているミクファの前で、馬鹿達がむくりと起き上がる。
「……俺達がステイビア王女を助ける？」
「ええそれはもう！」
「……俺らがいねえと駄目なの？」
「ここにいるのは私達だけですからね!!」
二人は顔を見合わせた。
そしてダークに笑う。
「……へっへっへ。おいヘイヴィア、本当の最後の最後を俺達で全部持っていかないか？　美談の上に美談を重ねて台無しにしてやろう」
「なあ、どうせなら五年越しのナイト様の目の前で王女サマをお姫様抱っこしてやろうぜ」

「お高く留まったユニコーンの金玉を蹴り上げるっていう大事な仕事がまだ残っているしな」
「死体の金玉を蹴ってもつまんねえ。どうせならあの英傑サマを涙目にするとしようか」
……こいつらは早めに背中を撃っておいた方がステイビア様の貞操的に安全なんじゃないだろうか、とミクファは本気で考えたのだが、背に腹は代えられない。
そしてクウェンサー達も、いくらなんでも馬鹿正直に最新式のオブジェクトの前に立とうなんて考えない。そんな要求は呑めないし、呑んだとしても構わず踏み潰されるのがオチだ。そもそも向こうは立ち止まる必要がない。
「おい、まずはこのクソ面倒臭せえジャミングから何とかしようぜ。予定通りだ。空港の非常電源を切っちまおう」
「それでどうするのですか？」
「当然、同じ『正統王国』の軍に救援要請を飛ばすのさ。生身の体で何ができる？　オブジェクトに対抗できるのはオブジェクトだけ。だったら馬鹿正直に助けを求めた方が手っ取り早い」
「助けを求めてオブジェクトが動いてくれれば、最初からステイビア様も苦労はしていませんっ!!」
「今ならできるんだよ」
クウェンサーは即座に訂正を促した。

「何しろユニコーンが大暴れしているせいで、『御前試合』の平等性は失われている。俺達は、どちらかの味方じゃない。ディミクシ王子とステイビア王女、ニコラシカ王家直系の二人を守るために救援を求めるんだ。それなら『どちらの勢力が』とか『どちらの味方か』なんて気にする必要はない。『ユニコーンの妨害から両方とも守る』形になれば救援は届く」

「王位継承の争いで殺し合いたがっているのはディミクシ派だけだぜ。仮にディミクシが王位を継いだとしても、不意の病気や事故、暗殺なんかのために『血統のスペア』を欲しがるのは不思議な動きじゃねえ。となれば、事態のなりゆきが不明の場合、両方とも『とりあえず』助けておく、って考えるのがまっとうな軍人の考え方だ」

「……」

唖然とした様子で、ミクファは二人を眺めていた。

どちらか一方を救うためには、もう片方を殺さなくてはならない。

その条件こそ、ディミクシ派が長年かけてセッティングしてきた情報工作だ。知らず知らずの内に、抵抗していたはずのミクファまでそんな考えに呑み込まれてしまったようだった。

泥を被ったユニコーン……いや、第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーは、こんな逃げ道も想定していたのだろうか。

いくつもの妨害を用意し、時間を稼いで、その間に緊急停止コードを入手する。

「へい、クウェンサー！　その非常電源はどこにある？　さっさと爆弾で吹き飛ばしちまえ

よ！」

「学校のプールよりもデカいディーゼルだぞ!?　燃料に引火したらフロートが真っ二つになっちゃうよ!!」

フロートの地下（あるいは内部？）の中を歩き、馬鹿二人は非常電源の心臓部へと向かう。扉の向こうはサウナのようだった。無数の金属の箱やパイプが所狭しと詰め込まれていて、その一つ一つにパネルやハンドルが取り付けられている。

「……嫌な配置だぜ。まさかと思うけど、伏兵なんかいねえよな」

「トラップとかも超怖いよ。蒸気で視界は悪いし小さな音も消えちゃいそう」

「考えてみりゃ、ボンネット開けて馬鹿デカいエンジンルームに放り込まれてるようなもんだろ、これ。人間が生活する環境じゃねえぜ」

用心しながらも、ゆっくりと中を進む。

壁に掛けてあった分厚いマニュアルを紐解き、いくつかのハンドルやレバーを操作していくクウェンサーとヘイヴィア。悪戦苦闘していると、ようやく数値が目に見えて下がってきた。

「おー、そうだ。上に軍港のヤツらいたじゃん。ラテン系の優等生どもを撃ちまくっていた防御システムもこれで止まんのかね」

「いかん、浦島太郎的にすっかり忘れてた。あれからどれぐらい経っていたっけ？」

大して緊迫感がないのは、やはり守るに値する価値があるかどうか微妙だからだろう。せめ

て美女の一人とでもお知り合いになっていれば事情は少し変わったかもしれないが。

非常電源を黙らせると、クウェンサーとヘイヴィアはフロートの上部へ向かおうとする。下女のミクファを前線に立たせるのは危険なので、ディミクシ派が残していたパワードスーツに詰め込む事にした。クウェンサー自身が同型機を破壊しているため『絶対の安心』なんてものが存在しないのは百も承知だが、それでも流れ弾でうっかり、なんて確率は格段に下がる。

「上には上がるが、フロートの縁には立つなよ。仮に海へ落ちたら慌てずに緊急イジェクトを実行しろ。右と左、両手首のデカいレバーを二つ同時に引けばすぐに脱出できる。水深一〇メートル以内で脱出できれば、水圧の問題はクリアできる。それ以上落ちると潜水病の面から考えて危険だ」

『これがあれば私も戦えます！』

「何と？　まさかと思うけど、オブジェクトとじゃないよね？」

「ドラゴンブレスってのはすげえ悪臭だからな。掠っただけで装甲ごと溶けちまうよ」

階段を上がり、フロートの上部……船で言う甲板のようなところへ出る。

すでにステイビア王女を乗せた『アサルトシグナル』はフロート下面をくぐり、巨大な浮き袋の力を借りて海上へと浮上していた。操縦士エリートとして訓練を受けていないステイビア王女には、簡単な操縦さえできるとは思えない。『御前試合』のルールに従ったプログラムで、スタート位置まで移動させられたのかもしれない。

縦横に数キロもあるフロート状の平面に、全長五〇メートルを超えるオブジェクト。距離感がメチャクチャになる光景だった。周囲に展開しているティルトローター機や、今までそれを撃ち落としていた地対空ミサイルのユニットなどがオモチャのように見える。

「大型の輸送機が三機。乗員は一〇〇人前後ってとこか？　まあ生き残った方じゃね？　やーっぱチャフやフレアで簡単に騙される旧式はあてにならねえな。オブジェクトの対空レーザーが配備されていたら一発だったぞ」

「向こうは何で自分達が生き残ったのかを深く考えてくれないから困っちゃうよね。むしろ逆に恨まれているんじゃないの？」

『さっきから言っている事がひどすぎます……。そ、それよりステイビア様は!?』

「「それよりって言っちゃうアンタも大概だよ」」

馬鹿二人がきっちりツッコミを入れたが、基本的に乙女という生き物には都合の悪い声をシャットアウトする機能がついているらしい。

ステイビアの乗る『アサルトシグナル』に目立った損傷は見られない。『王族』御用達、自殺用の酒杯でも隠し持っていない限り、コックピットの中のステイビアは無事だろう。

しかし安心もしていられない。

遠くの海で、何か巨大なものが動く。

「来たぞクウェンサー。来やがった!!　オブジェクトだ!!」

「どっちの!?　ディミクシか？　それともアマゾン方面の救援!?」

コイントスで生死が決まるような究極の二択だが、運命とは基本的に馬鹿二人を嘲笑うようにできている。

デジタルな望遠機能を持つパワードスーツの恩恵か、それとも長年ニコラシカ王家に仕えてきた経験か。答えたのは下女のミクファだった。

『機体にニコラシカ王家の紋章があります。そして個人名を示すリボンの装飾も。色は青と金。ディミクシのものです!!』

「やべえな。超やべえ!!　救援間に合わねえんじゃねえの!?」

「付近のオブジェクトへ救援要請が発せられた事自体は、おそらくディミクシも傍受している。超遠距離からの狙撃、海底からの奇襲、そういったものを警戒しているはずだ。じゃなきゃあんなにノロノロした動きで近づいては来ない。何しろ五年越しのメインディッシュだろ。ディミクシは今すぐにでも飛びついてご馳走にむしゃぶりつきたいはずだぞ」

クウェンサーは双眼鏡を使ってオブジェクトの細部を少しでも観察しようとする。

足回りは球体状本体の真下に、前後へ長いフロートが二本延びている。さらに補助として、左右へ三本ずつ脚のようなパーツが延びていた。

「……メインはエアクッション式。パーツ換装なしで水陸両用できるタイプか。でも昆虫みたいな脚は違うな。レーザー式と併用しているのか……？　いや違う、これは」

「何だ、どうしたんだよクウェンサー？」
「両サイドの脚は強制的なブレーキだ。パイルバンカーみたいなものか。抵抗を細かく変動させる事で急旋回を実現させるタイプだな。ありゃあ接近戦になったら稲妻みたいに飛び回るぞ」
『そもそも機体を全く動かせないステイビア様には意味のない懸念では？』
「救援に来てくれるオブジェクトにヒントを渡したいんだよ。指を咥えて見ているだけじゃ後味が悪い」
主砲はおそらく球体状本体の前面から突き出された六門の砲だろう。ガトリング砲のように束ねられているが、砲身を回転させるための機構は見当たらない。
「……レーザービームだな」
「おいおい、馬鹿デカい砲を六つもまとめているとかヤバ過ぎねえか？　まともに喰らったらどんだけの破壊力が出るんだ」
「違うね。ヘイヴィア、旧時代の戦艦なんかが主砲を一つとか三つとか並べていた理由が何だか分からないのか？」
「あん？　だから威力を倍増させるためのものじゃねえのか？」
「そうじゃない。当時の砲撃は狙撃みたいな精度はなかった。つまり命中率の向上。何発も同時に撃って一発でも当たれば大成功って事。となると……」

「六門も束ねているあの野郎は、逆に言えばそれだけやらねえと当てる事もできねえって訳か？」

「……意外と使っているテクノロジーはそれほど高くないのかもしれない。こっちにも『使えるオブジェクト』があれば、簡単に決着をつけられるかもしれないぞ」

そもそも、ディミクシ派はこの日のために何年も下準備を積み重ねてきた。万に一つもステイビアから反撃されないように仕組んできたのだ。オブジェクトの性能など関係ない。反撃が一切来ない事を理解しているのだから、『主砲を撃てるオブジェクトさえあれば』何でも良かったのかもしれない。

オブジェクトの平均建造費用は五〇億ドルもする。

整備や運用も加わればさらにうなぎ登りだ。

いかにディミクシがニコラシカ王家の一員と言えど、あれを二機も用意するのは大変だっただろう。

『……本当にそうでしょうか？』

と、呟いたのは下女のミクファだった。

クウェンサーは双眼鏡を覗き込んだまま、

「何が？」

『ディミクシはニコラシカ王家の一員であると同時に、オブジェクトの操縦士エリートとして

正式に登録されています。ほとんど権威増強のためで、実際に前線へ飛ばされる事はないようですが。……しかし、仮にも「王族」の乗る機体。そのテクノロジーに粗雑なものが使われるのでしょうか？』

「……ディミクシの『系統樹』を知っているのか？」

『レーザービーム主体の「第二世代」であるのは同じです。ですが、あんな機体ではなかった。それにディミクシには不穏な噂が付きまとっていました。彼が流した権威増強のプロパガンダかもしれませんが……』

「？」

訝しむクウェンサーに、ミクファはこう言った。

『……ディミクシ＝ニコラシカのために開発されている最先端機「ブロードスカイサーベル」は「第二世代」の枠を超え、ついに時代は「第三世代」を迎えた、と』

しばし。

嫌な間があった。

へっ、と鼻で笑ったのはヘイヴィアだ。

どこか、胸の内から染み出てくる恐怖を必死に押し戻そうとしているようだった。

「権力者にお決まりの『特別願望』ってヤツじゃねえの？　オセアニア軍事国の時もそうだったぜ。大々的にオブジェクト開発を喧伝していやがったが、実際にあったのは〇・五世代なんてお粗末なもんだった」

「それでも死にかけたのは変わりないけどね」

その時だった。

クウェンサーの無線機から小さな電子音が鳴る。

『こちらはアマゾン方面軍の常設警備隊だ。救援要請を受諾した。これより「第二世代」の「フォレストローラー」を交戦区域に派遣する。この交信の発信源をマーカーとして使い、敵味方を区別したい。構わないか？』

「駄目だ！　こっちは生身でオブジェクトに命を狙われている！　同じ『正統王国』フォーマットのな。そんな分かりやすいマーカーを使ったらディミクシにぶち抜かれる!!」

『ならどうすれば!?』

「現場の生身の敵兵はこっちで片づける。『フォレストローラー』はディミクシにだけ集中しろ！　目的はオブジェクトの停戦。抵抗する機体はエリートが死なない程度に黙らせる！　人間は全て保護対象だ。分かりやすいだろ!?」

『了解。噂の王女サマにもよろしく。これから派手に暴れるが、うっかり濡れたとしてもそれは吊り橋効果だ。いちいち惚れるなと伝えておいてくれ』

『今のスラングは看過できません！　あの管制官は不敬罪で逮捕されたいのですか!?』

下女が金切り声を上げたが、クウェンサー達はようやく調子が戻ってきたと安心していた。

そう。

安心していたのだ。

まだ敵の第一射すらも見ていないのに。いいや、そもそも。『オブジェクト』と呼ばれる分類の兵器に、『甘さ』や『安全地帯』など一つとして存在しないというのに。

（……そういえば、『あれ』は一体何なんだ？）

友軍の『フォレストローラー』の救援を待つ間に、クウェンサーはふと疑問に思った。

ディミクシの乗る機体、『ブロードスカイサーベル』の後部。まるで巨大な剣を背負うように、鉄塔にも似たユニットが取り付けられているのだ。

（情報戦用の大規模なアンテナか？　いいや、それにしては大きすぎる。あれじゃ重心のバランスでわざわざリスクを負うようなものだぞ）

作りの粗いセーターの毛糸が、首回りを刺激するような感覚。

違和感の正体をそのまま言葉に変換すると、

（オブジェクトに鉄塔が装着されているんじゃない。あの比重じゃ、まるで鉄塔にオブジェクトが取り付けられているような……？）

疑問に対する答えはすぐに出た。

敵からの提示によって。

カッ!!!!!!　と。

鉄塔の根元から、溶接のように凄まじい純白の閃光が炸裂する。

クウェンサーは『オブジェクトへの恐怖』を急速に思い出し、とっさにフロートの上へと伏せた。ヘイヴィアはボケッと突っ立っている下女のミクファを突き飛ばそうとしたようだが、分厚いパワードスーツはびくともしなかった。硬い衝撃を受けて逆にのた打ち回っている。

「痛てえなくそ！　何だちくしょう!?　ディミクシが何か撃ちやがったぞ!?」

「いや、でも、おかしい。何だあれは!?」

うつ伏せに倒れながらも、唖然とした調子でクウェンサーは叫ぶ。

『ブロードスカイサーベル』後部にある鉄塔の中を、何かが高速で突き進んだ。垂直にそびえる鉄塔をなぞる形で、純白の光を携えた塊は真上へ射出される。大きさは小型トラック程度のものだった。

野球の遠投のように、弧を描いて砲弾が襲いかかってくるかと思った。

しかしその予測も外れる。

「おいおいおい!!　何だありゃあ……？　遠投どころじゃねえぞ。空の彼方まで飛んで行っち

まった!!」

『コンテナに似ていますね。レーザー式軌道エレベーターの』

「みたいじゃない。……あれはエレベーターそのものだ!!」

この時代の宇宙開発は二つの規格が争っている。レールガンの技術を応用したマスドライバーと、コンテナ下部に強力なレーザーを浴びせる事で乱反射を促し、空気を爆発的に膨張させて真上へ射出する、『光線のケーブル』を使ったレーザー式軌道エレベーター。

クウェンサー達がたった今目撃したのは、『宇宙技術の平和利用』なんていうお題目で無邪気にお茶の間に放映されている最新軍事技術の塊、つまり『久しぶりの明るいニュース』の映像そのものだった。

「……ヘイヴィア。クック追加諸島の事覚えているか？　俺が設計士のクレアの興味を引いて機密施設に案内された時の事」

「それが何だ!?　ナイトエッジ小隊の事なら思い出したくもねえよ!!」

「その時にクレアが言っていたんだ。第三世代は、『トライコア』の遺伝子を継ぐものになるだろうって」

『トライコア？　石油の採掘・運搬能力の比重を大きくした結果、兵器としてのバランスを失った（笑）な機体だとワイドショーのコメンテーターが評価していましたが』

「実際に戦ってねえヤツはこれだぜ！　あの時どんだけ死にそうになったと思ってやがん

だ!?」

「あとメイドさんもワイドショー観るんだね」

クウェンサーは妙な感心をしつつも、

「軍事ってのは真正面から兵器をぶつけ合うだけじゃない。『トライコア』は石油っていう生命線そのものをオブジェクトに組み込む事で、重要拠点を丸ごとオブジェクトの構造に組み込もうとした野心作だ。油田や精製所を防衛するために縛られる現状を打破するため、防衛施設自体を最強の戦力に変化させ、自由に移動できる能力まで授けた」

オブジェクト三機で石油精製施設を防衛したって、自滅覚悟で突撃する敵オブジェクトに破壊されたり、流れ弾で吹き飛ばされる危険性は拭えない。しかし卵のように柔らかい重要拠点がオブジェクトそのものの堅牢さを得れば、リスクはより小さくなる。

少なくとも、そう考えて大規模な公共事業をごり押しした連中がいた。

だからこそ、『トライコア』は二基もの動力炉の装備を許されたのだ。単にオブジェクトを三機同時に運用するよりも、はるかに多くの利益を得られると信じて。

「ディミクシの『ブロードスカイサーベル』はその亜種って訳かよ？」

「宇宙開発基地だって『動かしがたい重要拠点』だ。莫大な利益を生み出すものは等しく標的にされる。普通なら宇宙開発基地へ敵オブジェクトを突撃させないように、広範囲にわたって防衛線を築かなくちゃならない。実際の襲撃がなくても、その維持費だけで莫大な損失を生み

出し続ける訳だけど……」

「オブジェクトそのものが宇宙開発基地になっちまえば、そういった問題はクリアできるって訳か。JPlevelMHD動力炉っていう、おあつらえ向きの大電力もある訳だしな」

単純な殴り合いの先。

莫大な金を生み出す『金脈』そのものを組み込まれたオブジェクト。

第三世代。

上流階級から末端の兵士まで、広義で見れば戦争は数十億人が関わる『大きな流れ』だ。その観点で見れば、確かにディミクシの『ブロードスカイサーベル』は、戦闘一辺倒の『第二世代』よりも『戦争』に深く大きく食い込んだ機体と呼べるだろう。

『でも、ディミクシはこの局面で一体何を宇宙へ飛ばしたのでしょう?』

「さあな。案外、クソ野郎がビビって逃走したのかもしれねえぜ」

自然と、三人は視線を頭上へやった。

不気味なほど青い空に遮られ、宇宙の様子など観察する事はできない。

しかし。

直後。

ゴッ!!!!!!　と。

オレンジ色の光が天空から落ちてきた事で、ようやくクウェンサー達は敵の真価を知った。

地平線の向こうだった。

地球は丸いので、宇宙から落ちた光線の着弾地点をクウェンサー達が眺める事はできない。そのはずだった。にも拘らず、彼らは目撃する。地平線の向こうで、何かが炸裂した。あれは粉々に吹き飛ばされた大地や、その上に建っていた建造物の瓦礫などが舞い上げられたものだ。何十メートルも、何百メートルも。

「……なん、だ……？」

数十キロ先で起きた悪夢を想像し、しかし否定するようにヘイヴィアは呟く。

それはすぐに叫び声に変わった。

「何が起きやがった!?　真上に飛ばしたコンテナが落ちたのか!?」

「様子がおかしい。オレンジ色の光線がいつまでも残っている。あれは多分、空気中の塵や水分が焼かれた残像だ」

呆然とするクウェンサーの耳に、無線機から声が飛んでくる。

先ほどまでとは印象がガラリと変わった、友軍の管制官からのものだ。

『……ジジ、じじじ。ガガガガガガガ!!　アマゾン方面常設警備隊より各隊へ!!　交戦区域へ向かっていた「フォレストローラー」は中破した。繰り返す！「フォレストローラー」中

破!!　移動不能!!』

「ふざけんな……」

自分の無線もあるはずなのに、ヘイヴィアはクウェンサーから無線機を奪い取って叫ぶ。

「ふざけんじゃねえぞ!!　それが最後の切り札だったんだよ!!　一体何が起きやがったんだ!?」

『不明！　送信されてきたダメージレポートから、おそらくはレーザー兵器による照射を真上から受けたものと思われる。心当たりは!?』

当然ながら、爆撃機などが飛んでいたという話は聞いていない。そもそも、爆撃機に搭載できる程度のレーザー兵器でオブジェクトが吹き飛ぶとも思えない。

となると、空より上。

宇宙。

「……何かあるぞ。『ブロードスカイサーベル』だけじゃない。いいや、あの機体とワンセットになった兵器が軌道上にあるんだ!!」

『「ブロードスカイサーベル」の真の主砲は、宇宙空間に分離してあるというのですか!?』

オブジェクトの砲を分離して運用しよう、というアイデア自体は、割と昔からあるものだ。

戦車や爆撃機に砲を搭載する。あるいは戦場のあちこちに杭で打ち付けて設置する。そしてレーザーなりマイクロウェーブなりで砲へエネルギーを送電し、様々な角度から一斉にターゲ

ットを撃ち抜く、というものだ。

しかし、

「従来の方法じゃ駄目だった。主砲そのものが生み出す輻射熱や衝撃で、戦車や爆撃機が吹き飛ぶからだ。装甲を無理に厚くすれば、今度は自重で潰れてしまう訳だしね。地形に直接設置する場合も、作業に勘付かれてしまえばターゲットは交戦区域を離れてしまう。でも」

「無重力の宇宙空間なら装甲の『重さ』を無視できる。だからいくらでも重装甲化できるって訳か？　おまけに勘付かれようが何だろうが惑星の三分の一は常に主砲の効果圏だ。天空から降り注ぐ剣から逃れる術がねえ!!　完璧にイカれてるぜ!!　宇宙条約はどこいった、国際法違反だ！　こんなのありなのか。『安全国』も『戦争国』もなくなっちまう!!　あれ一機で六〇億人でも七〇億人でも自由に選んで皆殺しにできるぜ!!」

その気になれば、地球の裏側からだってディミクシはステイビアの乗る『アサルトシグナル』を撃ち抜けたはずだ。なのにひょっこり顔を出したのは、おそらく『御前試合』の形式に則り、同じ交戦区域に位置する必要があったためだろう。

「おそらく月面開発か何かの名目で資材を飛ばして、組み立てを軌道上で行ったんだ。ヤツの主砲は雪だるまみたいに膨れ上がっているぞ。何百メートルあるか分かったもんじゃない」

『でも、宇宙空間に設置されているのなら』

パワードスーツをまとうミクファは指摘する。

『弾道ミサイル対策の武装を使えば撃墜できるのでは？　オブジェクトの対空レーザーと迎撃衛星の組み合わせによって、この時代では弾道ミサイルは九八％無力化されると聞いていますが』

「またワイドショーの聞きかじりか？」

ヘイヴィアは呆れたように、

「現代の弾道ミサイル対策ってのはな、飛んできた兵器を粉々に吹き飛ばす訳じゃねえ。小さいが確実な傷をいくつもつけて、大気圏や空気中の摩擦でバラバラに自壊するように促すものだ。どれだけ膨れ上がっているか知らねえ『天空の剣』がかすり傷で吹き飛ぶとはとても思えねえな」

『では逆に、大規模な破壊力をご用意すれば？　こちらが弾道ミサイルを使って、軌道上にある敵主砲を破壊するのです。最初期のミサイル防衛は、まさに弾道ミサイルの大爆発で弾道ミサイルを呑み込むといったものだったはずですが』

何もない宇宙空間だからこそ、地図を吹き飛ばすような大火力を心置きなく使える、といった乱暴な意見もある。

しかし、

「あれはオブジェクトの技術が使われているんだぞ。大規模な主砲を動かすエネルギーを小さな対空レーザー群に回す機構があった場合、それこそ弾道ミサイルなんて百発百中で落とせる

【ブロードスカイサーベル】
BROAD SKY SABER

全長…80メートル（主砲最大展開時）

最高速度…時速550キロ

装甲…2センチ厚×500層（溶接など不純物含む）

用途…宇宙開発支援兵器

分類…水陸両用（ディミクシ曰く『第三世代』）

運用者…『正統王国』ニコラシカ王家（ディミクシ専用機）

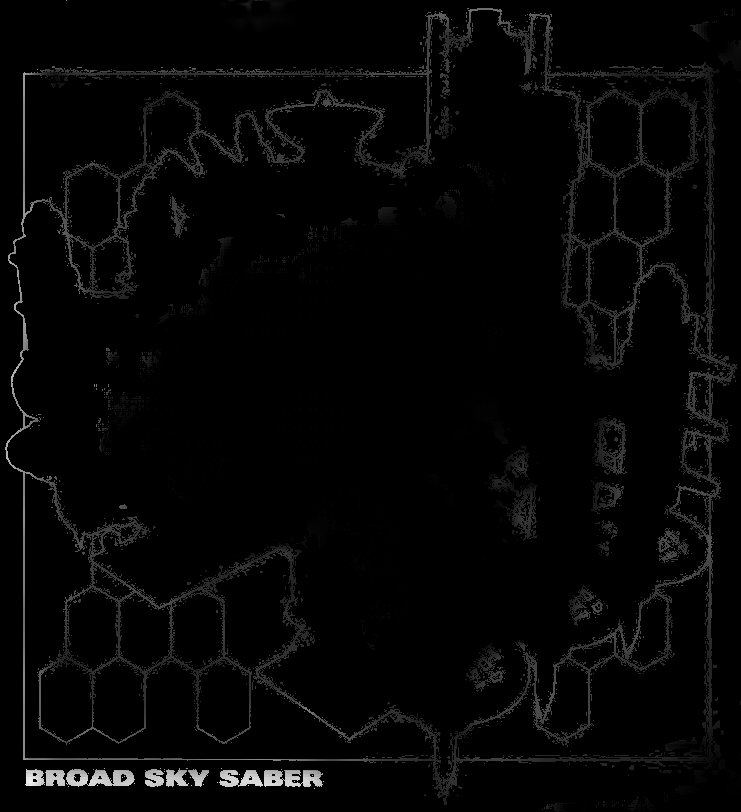
仕様…エアクッション式推進システム

主砲…衛星軌道上からの超高出力レーザービーム

副砲…レーザービーム、コイルガンなど

コードネーム…ブロードスカイサーベル（衛星軌道上の主砲より）

メインカラーリング…グレー



BROAD SKY SABER

はずだ」

『つまり？』

「状況は絶望的って訳だ!!　GPSと組み合わされば美味しいレストランを検索する感覚で地図から消し飛ばされちまう!!　人差し指一本でスイスイってな!!」

もっとも、常に高速で不規則に動くオブジェクトに対しては、GPSだけでは心許ない。本来であれば逃げる敵オブジェクトを六門の砲で足止めし、その間に衛星軌道上から狙いを定めて撃ち抜く、といった方法が採られるのだろう。

為す術もないクウェンサー達の前で、さらに『ブロードスカイサーベル』が、後部に積んだレーザー式軌道エレベーターを使用した。

溶接のように眩い光を発しながら、コンテナが衛星軌道上へと届けられてしまう。

「ありゃ一体何なんだ!?」

「さあね！　おそらく動力炉で作った大電力を溜め込むための巨大バッテリーじゃないか？　それだけであんな主砲を起動できるとは思えないけど、『天空の剣』がメガソーラーや化学酸素ヨウ素式のケミカル発電なんかを併用していれば何とかなるかもしれない！」

「ふざけているぜ……。どうすんだ？　これじゃ自慢のイチモツで華奢な王女の泣き顔を好き放題に往復ビンタされちまうぜ!!」

『冗談でもその手のスラングをステイビア様に使わないでください!!』

「よしヘイヴィア、上から目線でいたいけな少女の髪にドバドバ白いのぶっかけられる前に反撃しよう!!」

『ぎぃやあああああああ

15

フライトバーグ空軍基地の中を突撃していたユニコーンのソギアは、しかし、優勢にも拘らず顔をしかめていた。

制圧した中央司令室で、マルスが呟く。

「……どうなってんすか？」

彼らは『ブロードスカイサーベル』の緊急停止コード入手していた。消しゴムサイズのフラッシュメモリーの中にあった、一六進法で記された一三桁の数列だった。データはただの数値ではなく画像ファイルであり、わざわざ表示された番号を読み上げて、人の手で改めて、他の軍事ネットワークから切り離された、司令室とオブジェクトの間だけで繋がるホットラインに人力する必要がある。

もちろん理由は『作業のどこかにアナログな人の手を加えさせる』ためである。これを怠るとハッキングなどで外部から横槍を入れられる危険性が浮上する。

フラッシュメモリーは親指の指紋で使用者を認証し、さらに指の発汗や脈拍で異常値が検知されればロックがかかる代物だった。つまり元の持ち主を脅したり気絶させたりして『親指を借りる』方法ではセキュリティを突破できない。当然、切断して持ち歩く事も不可能だ。

しかし、安全な研究室の中で行われる『予行練習』ならともかく、戦争を左右させる現場で

緊急停止コードを使う場面になったら極度の緊張で異常値が出るのは当然だろう、と軍高官から指摘され、『誤作動を起こした時の緊急解除方法』が別に用意されているという、本末転倒な事情を抱えている事をユニコーンは摑んでいた。

ナイトエッジ小隊として設計士のクレアに近づいた恩恵である。

「ちくしょうが」

だが。

制御用のコンソールにフラッシュメモリーを突き刺し、中のデータを読み込もうとした直後には全員が異変に気づいていた。

データは乱れ、明らかに破損していた。

少なくとも人間の頭で読み取れる状態ではない。

戦闘の過程でフラッシュメモリーが物理的に破壊された訳ではない。『最後の切り札』を守るボックスはそんなに華奢な作りはしていない。

となると……、

「ディミクシがフライトバーグ空軍基地に送った緊急停止信号そのものがダミーだった、という事でしょうか？」

「いや、『相互信頼』のテストとして、事前に一回は試しているはずよ。でも根っこは悪くない。おそらくディミクシ派はフライトバーグの連中を信用なんてしていなかった」

「じゃあ何なんすか!?」
「時限式のウィルスか何かで、中のデータが当日以降にアクセスすると破壊されるようにできていたんじゃないかしら」
「どうだって良い」
ソギアはコンソールに刺さったままのフラッシュメモリーを蹴飛ばし、へし折りながら言った。
「『ブロードスカイサーベル』を止められなければステイビアを助けられん！　それどころかフライトバーグの異常はディミクシにも知られている。となれば『手痛い反撃』が待っていやがるぞ!!」
ゴゴン!!　と大地が激しく震動したのはその時だった。
中央司令室の巨大な管制用画面にあったはずの『フォレストローラー』に、中破の赤いサインが追加される。
攻撃が始まったのだ。
数十キロ先で起きた破壊の震動がここまで伝わってきた意味を知り、全員が息を呑む。
「来る。脱出するぞ。この基地も吹き飛ばされる!!」
今もフライトバーグ空軍基地のあちこちで戦う味方へ無線に指示を飛ばしながら、ソギア達は中央司令室を飛び出す。少しでもこの基地から離れるために。『第二世代』のオブジェクトを破壊するほどの攻撃から逃れるために。

しかし間に合わない。

空軍基地の敷地の外へ出る事すらできない。

二発目が、落ちた。

フライトバーグ空軍基地の中央の一点がオレンジ色に染まり、直後に破壊の嵐が吹き荒れる。

実際の照射時間は一秒もなかっただろう。

しかしその莫大な熱量が地面に蓄えられ、その蓄積が改めて空気を爆発的に膨張させた。結果、巻き起こったのは一〇〇度以上の熱を伴った凄まじい熱風。ハリケーンにも似た空気の壁が全方位へと撒き散らされ、砲撃や空爆を想定して造られていたはずの軍事施設を薙ぎ倒していく。

建物の、中と外。

どちらにいた方が幸せだっただろうか？

死角は少ない。

建物の中に逃げていたとしても、瓦礫の山が押し潰す。無防備に外へ出ていれば、大型トラックに全速力で体当たりされるような衝撃と共に、服も肌もまとめて炙られる。息を止めなければ肺の中さえ危ないだろう。

「く、そが……!!」

その時、ソギア達は軍事施設の裏手から外へと飛び出し、着弾の直後に大地へ身を伏せていた。

数秒の間を空けて、莫大な熱風が席巻する。

不幸中の幸いか、レーザー砲撃の着弾点は施設を挟んだ向こう側だった。建物は崩れながらも烈風の勢いを殺していき、衝撃はほとんど緩和されていたといっても過言ではない。

しかし熱は避けられない。

軍服が着火するほどではなかったが、それでも頭から熱湯をかけられたような痛みが走り回る。

「ぎゃあああああああああ!?　死ぬ、ちくしょう、死んじまうっす!?」

「堪えろ!!　全身に白燐を浴びている訳じゃない!!　軽度の火傷でピーピー泣くな新入り!!」

「……さ、サーニャさんの『コレクション』の耐火性に救われましたね。露出部分以外はほぼ無傷ですよ」

「生理食塩水と冷却剤がいるわ。ソギア、対物ライフルか機関銃、後はミサイルでも良い。とにかく重装備の兵士と連絡をつけて！　銃身や砲身を冷やすための装備を転用できるはずよ!!」

「そんな暇あるか……」

ソギアは痛む体を引きずるようにして起き上がり、チリチリと焼けるような空気を吸い込みながら、無線に向かって叫ぶ。

「生存者の報告をしろ！　フライトバーグ空軍基地に戦略的価値はなくなった。生存者は小分けして基地を離れるように。一方ではなく全方位へ散らばれ!!　上から狙われている。地下鉄のトンネルなどへ逃げ込め!!」

しかし返答はない。

均一的なノイズの原因は、機材が熱でやられているのか、あるいは答える者がいないためか。歯噛みするソギアに、ようやく人の声が返ってきた。

生存者かと思ったが、予想は裏切られた。

それは女の声だった。

『いいや違うなユニコーン。ここは下がる場面じゃあない』

「……？　設計士、クレア＝ホイスト……？」

主に最高機密である『ブロードスカイサーベル』の開発状況を探るため、設計業界の人間とコネクションを作る目的で接近した人物だ。赤道近くのクック追加諸島も暑かったが、その思い出が色褪せるほどの灼熱地獄にさらされたものだとソギアは思う。

しかし、そのクレアが今さら何を？　と彼は疑問に眉をひそめる。

『現状をきちんと確認しろよ。「彼」はもう答えを得ているぞ。ディミクシ＝ニコラシカはあ

らゆる手を使って合法的にステイビア＝ニコラシカを堂々と暗殺し、王位を継承しようと画策している。にも拘らず、ヤツは一発目を「フォレストローラー」に、二発目をフライトバーグ空軍基地へ落とした。何故だ？　標的はすぐそこにあるのに』

「そりゃあ邪魔者を殺してゆっくりと料理にかかるためだろう!?　だから救援に来たオブジェクトや、俺達ユニコーンを潰そうとした!!　現にそれは成功している!!」

『その通り。何だ、自分で答えを言えるじゃないか』

「何だって……？」

言いかけて、ソギアはようやく気づいた。

『第二世代』の『フォレストローラー』はまだ良い。しかし、フライトバーグ空軍基地を破壊した理由は何だ？

中央司令室にあった緊急停止コードは最初からダミーだった。放っておいても『ブロードスカイサーベル』を止める事はできなかった。そしてユニコーンについても、今さら生身の人間が立ち向かったところで、あの超大型兵器は反撃すら必要ない。豆鉄砲のような銃弾を受けながら、構わずステイビア王女を撃ち抜く事だってできたはずだ。

にも拘らず、『ブロードスカイサーベル』はわざわざ回り道をして、フライトバーグ空軍基地を破壊した。

一刻も早くステイビア王女というメインディッシュを食べたいはずなのに。

「……何かある」

『そう、何かがある。「ブロードスカイサーベル」にとって、順調に進んでいる作戦を中断してでも破壊しておきたい何かが。そしてそれはきちんと破壊されたのか？　天空からの一撃は強力だが大雑把だ。ひょっとしたら、完璧には破壊されていないかもしれないぞ』

「……、」

ソギアは赤熱した廃墟を睨みながら、考える。

勝算は低いが、まだ敗北が決定した訳ではない。

元より、小数点以下のパーセントを綱渡りしてここまでこぎつけた。今さらその低さに絶望するような神経はしていない。

『「彼」からの伝言だ』

そんなユニコーンに、設計士のクレア＝ホイストはささやく。

『ベビーシッターなら任されてやる。その間にパパはきちんと仕事しろ。ヤツが消したがっていた何かを掘り返せ、だとさ』

16

クック追加諸島。

年がら年中まさしく『常夏』で、しかもそんな観光名所にできそうな青い海を満喫する事もなく、設計上のクレアはエアコンの効いた通路で壁に背中を預けていた。研究施設の破損は、痕跡もなく修復されていた。クレアがいるのは建物の角に位置する場所で、表向きはジュースの自販機コーナー。しかし情報漏洩防止用のために用意された電波遮断建材を取り外した一角でもある。

もちろん、その手にはノートパソコンがあり、建物の外にいるナイトエッジ小隊の通信機器からのデータを、電波の形でやり取りしている最中だ。

彼女が送信した情報は、ナイトエッジ小隊に伝わり、さらに衛星通信設備を通して南米大陸へと繋がっている。

クウェンサー達とユニコーンの間の通信を仲介しながら、水着の上から白衣を羽織った女（自称、天才少女の仲間入り）はポツリと呟く。

「そう簡単に死んでもらっちゃ困るんだよねえ。悲劇に浸っている暇があったら、きっちりケリをつけてもらわないと」

良く冷えた炭酸飲料を口にしながら、彼女は『きっかけ』を思い出す。

オブジェクト開発の設計者、クレアは、ナイトエッジ小隊（に扮した、ユニコーン）から話を聞いた時、もちろん罠の可能性を考慮した。そもそも、ユニコーンこそそうした自作自演の攪乱工作を最も得意としていたからだ。

ディミクシ王子によって周到に準備が進められている、ステイビア王女暗殺計画。その阻止の協力を突然求められて、何も疑わない方がおかしい。

『疑うならご自分のネットワークを使って調べてみればよろしい。俺達よりも、よほど精密、広大な情報網を持っているのでしょうから。そうでもなければ、あなたのネットワークを欲しいとは思いません』

『ふん……』

クレア＝ホイストは旧式のゲームパッドを両手で操りながら小さく息を吐く。ケーブルはノートパソコンに繋がれており、画面の中では不時着した輸送ヘリの中からむさ苦しいヒゲオヤジが這い出てくるところだった。ミッション内容は敵国ど真ん中に落ちたヘリの落下地点から、自力で国境の外まで脱出する事。およそ五〇〇キロの地獄マラソンである。

『兵器開発に必要な素養を知っているか？』

『さあ。単純に数学か物理か、でもデザイン性を考えると芸術分野も必要なんでしょうかね』

『空虚なサディズムだよ』

クレアはゲームパッドを軽く振った。

画面の中のヒゲオヤジは敵兵を撃ち殺し、オフロードカーを奪って爆走している。

『結局、遠い地で誰かが人を殺す事を名誉と思わないとこの仕事はやってられない。軍事ネットワークの画面の中の記号の話であってもな』

『それを呑気に眺められるのが、兵器開発の才能と？』

『私は才能って言葉もあまり好きじゃないがね。失敗者が努力もせずに成功者を妬む時にばかり使われる。両者の違いは伸び率と歳月以外の何もないのにね』

……その伸び率を一般には才能と呼ぶんだよ、とナイトエッジ小隊の男は口の中で呟いたようだった。おそらく意図的に唇の動きを読ませているのだろうが。

そちらも『それ』を持っているはずなのに、妬まれても困る。生身で行う殺しと騙しの技術については、少なくともクレアよりは上だろう。

だから構わず、水着の上から白衣を着た女は続けた。

『私は愛国心や博愛精神でオブジェクトを作っている訳じゃない。強そうだから作る。格好良いから作る。それで歴史を変えてしまう。ま、バーで一緒に飲んでもつまらん女という訳さ。だから私にまっとうな、基本的な、平均的な人間性なんてものを期待するな。ステイビア王女の都合なんぞ知った事じゃない。死ぬのが怖いなら力をつけろとしか言いようがない。それが腕力であれ、権力であれな』

実際に、ゼロから物を作って成功した者の意見だった。

圧倒的に正しく、そして冷徹だ。

努力をすれば成功する。上っ面の奇麗ごとではなく、本当にそれを成し遂げた者には、おそらく現在進行形でもがき続ける者の苦悩など理解できないのだろう。何で努力をしているのに

成功しないの？　いつまでモタモタしているの？　君は本当に努力しているの？　その残酷過ぎる質問を、無邪気に発する事ができる人間の考えだ。

『……ただ』

と、そこまで冷徹さを突き付けたクレア＝ホイストの口調が、わずかに変わった。

画面の中の激しい銃撃戦とは裏腹に、彼女の声に自分で否定した『人間味』が滲む。

『「アサルトシグナル」と言ったな。ディミクシ王子が「駒」として調達したのは、第一世代の「アサルトシグナル」』

『ええ。休暇中で「安全国」にいた操縦士エリートを爆殺する事で、戦場から機体を退場させた形でね』

古い機体だ。

『第一世代』の中でも中期から後期にあたるモデルである。基本的な砲門の他に、強力な電磁波や各種波長の光を照射する事で、敵機のセンサーに使われる素子を破壊する実験的なプロジェクトにも参加していた。結果は惨敗で、研究室の外に出れば使い物にならない、机上の空論に過ぎない事が分かっただけだが。

『ベイビーマグナム』とは設計思想が異なるものの、基礎理論のいくつかは遺伝子のように受け継がれている。親子や兄弟ほど濃くはないカラー。差し詰め、親戚や従兄弟といったところか。

思い出深い機体だ。

クレアが初めて設計したオブジェクトである。

無知な軍上層部から見当違いな理由で却下されたいくつかの技術を、公式提出した設計図には記載しないで組み込むなど、今にして思えば結構な無茶をしたエピソードもある。

しかし。

議論の核はそこではない。

別にある。もっと重要なものが。

『……操縦士エリート。エクセルシーラは可哀想な女だった』

ポツリと。

彼女は一つの名前を口に出す。

『貧しい家の出だ。エリートとしての適性が認められてスカウトされた時には、これでやっと親孝行ができると喜んでいた。だが初めての給料で贈った仕送りの額を間違えたな。両親を助けるために行ったその行為が、彼らの金銭感覚と人生を破壊した』

『……』

『一流品しか身につけられなくなった人間は惨めだ。特に現実の稼ぎと理想の服装が噛み合わなくなった者は。ブランド依存症となった両親を助けるため、エクセルシーラは奮闘していたよ。カウンセリングには三年かかったようだが、それも何とか実を結んだ。滅多に取らない休

暇を申請して、やっと両親に手編みのセーターを渡せるはずだったんだがな』

全ては無駄に終わった。

当然ながら国家の有力な財産であるエリートは、休暇中とはいえ護衛もなしに街をふらふらとはしない。爆殺なんてたわけた死に方をした以上、そもそも護衛チームの中にもディミクシ派の『敵』が混じっていた可能性が高い。

エクセルシーラの健気さは、献身は、博愛は、奮闘は、そして小さな成功と幸福は。

下衆な男の権力欲によって塗り潰されたのだ。

真っ黒に。

たかが『駒』を手に入れるために。

『良いだろう』

クレア＝ホイストは静かに呟くと、ゲームパッドを摑む手に力を込めた。

ミシミシと音を立てたかと思うと、プラスチック製の機材に亀裂が入り、砕ける。

突然コマンドが途切れ、為す術もなく銃殺されていく画面の中のヒゲオヤジを無視して、クレアはナイトエッジ小隊の男を睨みつけた。

『……私にこんな感情がまだ残っていたという事に驚きだが、湧いて出た以上は乗ってやる。どうせ、エクセルシーラの件が一番効果的に働くだろうと思って、私にコンタクトを取ってきたんだろう？』

ただし、と彼女は付け加えて、

『私の怒りがお前達の周到な計画を内側から食い破る可能性がある。常にそれを意識し、私の手綱は上手に握れよ？』

ディミクシ＝ニコラシカは確かに優れた策士だったのかもしれない。

彼は数々の悪行によって順当に資金、権力、機材、人員を拡充させていったのだろう。

しかし、悪行はメリットと同じだけのデメリットを生み出す。

張本人に関知できる場所の、さらに外側にまで。

17

そして馬鹿二人は時間との勝負に駆り出されていた。

設計士クレアからのコンタクトを切ったクウェンサーは、相棒に向かって叫ぶ。

「ヘイヴィアは非常電源を！　俺とミクファで防御システムのケーブルをぶち切っておく!!」

「汚ねえ!!　俺もメイドさんと一緒に汗を流す側が良いぜ!!　リアルな荒い吐息を間近で聞きたい!!」

『ついにクソ野郎どものスラングが私の身にまで……!!』

各々ぎゃあぎゃあと叫ぶが、時間がないのは当然分かっている。敵はすでに二発も撃ったのだ。制限時間の算出は難しくない。

馬鹿二人は別々の方向へ進む。

ヘイヴィアは地下への階段を駆け下り、クウェンサーとミクファはフロートの上を走っていく。

「おそらく七分に一発だ！　それで発射、減速、バッテリーユニットの接続まで行っているっていうんだから驚異的だぞ!!」

『ディミクシはマシンガンのようにコンテナを連続射出したりはしないのでしょうか？』

「超高温で空気を爆発的に膨張させるシステムだぞ。急速冷却にも時間がかかるし、冷却したらしたでエレベーターのガイドレールに歪みがないか計測する必要もある。……あれでも、数日かけて発射準備を進めてきた旧来のロケットに比べれば常識知らずの早漏だよ!!」

『ひょっとして先ほどからのスラングは楽しんでいませんかセクハラ的に!?』

そこらじゅうをのたくる、腕より太いケーブルに爆弾を取り付けて爆破していくクウェンサー。この太さになると、もはや専用のワイヤーカッターでも『刃物で切る』事はできない。

一方、ミクファはパワードスーツの膂力に任せて強引にケーブルを千切りながらも、デジタルな望遠機能で『ブロードスカイサーベル』を観察していた。

『エレベーターの基部が蠢いています。円筒状のパーツが装塡されていく……。おそらくコン

テナです!!』

「脂オヤジが膨らんだ股間をまさぐっているだって!?」

『もうぶん殴っても良いですよね！　パワードスーツでも遠慮はしませんよ!!』

鉄塔状のエレベーターに寄り添う形で、もう一つ、ビルのような直方体のユニットが装着されている。銃で言うと、あれがマガジンに相当するのだろうか。

「ヤバいな。くそ、ヘイヴィアは大丈夫なのか!?」

『あいつ一人で地下へ逃げているんじゃないでしょうね!?』

パパン！　という発砲音が聞こえたのはその時だった。

ただでさえ時間がないのに、車軸が折れて傾いている大型旅客機の陰から、ディミクシ派と思しき兵士達がこちらを狙ってきたのだ。

クウェンサーは迷わず下女（パワードスーツつき）を盾にしながら、

「面倒臭いな！　何でまだ生きているんだ!?」

『生き残りって事はステイビア様を連行していった別働隊ですよね。許せん……!!』

と、何を思ったのかいきなり下女が一直線に爆走を始めた。盾がなくなったクウェンサーは全力で伏せたが、驚いているのは彼だけではなかった。ディミクシ派の兵士は慌てて携行型の対戦車ミサイルを肩に担ごうとしたようだったが、ミクファが素人故に全く恐怖を感じずに突っ込んだのが功を奏した。彼女の方が早い。

自動車の安全運転以上の速度で一五〇メートルほどの距離を詰めると、ミクファはパワードスーツの巨大な手で慌てふためく生身の兵士を、ガシィ！　と掴んで、

『じゃーまん☆すーぷれっくす!!』

「ぎゃあああああああああああああああああああ!?　超重量と剛腕がスポーツを殺人に変えちゃったぞ!!」

側で見ていたクウェンサーが絶叫する。

非人道的な殺人兵器という言葉を聞くたびに『じゃあ人道的な殺人って何だよ（笑）』と思っていたクウェンサーだったが、その意味をまざまざと思い知らされる光景だった。死因と言っても色々あるが、空き缶みたいに中途半端な潰され方で死にたいと思う人間はなかなかいないだろう。

そして数名で構成されるチームの中央へ突っ込んだミクファは、ドロップキックで他の兵士1（体勢を立て直そうとした）を旅客機の壁へノーバウンドで叩きつけ、兵士2（パニックを起こして無意味にサブマシンガンを連射した）をラリアットで上半身を飛沫に変え、兵士3（運命の女神に罵声を放っていた）をボディプレスで地面の染みにした。どれが1でどれが3か、見分けがつかないほど破壊されてしまっている。

不謹慎だが、もはやちょっと笑えた。

でもできればメイド服のスカートをなびかせながら、絶対領域を見せつけつつやってほしか

ったとクウェンサーは思う。何故なら笑えるけど可愛げがないのだ。ついでに救いようもない。

すっかり真っ赤になったミクファは、そこでようやく事態を理解したようで、

『全く怒りが収まりません。さっさと死にやがって!!』

「えーと、こっちに近づいてくる前に血と臓物は洗い流してほしいなー……」

『何ですか汚いものを見るような目で!!　抱き着いてやりますよ!!』

「いやあああああああああああああああああ!!　ベタベタするううううううううううううううううううううう!?」

現役のメイドに真正面から抱き着かれ、その豊満な胸元に顔を埋めさせていただくという大変レアな経験を積んだにも拘らず、本気の涙を流して絶叫するクウェンサー。そこにはゴツい装甲と鉄臭い匂いしかない。しかも多分装甲の匂いとはまた別だ。

「げぶっ!!　ごぼごぼっ!!　冗談にしても悲惨過ぎる!!　それより早く防御システムに繋がる送電ケーブルを全部切断しないと！　うえ、ぺっぺっ!!」

ようやく血まみれの下女から解放され、クウェンサーはほうほうのていでフロートをのたくるケーブルの残りを爆弾で吹き飛ばしていく。

『コンテナ射出から六分経過しました！』

「防御システムは黙らせた。後はヘイヴィアだ!!」

ジジッジ!!　とクウェンサーの無線機から耳障りなノイズが聞こえてきたのはその時だった。

『間に合った……？』

「いや、アンテナの向きを変えるんだ！　『ブロードスカイサーベル』の方へ、早く!!」

パワードスーツが走る。杭でフロートに直接打ち付けられた、ワゴン車ほどの塊へ強引に摑みかかり、本来なら油圧で動かすであろうアンテナの首を強大な膂力で無理矢理に振らせる。

直後に、何かが、落ちた。

オレンジ色の閃光が、フロート状の国際空港や、寄り添うように海上に浮かんでいる『アサルトシグナル』からさらに沖に向かった位置へ、一直線に突き抜ける。

『やった！　狙いが逸れ……!!』

ミクファが喜びの声を上げる暇はなかった。

危険を訴える時間はない。クウェンサーは左の主翼が折れてフロートに転がっている大型旅客機の陰へと飛び込む。

数秒の間。

そして。

真っ白な爆発が炸裂した。

一秒にも満たない大規模なレーザービーム。その着弾によって海水が莫大な熱を蓄えた結

果、周辺の海水をまとめて蒸発させたのだ。大規模な水蒸気爆発は、記録映像にある旧式のロケットやスペースシャトルの発射をイメージさせた。全方向へ、雲のように広がる白い塊が一斉に広がっていく。

何百メートルも、あるいは、それ以上も。

壊れた旅客機の陰に隠れて身を伏せていたクウェンサーだったが、安全などどこにもなかった。盾にしていたはずの旅客機が、白い壁の直撃を受けてゴロリと転がる。押し潰される危険に見舞われたクウェンサーは慌てて起き上がり、全力疾走で後退する。

「ちくしょっ、せっかく助けたティルトローターが!?」

空中を飛び交っていた兵員輸送用のティルトローターが、空気の塊に叩かれて落とされていく。しかしクウェンサーには何もできない。せめて海へ不時着してくれと願うしかない。相手がいけ好かない優等生だとしても、流石にあれで全滅では後味が悪すぎる。

その時だった。

視界の端で、アンテナ施設からもぎ取られて、フロートの上を転がるパワードスーツをクウェンサーは目撃する。

嵐の中で伝わるかどうか不明だが、とにかく叫ぶ事にした。

「パワードスーツから降りろ!!　海に落ちたら助からな……!!」

大声が途中で切れる。息を吸い込んだ途端に焼け付くような痛みが喉の中で暴れ回った。ク

ウェンサーは慌てて息を止めたが、すでに火傷は広がっている。自分の口と喉を手で押さえ、のた打ち回るが痛みは消えない。

「がふっ!!　げほごふっ!!」

吸い込んだ熱風は少しで、喉の辺りを焼く程度で済んだ。これが肺の中まで入っていればそのまま呼吸困難に陥っていただろう。

ゴゴン、という鈍い音が響いたのはその時だった。

今まで遠方で静観していた『ブロードスカイサーベル』が、ディミクシ＝ニコラシカが、動く。

自慢の一撃を逸らされた事が、よほど不服だったのか。

いいや違う。

（……オブジェクトの前面についている砲は足止め用だ。装甲を削る事はできてもコックピットを貫くほどの力はないんだ！　つまり、王位継承のためにステイビア王女を殺すには、何が何でも『天空の剣』で串刺しにする必要がある!!）

だとすれば、何にもましてジャミングを行うＥＣＭ施設を破壊しようとするはずだ。

しかし、そうは思っても時速五〇〇キロ前後で高速接近してくる巨体を止める手段がない。為す術もないクウェンサーの前で、フロート近くまでやってきた『ブロードスカイサーベル』は、手始めに六門の砲で『アサルトシグナル』へ一斉掃射する。

フロートから落ちそうになっている下女のミクファが、自分の事など気にせずに金切り声を発した。

『ステイビア様が!!』

「馬鹿野郎！　狙われているのはアンタだ！　あれで殺せるようなら最初から『天空の剣』なんて大仰なものは持ち出さない!!」

ほとんど衝撃波に近い轟音と、『アサルトシグナル』から溶けて剝離した装甲の破片が雨のように降り注ぐ。常識で考えれば、やはり壊れた旅客機の陰から出る訳にはいかない。

だが、放っておけばＥＣＭ施設の近くにいるミクファは砲撃に巻き込まれる。

装甲ごと吹き飛ばされずに済んだとしても、余波を浴びればフロートの縁から海へ落ちるのは確実だ。

しばし悩み、悩むほどの時間がない事に気づく。

クウェンサーは決断した。

（くそ、どうせ死にかけるならバーで自慢できるような道を選んでやる!!）

装甲片の雨の中を、クウェンサーは身を低くしたまま全力で走る。間近に高温の破片が落ちてオレンジ色の火花を散らしたのを見て冗談抜きで涙が出そうになったが、今さら足を止めても安全は得られない。とにかくパワードスーツを着たミクファに向けて走り続ける。

しかし間に合わない。

『試し撃ち』で予想通りステイビアを殺せない事を確認したディミクシは、無数の砲の矛先を変えた。本来の予定通り、フロート上に複数設置されているECM施設に向けて。

一つずつ、順番に。

オブジェクトの砲が丁寧にECM施設を溶断し、吹き飛ばしていき、間近にいたミクファはおろか、彼女に近づこうとしていたクウェンサーまで容赦なく薙ぎ倒された。

衝撃波を受けただけではない。

フロート自体が大きく揺さぶられたのだ。

ガゴン!!　という凄まじい震動は、まるで吊り橋のロープを一本ずつ切断していくような不安さをかき立ててくる。

爆発音に遮られないように、クウェンサーはサウナのような熱気の中で思い切り叫ぶ。

「ミクファ!!　緊急イジェクトだ!!　両手首のレバーを同時に引け！　海に落ちる前に実行しろ!!」

返事はない。パワードスーツから降りるような素振りも見せない。ただ衝撃に翻弄されて、フロートの縁へと転がされていく。クウェンサーの声が聞こえていないのか、パニックを起こして基本的な操作もできなくなっているのか、莫大な衝撃に怯えて降りる事を拒んでいるのか。

しかし、あのまま海に落ちれば辿る道は一つだ。

クウェンサーは擦りむいた両手を使って起き上がり、再び走り出す。

『ブロードスカイサーベル』はＥＣＭ施設の破壊を優先しているためか、パワードスーツへの追い討ちは実行されない。他の施設の破壊へ意識を回している。

「くそ!!」

ようやくクウェンサーはパワードスーツの元まで辿り着いた。転がり続けるミクファの巨体は、迂闊に近づくと押し潰されそうだった。クウェンサーはフロート上にのたくっていた太いケーブルを両手で持ち上げ、転がるパワードスーツを引っ掛けて減速させる。

『ブロードスカイサーベル』の砲撃は続く。

ＥＣＭ施設を優先して攻撃しているはずだが、その余波だけでフロート全体の浮力が大きく変動する。止めたはずのパワードスーツが、フロートの傾きの変化によってさらに海側へと滑っていく。

時間はない。

嵐に揺られる船のように不安定なフロートの上で、クウェンサーはパワードスーツの装甲に取り付く。

（くそ、外側から強制イジェクトなんてできるのか!?）

精密機器とプログラムの塊であるパワードスーツは、一般的に内側からロックを掛けると外側からは開けられない作りになっている。理由は単純で、敵の手で開けられたら元も子もないからだ。

だが、それもいくつかの例外がある。

（搭乗員が基本動作もできないほどの重傷を負う、あるいは意識が失われた場合は整備員がこじ開ける必要がある）

携帯端末を見ながら、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出し、パワードスーツの背中の部分に貼り付ける。ボールペン状の信管を取り付けると、転がるようにミクファの側から離れた。ジャミングの状況が不明であるため、無線信号ではなく時限式の設定だ。

きっかり一〇秒で起爆した。

今なお滑り続けるパワードスーツの背中の装甲の一部が、狙い通りに剝離する。

クウェンサーはもう一度機体に取りつき、装甲の中にあったレバーを両手で摑み、全体重を後ろに傾けて強引に引っ張る。

ガクン、と何かしらの栓が抜けるような感覚と共にレバーが外れた。背部のハッチが開き、中から下女のミクファが転がり出てくる。

フロートの傾きがさらに増す。

抜け殻となったパワードスーツもろともクウェンサー達は海水の中へと落下していく。状況を把握できていないミクファの腕を摑み、足だけの力で海面まで何とか上昇する。

ほんの十数秒ハッチの開閉が遅れていれば、ミクファはパワードスーツもろとも海の奥まで沈んでいたはずだ。そんな状態から脱出しても、海面までは息がもたないだろうし、無理に高

速で浮上しようとすれば潜水病に襲われていただろう。

「げほ！　がはごほ!!」

空気中に顔を出し、ようやく酸素を貪るクウェンサーとミクファ。クウェンサーの軍服もかなりのものだが、ミクファのメイド服は水を吸えばさぞかし重たくなるだろう。辺りにはＥＣＭ施設の外装の破片が浮かんでいたので、スーツケースほどの破片を浮き輪代わりに摑ませる。

包帯で覆われた一〇本指は海水に濡れ、中から赤黒い液体を染み出させていた。

「……大丈夫か？　拷問を受けた体に海水は相当辛いと思うけど」

「そ、それよりステイビア様です」

弱々しくも、しかしミクファは自分の身よりも、まな板の上に置かれた王女を案じた。

「ＥＣＭ施設は破壊されました！　ステイビア様を守る盾が何もなくなってしまう！　このままでは、『天空の剣』で一突きにされてしまいます!!」

嘆くミクファの眼前で、溶接のような純白の閃光と共に、『ブロードスカイサーベル』は後部に設置されたエレベーターからコンテナを垂直に射出する。

『天空の剣』発射までのカウントダウンが始まる。

猶予は七分間のみ。

18

ユニコーンのソギア達は、ほぼ全壊した五キロ四方のフライトバーグ空軍基地、正確にはその跡地を駆け回っていた。ほとんどの建物が崩れたため、どこにどんな施設があったのかも見分けがつかなくなっている。頭の中にある見取り図を辿る形で、彼らは瓦礫の上を進んでいた。

ここには『ブロードスカイサーベル』の、ディミクシ＝ニコラシカのアキレス腱がある。

どんな形をしていて、どんな役割を持っているかも不明な『何か』。

まるでヒントがないようにも見えるが、しかしソギア達はおおよその当たりをつけていた。

「……オブジェクトの建造にはニコラシカ王家が深く関わっていやがるんだろう。だが現場で整備・運用している部隊はどこだ？　一〇〇〇人前後の整備大隊が他に存在する？　いいや、だとすれば俺達の情報網にも引っかかっているはずだ。それだけの大部隊は隠し切れねえ」

「フライトバーグ空軍基地そのものから、人員や機材のやり取りをしていたって事？」

「だとすれば、ここには『ブロードスカイサーベル』のスペアパーツや整備情報なんかが残っているはずっす!!」

「そこから弱点を辿れる。そう判断したから、ディミクシは空軍基地を空爆したって事ですか」

ディミクシは弱点の眠る位置をある程度予測できただろう。
にも拘らず、彼は基地の中央、滑走路に向けて『天空の剣』を照射した。
副次的効果で基地を丸ごと吹き飛ばせるという自負もあるのだろうが、それとは別の意図をソギアは感じていた。
ターゲットをストレートに狙えば、そこを重点的に調べられ、溶けた機材の中からでもヒントを探られるリスクが、わずかでも存在する。
それが怖かったから、ディミクシはフライトバーグ空軍基地の中央に爆撃の光点を落とし、あくまでも『大雑把に』施設全体を破壊した。
破壊の意図を、万に一つも教えないために。
周到な陰謀を企てる人間は、大胆であると同時に臆病でもあるものだ。だから様々な状況を想定し、その全てを事前に潰そうと躍起になる。
「情報と物資の二つから『第三世代』に近づくぞ。人員を分けろ。情報は管制・通信施設のサーバー、物資は馬鹿デカいハンガーが並んでいた一角を徹底的に掘り返せ」
ソギア、サーニャは情報側、マルス、フラットは物資側に回る。
各々、大規模な空爆を生き残ったユニコーンの部下を引き連れて瓦礫の中を走る。
フライトバーグ空軍基地からの抵抗はもはやなかった。単純に空爆でやられたのか、友軍に基地を粉々にされた事で、この戦闘に勝っても逃げ場がない事を理解してしまったのか。

当然、動く兵がいれば迷わず無力化するつもりだったが、今のところは無用な戦闘が継続するような事態にはなっていない。

周囲の空気からは焼き付くような猛威は失われたが、今も常識外れの熱気は籠っている。砂漠を渡り歩くよりもはるかに辛い。屋外の開けた環境であるべき温度ではなかった。

ソギアは、本来なら輸血の代用で使うための生理食塩水を口に含む。ただの水では電解質を補給できず、熱中症に陥るのは確実な状況だ。

「くそ、まるでサウナだぜ。色んな戦場をかいくぐってきたが、歩いているだけで寿命を削られるなんて尋常じゃねえな」

「コーヒー牛乳が恋しくなる温度ね。それより気づいている？　辺りが雲に覆われ始めているわ。かなり急速な流れよ」

「急激な温度変化で気圧がバグってやがるのか？　だったらさっさと天の恵みをいただきたいね。全部まとめて冷やしてほしい」

「通常の気候を無視した天候兵器の側面を持つのよ。集中豪雨なんかになったら大事なヒントまで洗い流されるかもしれない」

管制・通信施設は巨大なタワーを有していたはずだが、ソギア達の目の前に広がるのは均一な高さに積まれた瓦礫だけだった。どこに何があるのかも判断がつかない。

「手で掘り返せる量じゃねえな。重機かパワードスーツに使えるものがないか探した方が早い

ぜ」

元々、軍需の一部門には『トラクターやクレーン車など、既存の建設重機の強度を上げる』部署が必ず備わっている。映画に出てくるような華々しい撃ち合いだけが戦争ではないという訳だ。それに、4WDのオフロードカーなど専門の機材でなくとも、小型のウィンチやクレーンを備えているものは珍しくない。

「ブルドーザーみたいなブレードがついた戦車があるわね。おそらく対人地雷処理用だと思うけど」

危険な地雷原に対して『爆破しながら道を作る』という、極めて大雑把な設計思想の改造である。サーニャは前面の車両運転席に、ソギアは砲塔のハッチから指揮官用の座席に入る。

元々ブレードの可動域が少ないため、悪戦苦闘しながらも、外周から瓦礫を崩していく。

やがて、オレンジ色の火花を発する一帯が顔を覗かせた。

「出てきたぞ。大電力を支えるケーブルが大騒ぎしていやがる」

「……雨が降り出す前に何とかしたい情景ね。一帯が水に濡れたら手に負えなくなりそう」

戦車から降りて、細かい瓦礫を払いのけると、ドロドロに溶けてから再び固まった、プラスチックの塊のようなものが出てきた。その隙間から、むき出しの電子基板が見える。通電状況は不明だし、コンデンサなどは一定期間、電気を蓄え続けているだろう。下手に端子へ触れると指が吹き飛ぶかもしれない。

「とてもじゃないけど動かせる状況じゃないわ。そもそもモニターは軒並み砕けている」
「断片でも破損データでも良いから何でも吸い出せ。同じ『正統王国』フォーマットなら、敵国のシステムを狙うよりは簡単なはずだ」
サーニャは携帯端末にケーブルを繋いでデータの抽出を始めたが、その時、ゴロゴロという雷の音がソギア達の頭上で鳴り響いた。
気がつけば、空一面はすっかり黒雲に包まれている。
いつゲリラ豪雨に襲われてもおかしくない状況だ。
「まだか!?」
「容量が桁外れなのよ！　バーゲンで投げ売りされているハードディスクレコーダーとは違う!!」
「本格的に降り出せば列車の架線並の高圧電流が撒き散らされるぞ。急げ急げ！」
「生憎と、私の携帯端末には罵詈雑言で処理速度が変わるような機能はついていないわ！」
ぽつ、とソギアの頭に生ぬるい刺激が落ちてきたのはその時だった。
灼熱地獄の中、あれだけ待ち望んでいた天の恵み。
しかし彼は顔をしかめると、サーニャの肩を強く摑んだ。
「限界だ！」
「もう少し!!」

「下手くそな鉄板焼きみたいになって死にてえのか!?　離れろ!!」

ソギアは強引にサーニャをサーバーの残骸から遠ざけさせる。携帯端末のケーブルは限界まで伸びて、そして端子から外れた。転がるような格好で少しでも距離を取る。

直後に、バケツをひっくり返したような豪雨が来た。

溶けたサーバーの残骸を中心に、青白い爆発が炸裂する。

「危ねえ!!」

「ああもう、一〇〇分の一も吸い出せたか分からないわよ……！」

黒雲の発生で周囲が薄暗くなる中、あちこちの瓦礫の山の先端で、何か青白い光がぼんやりと光るのをソギアは見た。

（……セントエルモの火……先端放電か。くそ、天気の急速な悪化で、そこらじゅうが帯電を始めてやがる）

この分だといつ落雷があるか分かったものではないが、天候の心配ばかりしている余裕もない。

「元々その端末で大型サーバー全部のデータを収めんのは不可能だ。それよりサーニャ、出てきたデータの中から読み取れるものはあったか？」

「大半は壊れているわ。そもそもファイルを開けない。ソフトの方で認識できないレベルになってる」

「一度、二進法のデータに変換して穴埋め推測プログラムを通すんだよ。データパターンで大雑把な輪郭だけでも出てきてくれる」

サーニャが指示通りの操作を行うと、ようやく読み込める形式に変換される。

文章の半分近くは文字化けしていて、画像データも乱れていたり、配色が原色だらけのサイケデリックなものになっていたりするが、かろうじて読める部分から、これがどんなファイルであったかは予想を立てられる。

「『ブロードスカイサーベル』の整備用ファイルだ」

「惜しいわね。ある程度の図面もあったようなのに……」

「設計図一式じゃなくて『機体を整備するための』ファイルだとすれば、ここにあるのはあくまでも地上のオブジェクト本体だけだ。軌道上にある主砲ユニットのデータは必要ねえ」

「これがディミクシの消したがっていたもの？」

「さあな。とにかく読み込むしかねえ」

と、ソギアの持つ無線機から電子音が鳴った。

通信相手は『物資』の方を見て回っているマルスだった。

『いくつかの砲と装甲のスペアが出てきたっす。やっぱり腐ってもオブジェクトの部品、瓦礫が覆い被さった程度じゃ完璧には壊せなかったみたいっすね！』

「ディミクシの弱点に繋がるような何かは？」

『まだ何も。ただ、ハンガーの瓦礫の中からやけに頑丈なコンテナが見つかったっす。コンテナっていうより馬鹿デカい移動式の金庫って感じっすかね。今、フラットが電子ロックを熱暴走で無力化しようとしているっすけど、セキュリティに勘付かれたら緊急ロックがかかるリスクは捨てられないっす。「中身」に関するデータはなんかないっすかね!?』

サーニャは首を横に振った。

特別な何かが見つからない、というのではない。

逆だ。

「『第三世代』なんて呼ばれている最新型よ。どれもこれも機密だらけで価値は高騰している。判断なんてできないわ」

「マルス、コンテナのサイズは？　中に収まる程度のパーツを片っ端からリストアップする」

『えーと、一辺五メートルの立方体って感じっすね。船で運ぶタイプじゃなくて、輸送機に乗せる航空貨物用じゃないっすかね』

「五メートル、どうだ？」

「ざっと見ても二〇〇以上ある」

『……おっ、やった、開いた！　開いたっす！　フラットお手柄！　中には……何だこりゃ？』

「マルス、報告しろ！　分からなければ携帯端末のカメラで映像を送信するんだ！」

『紫外線シグナルだ』

何かの機材を摑んだのだろう。

無線機の向こうから、ゴトリという硬い音が聞こえる。

『モールスみたいな点滅をプログラムで実行できる、強力な紫外線シグナルっす！　これ、軌道上の爆撃で友軍を撃ち抜かないようにするためのセーフティじゃないっすかね!?』

19

一方その頃ヘイヴィア＝ウィンチェルは本格的な浸水が始まったフロートの地下構造の中で割と真剣に死に掛けていたが、誰も気に留めていなかった。

「がばごぼっ!!　こ、こんなのはスターが辿る展開じゃねえ!!　げほっ、げほっ、本日の美女はどこだー!?」

もはや走る事を諦めて、半分ほど海水に満たされた通路の中を泳ぎながらヘイヴィアは出口を目指す。だが浸水の勢いの方が凄まじく、どんどん空気のあるスペースは減っていく。おまけに水は『出口から内部へ』流れてくるため、ヘイヴィアからすれば川の流れを逆流するようなものだった。とてもではないが出口まで届かない。

しかし幸運の女神は時々（すげーシニカルに）微笑む。

ガグン!!　という重たい震動と共に、突然間近の壁に亀裂が走った。水の浸食がさらに増す、

と身構えるヘイヴィアだが、事態はそれどころではなかった。
数キロ四方のフロートの三分の一ほどが、ＥＣＭ施設を狙った『ブロードスカイサーベル』の砲撃に耐えられずにボッキリと折れる。
ちょうどその亀裂近辺にいたヘイヴィアは大量の海水に翻弄され、ぐるぐると回り、しかし気がつけばフロートの外の海中へと放り出されていた。
折れた『三分の一』はバランスを崩して海底へと突き進んでいく。
あちらに残されなくて良かった、と心の底から思い、ヘイヴィアは海面を目指す。不意に投げ出されたため、口の中の酸素は残り少ない。
酸欠で頭の中がガンガンに痛むが、それでも何とか海面に顔を出す事ができた。
「ぶはっ!!　くそ、何だ!?　久しぶりに空気を吸えると思ったらサウナみてえに超暑い!!」
そこへ破片だらけの海をかいくぐってクウェンサーが近づいてきた。
「よおヘイヴィア、やさぐれてる？　メイドさん一丁お待ちー」
「さんきゅーナイト様！　何このタイミング。雪山の遭難から帰還して一発目に食べる塩バターラーメンみてえ！　価値が跳ね上がってる！　これスゲー癒されるわー!!」
「……何やら、不埒な妄想で嬲られている気がするのですが……」
ミクファが獣でも見るような目で馬鹿二人を睨むが、概ね間違ってはいないので二人は特に反論をしない。『正統王国』男子として、メイドという単語を聞いて思い浮かべる内容の半分

は不埒でなければならないのだ。

「それよりヘイヴィア、グレネード持ってるよね」

「どこを狙って何のために撃つんだよ!?　『第二世代』なんてピッカピカの最新兵器に通用するようなもんじゃねえぞ！」

「爆発力なんて期待してないよ。ミクファ助ける時に言ってたよね。グレネードの大半はシグナルマーカーで、オブジェクトに照準情報を渡してピンポイント砲撃してもらうためのものばっかりだって。それが必要なんだ。紫外線マーカーってある？」

「あるにはあるけどよ。誰とコンタクト取る訳？」

クウェンサーはヘイヴィアからアサルトライフルを奪い取り、銃身下部に取り付けられているグレネード砲に、紫外線マーカーの砲弾を差し込んでいく。

しかし、

「えー、なに!?　ライフルってこんな重いの!?　立ち泳ぎじゃがばげぶ……!!」

「はっはっは!!　何やってんだクウェンサー、テメェ自殺しに来たのかよ!?」

「ああもう!!」

全身の毛を逆立てた下女のミクファが慌てて海中に潜り、沈みかけたクウェンサーを引き上げて、自分が使っていた浮き輪代わりの破片を摑ませる。

「ステイビア様の命がかかっているんです！　ギャグなら後にしてください!!」

「げぶっ、な、なあヘイヴィア。メイドさんに罵られるって経験はレアだと思うか？」

「『本国』にいた頃なら毎日だったぜ？」

キョトンとした顔のヘイヴィアだったが、そこで気づく。

浮き輪代わりの破片に上半身を乗り上げたクウェンサーは、ライフルと合体しているグレネードを『ブロードスカイサーベル』ではなく、ステイビアの乗る『アサルトシグナル』に向けているのだ。

「へい、何だ!?　この局面でディミクシにでも鞍替えする気か!?」

「違うね」

クウェンサーは引き金を引いて紫外線マーカーを発射する。缶コーヒー程度の大きさの塊は野球の遠投のように上空へ飛ばされ、小さなパラシュートを開いた。

「なあヘイヴィア。『ブロードスカイサーベル』って面倒な仕組みのオブジェクトだと思わないか？」

「あん？」

怪訝な顔をするヘイヴィア。

クウェンサーは空の薬莢を取り出すと、さらに追加の紫外線マーカーを砲身へ差し込んでいく。

「地上の本体と衛星軌道上の主砲。一見すれば確かに新しい機構の兵器だ。でも、いちいちエ

ネルギーを地上で作ってから宇宙へ運搬するなんて面倒臭い。だったら衛星軌道上の主砲にJPlevelMHD動力炉を直接搭載しちゃえば良いんだ。……にも拘らずディミクシはそうしなかった。何故？」

「何故って、そりゃあ……」

クウェンサーが上空に向けてさらにグレネードを飛ばすのを見ながら、ヘイヴィアは考える。クウェンサーが紫外線マーカーを発射したのは『アサルトシグナル』ではなく、全然別の、何もない上空だった。

「そもそもディミクシが用意したのは『御前試合』を成功させるためのオブジェクトだろ？だったら、ルールの関係上、ディミクシは現場にいなくちゃならねえ。『衛星軌道上のオブジェクト』じゃ場外判定になっちまう」

「それもある。でも、だったら地上の本体を用意した上で、衛星軌道上の主砲にも動力炉を積んでしまうって選択肢もあったはずだ。だって、『一機のオブジェクトは一基の動力炉しか積んではいけない』なんてルールはないんだから。現に俺達は三基も使った『トライコア』と対決した事だってあるんだ。でもディミクシはそれをしなかった。数秒間隔でレーザー砲撃ができていれば、今頃ステイビア王女はおろか、世界を降伏させる事だってできたかもしれないのに。何故？」

「……開発費用以外に、何か理由があるってのか？」

「単純な事さ」

クウェンサーは立て続けに何発も紫外線マーカーを飛ばしながら言う。

「ディミクシは最強の兵器を手に入れた。でも同時に、自分で作った兵力を自分で恐れた。軌道上の『天空の剣』に砲撃手を乗せたら裏切られるかもしれない。完全プログラム制御にしたって、ハッキングなんかで横槍を入れられたら、ディミクシ自身が撃ち抜かれるかもしれない。だから『軌道上の主砲だけで独立運用できるような、完璧なシステム』は作りたがらなかった」

「回りくどいエネルギーの運搬システムは、安全装置の一種だったってのか？　たとえ乗っ取られても、主砲を撃つためのエネルギーがなければ暴走や裏切りの心配はねえ。最後のキーをディミクシが握るために、『一発撃つごとに一発分のエネルギーを運搬する』装填機構を作った……」

「そんな『大胆で臆病な』ディミクシなら、安全装置はいくつも用意する」

クウェンサーは一通り、パラシュートで上空に多数の紫外線マーカーを配置させると、満足そうに笑う。

「例えば照準の緊急回避システム。ついさっき、フライトバーグ空軍基地のユニコーンからコンタクトがあった。ディミクシは『天空の剣』がいざハッキングで乗っ取られた時も、紫外線マーカーで特殊な信号を発する座標だけは攻撃できないように、独立した緊急回避システムを

導入しているらしい。奪われた自分の剣で自分の体を貫かせないためにな。発射停止プロセスの回避アクションが間に合わない時は、マーカー位置から離れた場所へとにかく照準をずらすんだとさ」

ジジッ！　とクウェンサーの無線機からノイズが聞こえたのはその時だった。

聞き慣れない男の太い声が届く。

『ユニコーンより親愛なる友人へ。紫外線マーカーの信号パターンを口頭で伝える。入力を間違えるなよ』

「アンタの協力には感謝するが、後で金玉蹴り上げてやる」

クウェンサーは報告通りのナンバーを無線機に入力していき、パラシュートで漂う強力な紫外線ライトを、一定の法則で点滅させる。人の目には見えない光の瞬きが、衛星軌道上の兵器へ確実な信号を届ける。

ギュイ!!　と『ブロードスカイサーベル』のカメラのレンズが一斉に音を立てた。紫外線が放たれた事で、ようやく周囲に漂うものの正体に気づいたらしい。

「もう遅い!!　緊急回避システムは自動的に照準情報を再入力して『安全に回避』させる。自分で撒いた種だ。アンタ自身の剣でケツでも貫かれるが良い!!」

「ただ回避させるだけじゃねえ。上手く誘導して『ブロードスカイサーベル』を狙おうってのか!?」

ヘイヴィアはようやくクウェンサーの意図を知って唖然とする。

その上で彼は否定した。

「だが無理だぜ！　『ブロードスカイサーベル』自身が紫外線ライトを備えてんだろ!?　どんなに紫外線マーカーを布陣したって、あの『第三世代』を誤射するようには仕向けられねえよ!!」

「そうでもない」

クウェンサーはいらなくなったアサルトライフルをヘイヴィアへ押し付けると、右手で鉄砲の形を作って『ブロードスカイサーベル』を指し示した。

より正確には、球体状本体の後部にある、レーザー式軌道エレベーターの鉄塔の先端を。

「ユニコーンから情報をもらったって言ったろ。整備用の図面によると、ヤツの紫外線ライトは鉄塔の上に設置されているらしい。弱点の露呈を防ぐため、ディミクシが後から急造でつけたんだと。情報を守ろうとしたようだが、耐久性はガタガタだ」

そこでヘイヴィアは見た。

『ブロードスカイサーベル』の球体状本体からあちこちに延びている砲の先端に、ぼんやりとした青白い光が揺らいでいるのを。いいや、砲だけではない。突起という突起の先端が輝いている。当然ながら、エレベーターの鉄塔の先端も。

「セントエルモの火。周囲の帯電が生み出した、先端放電現象の一種さ。そして先に『天空の

剣』の砲撃を受けたフライトバーグ空軍基地ではこんな現象に見舞われたんだと。セントエルモの火が確認された直後に、そこらじゅうで立て続けに落雷があったってさ！」

発射準備のための七分間の猶予が完全に消失する。

直後だった。

凄まじい閃光と共に、レーザー式軌道エレベーターの鉄塔へ、青白い雷光が真っ直ぐ突き刺さる。空気を割るような轟音が炸裂し、高圧電流を通す電線が千切れたように、オレンジ色の火花をあちこちへ撒き散らす。

思わず身をすくめるミクファと対照的に、クウェンサーの顔には不敵な笑みがより広がる。

「セントエルモの火に代表される先端放電は、避雷針にだって応用されている。そしてこの戦場で最も高いものは何か。それを考えれば、どこに雷が落ちるかなんて考えるまでもないよなあ!!」

そして一時的にでも『ブロードスカイサーベル』の紫外線ライトが機能不全を起こしてしまえば、『天空の剣』はそれをどう認識するか。

交戦区域のあちこちには、『絶対に攻撃してはならない』紫外線マーカーの信号がびっしり。

そんな中に『ぽっかりと開いた』唯一の場所。

『天空の剣』は。

プログラム通りに『ブロードスカイサーベル』へ迷わず砲撃する。

ゴッ!!!!!　という爆音が炸裂した。

その時、とっさに『ブロードスカイサーベル』は高速で回避行動を取ろうとしたようだったが、無傷では済まなかった。

『天空の剣』から放たれた高出力レーザーはエレベーターの鉄塔を掠め、ねじ曲げ、強引にオブジェクトの球体状本体からむしり取った。オレンジ色の光点が空中を漂う鉄塔の残骸に集約されたところで、

「ヘイヴィア！　潜れ!!」

クウェンサーはミクファの襟首を摑んで強引に海中へ頭を沈める。

直後に超高温にさらされた空気が爆発的な膨張を開始した。あまりの速さに、衝撃波の壁にも近い空気の塊が全方位へと撒き散らされていく。

数キロ四方を呑み込む炸裂。

水がクッションになってくれたせいか、クウェンサー達は衝撃波と熱風の両方から、かろうじて命を救われる。

しかし炸裂時に海水も揺さぶられたせいか、ドラム缶の中に詰め込まれて金属バットで殴られるような鈍い痛みが全身に走り回る。

「ぶはっ!!」

慌てて海面に顔を覗かせるが、空気はカラカラに乾燥していた。サウナの中に放り込まれたような感じで、吸い込むと喉がひりつく。

同じように何とか生き残ったヘイヴィアが叫ぶ。

「『ブロードスカイサーベル』は!?」

「深手は負っているはずです。ですが……!!」

要のレーザー式軌道エレベーターは失われたが、まだ沈まない。

エレベーターの鉄塔を搭載する関係か、『ブロードスカイサーベル』の重心はかなり高い位置に設定されている。当然、それがむしり取られたのだから、重心の位置も大きく変わっているはずだった。

普通なら横転してもおかしくない。

だが『ブロードスカイサーベル』は耐える。

高速移動はしなくなったが、それでも、まるで綱渡りで体を左右に振るような格好で、ギリギリのラインでバランスを保持している。

そうしながら、『ブロードスカイサーベル』は動けない『アサルトシグナル』へ向けて、六門の砲を向けた。立て続けに砲撃していくが、やはり主砲ではないためか、『アサルトシグナル』を吹き飛ばす事はできなかった。

そしてエレベーターが失われた以上、『天空の剣』にエネルギーを送る手段は失われた。

「勝った、んですか……？」

「ステイビアはな。だが腹いせに俺らが撃ち抜かれかねねえ状況だぞオイ!!」

『天空の剣』の砲撃の余波で、周囲に広がる波は高い。しかし『ブロードスカイサーベル』の照準がズレる見込みはほとんどないだろう。オブジェクトはそんなに甘い兵器ではない。

その砲の狙いも明確。

クウェンサー達を睨むように、照準用のレンズが拡大、縮小を繰り返す。

勝ち目はない。

オブジェクトを吹き飛ばすほどの火力がないのだから、一方的に攻撃を受けるしかない。

そしてどんな攻撃であれ、オブジェクトから一発もらえば生身の人間など粉々だ。

「……何も考えていないとでも思うか？」

ただし。

クウェンサーだけが笑っている。

あるいは、こんな状況では怒りにまみれたディミクシさえ笑みが消えているかもしれないのに。

「『天空の剣』に干渉したのは、単に共食いをさせるだけじゃない。あれだけの大きな結果を生み出せば、それが目的だって錯覚する。攻撃は終わったんだと安心する。だから見過ごす。

……俺が設定したもう一つの目的を。大量の紫外線マーカーをばら撒いたもう一つの狙いを」

彼は無線機のボタンに親指を掛けていた。

ヘイヴィアはさんざんそれを見てきた。プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を吹き飛ばそうとする時の、クウェンサーの癖のようなものだ。

しかし今回は違う。

爆弾はどこにも設置していない。そして彼の親指は、こうしている今も一定の規則に従ってボタンを押し続けている。

連動しているものは一つ。

海の上に浮かんでいる、紫外線マーカーだ。本来は衛星軌道上の『天空の剣』に信号を送るために利用されていたが、それが終わった後も、クウェンサーはボタンのオンオフで規則性のある信号を生み出し続けている。

最初から、『天空の剣』狙いだけではなかったのだ。

大量の紫外線マーカーに紛れ、別の場所へ信号を送るためのマーカーも発射していたのだ。

では、それはどこに？

「……こっちには『正統王国』でもトップランクに属する設計士が味方についているんだぞ。そして彼女が自ら設計したオブジェクトも」

「『アサルトシグナル』……ですか？」

「そして『アサルトシグナル』には、公式設計図には記載しないで組み込まれたいくつかの技術があったんだとさ。データベースばかりチェックしていたディミクシ派は気づかなかったんだろう。そいつは特定の信号さえ受信すれば、いつでも起動するって事を」

動けないはずのオブジェクト。

『アサルトシグナル』。

本来であれば、操縦士エリートが機内で気絶した時などにゆっくりとバランスを取り戻すための、遠隔操縦システム。

戦場の真ん中でその窓口を開いたクウェンサーは、無線を通して南の島へとこう告げた。

「親愛なる戦友へ。勲章ならくれてやる」

クック追加諸島、研究施設の角にある自販機コーナーで、クレア＝ホイストはぺたりと座り込んでいた。床に置いたノートパソコンには有線のケーブルが取り付けてあり、それは何か巨大な機材と繋がっていた。

普段は複雑に折ったプラスチックの板として、部屋の隅に転がしてあるもの。

かつて、操縦士エリートのエクセルシーラを守るために作った遠隔操縦システムは、大型ロボットゲーム用の巨大なコントローラーのように、クレアの周囲に大きく展開されている。

本来であれば、機体を立て直すだけでも、数十人から一〇〇人以上の人員を必要とする程度の装置でしかない。

とてもではないが、オブジェクト同士の高速戦闘などについていけるものではない。

しかし。

今、アマゾン方面にいる『ブロードスカイサーベル』はエレベーターの鉄塔を破壊された関係で重心が大きく崩れまともに移動する事もできず、残った砲では『アサルトシグナル』を破壊するだけの火力も確保できない状況だ。

つまり。

操縦に関しては素人のクレアが、一つ一つ指差し確認しながらコマンドを入力していっても、主砲の斉射でディミクシ＝ニコラシカをぶち抜く事ができる。

「……エクセルシーラ」

操縦桿にも似たレバーを片手で操り、引き金に似たボタンへ人差し指を掛けながら、クレアはポツリと呟いた。

その顔には、どこか寂しそうな、それでいて、明確な笑みがある。

「安心しろ。お前の命は守れなかったが、せめて尊厳ぐらいは守ってやる」

そして。

数千キロ離れた戦場で、歴史を左右する一発が放たれた。

その瞬間を、『ブロードスカイサーベル』に乗るディミクシ＝ニコラシカは理解できなかっただろうか。それとも、理解はしていたが、エレベーターの鉄塔を破壊された現状では、どんなに努力しても危機を脱する事はできなかったか。

どちらにしても、結果は同じだ。

『アサルトシグナル』に搭載された主砲から、凄まじい閃光と爆音が発せられた。『御前試合』の構図に難癖をつけられるのを避けるため、相手の機体もきちんと整備していたのは明らかに失敗だっただろう。

身動きの取れない『第三世代』の右手側側面に、容赦なく下位安定式プラズマ砲の閃光が突き刺さる。

分厚い装甲の内部にまで閃光は潜り込んでいく。内部機構を破壊していっているのだろう、『ブロードスカイサーベル』をかろうじて海に浮かべていた機構が完全に停止した。斜めに傾きながら、超大型兵器がずぶずぶと海中へ沈み始める。

そしてクウェンサー達も絶叫していた。

勝利の雄叫びではない。

ぶっちゃけ目が潰れるかと思った。

「ぎゃあーっ!!　敵も味方もオブジェクトってヤツはこれだからーっ!!」
「クウェンサーあああああああ!!　味方に撃たせるって分かってんならもったいぶってねえで教えやがれ!!　そうすりゃ溶鋼用の保護グラスとか探し回ったってのによお!!」
もがくディミクシを、権力の亡者を、地獄の底へと引きずり込むように、海は冷徹に超大型兵器を完全に呑み込んでいく。
両目の痛みが取れない内に、クウェンサーは指を鳴らして告げる。
「へっ。『第二世代』は確かに強力なオブジェクトだったかもしれないけどさ。そもそもオブジェクトってのは、どいつもこいつも怪物だってのを忘れていたようだな。軽く見て良い機体なんて一つもないんだよ」
格好良く決めたところで、ふとミクファが呟いた。
「で、沈没地点から勢い良く迫る大波はどう回避すればよろしいのでしょうか？」
「あわー!!!??」

20

フライトバーグ空軍基地、正確にはもはやその跡地で『ブロードスカイサーベル』の破壊と、『御前試合』の勝敗を無線で確認したソギアは、瓦礫の上に腰掛けて太い葉巻を口に咥えた。

「……火がねえな。さっきまでそこらじゅう燃えてたのによ」
人工的な豪雨はまだ続いているため、ライターで火を点けようにも上手くいかない。そんなソギアを見て、呆れたようにサーニャが言う。
「吸っている場合？　そろそろ堅物さんがやってくると思うけど。これだけ派手にやったら流石に感知されるでしょうし」
「そいつらと顔合わせる前に一服しておきてえんだよ」
しかし、ソギアのそんなささやかな願いは叶わない。
バタバタバタバタ！　という空気を叩く音が聞こえてきた。頭上を見上げると、輸送用の大型ヘリが近づいてくるところだった。ソギアが火の点いていない葉巻で適当にサインを送ると、マルスとフラットが比較的瓦礫の少ない位置で発煙筒を着火させる。
大型ヘリは誘導に従って着陸した。
多数の護衛に囲まれて降りてきた人物に、ソギアは心当たりがあった。
まだ第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーと呼ばれていた頃は、上司にあたる人物だった。
「何だ何だ。近衛の元帥サマがわざわざ現場なんかにやってきて」
「顔は変えたようだが、滅らず口までは変えられなかったようだな」
元帥と呼ばれる老人が指を鳴らすと、護衛の一人が真空パックされた葉巻を取り出し、速やかに火を点けてソギアに渡してきた。

「へっ、馬鹿なヤツ。こんなもんまだ覚えていやがったのか」
文句は言うものの満足そうに煙を吸うソギアを眺めながら、元帥は口を開く。
「ディミクシ＝ニコラシカの沈没を確認。それに伴って水面下で蠢いていた彼の派閥が動揺している。その揺らぎを検知し、今こちらで一斉検挙しているところだ」
「あっそ」
「衛星軌道上にある『ブロードスカイサーベル』の主砲は機能停止。今、月面から飛ばした部隊が回収を始めている。補助のブースターをつけて、ちょうど接近してきた小惑星に大質量を叩きつけ、軌道をねじ曲げるために使い捨てるそうだ。……何しろ宇宙空間に領有権はないからな。放っておくと他勢力がテクノロジーを奪いに来るかもしれない」
「そもそも、世界は『第三世代』の登場で時代が急速に変わってしまう事を望んでいない、って訳か。……ふん、クレア＝ホイストが言っていた『悪い予感』の通りだな」
「少なくとも、『今』のところはな」
元帥の言葉を受けて、ソギアは退屈そうに呟く。
「ディミクシ張本人は？」
「血統局に混じった異分子を排除した時点で、彼がＤＮＡ情報を詐称していた事も判明した。が、公にしても良い情報かは一軍人の判断するところではない。沈没したディミクシの生死は不明だが、敢えて救助せずに確実な死を待つという可能性もあるだろう」

「……その場合、ディミクシ＝ニコラシカは『御前試合』で戦死した、勇気ある『王族』の一員として葬られる訳か」

ソギアは軽く煙を吐く。

「ニコラシカ王家としても、『正統王国』全体としても、それが一番好ましいって訳だ。血統からは外れている疑惑があり、好戦的な陰謀ばかり張り巡らせる厄介者。周囲からパージを望まれてもおかしくない。アンタ達は俺達の活躍を期待していた。違うか？」

「不満かね」

「どっちでも良いさ。……あの泣き虫さえ無事ならな」

そもそもにおいて、ソギア、サーニャ、マルス、フラット達ユニコーンの目的は、並居る強敵を倒してステイビア＝ニコラシカを女王の座に就かせる事ではない。

王位継承の問題から、彼女の命を守る事。

安全に回避するためなら、敢えて『勝負から降りる』ように仕向ける事すら厭わない。

仮にステイビアが本気で王位を求めている場合、彼らユニコーンはステイビアの敵に回る可能性すらありえるのだ。

……もっとも。

その手の我欲が少ないからこそ、ユニコーンは彼女のために命を張ろうと決意した訳ではあるのだが。

元帥と呼ばれる老人は、瓦礫の上に座るソギアを見下ろしながら言う。
「君達がやった事はおそらく正しい。少なくとも私は胸を張って証言しよう」
だが、と老人が明確に言葉を区切って、
「それでも、第一一五独立近衛中隊ホワイトベアーの全滅を詐称した時点から、君達が多くの軍規に反した行動を取っていた事は間違いない。『正統王国』の連合法では『王族』への反逆者の殺害が罪に問われる事はない。叙勲もあるかもしれん。しかし下準備をダーティに進めすぎたな。それについては私情を抜きにして軍法裁判で公正に裁く必要がある。反逆阻止の戦功と天秤に掛けても、足が出る公算は大きい」
指を小さく振り、葉巻の先端の灰を落としながら、ソギアは小さく笑う。
「覚悟もなく、こんな事していたと思うかよ？」
「営倉送りは避けられんぞ」
「いつもの事だぜ。近衛にいた頃から良くぶち込まれてたろ」
ソギアは適当に言って、周囲にいた仲間達に声をかける。
「聞いたか野郎どもー。そこの元帥サマが国民の血税を使って『ホテル』までご案内してくれるってよ！」
「メシさえまともなものが出るならどこでも良いっす！」
「檻の中で豪華なご飯が出たら警戒するべきじゃない？　死刑執行前夜って感じよね」

「……格子付きでも窓さえあれば、レーションのくずで鳩を誘い込めます。皆さんの食事は僕が確保しますよ」

ぎゃあぎゃあと言い合うユニコーンの面々を見て、元帥はわずかに顔をしかめた。恐怖を感じない者に刑罰など何の意味も持たないのだ。

元帥は周辺の護衛部隊に、ユニコーンを拘束するよう命令した。しかし彼らは手錠など使わなかったし、銃口を向ける事もなかった。そこには完全な『敬意』がある。おそらく、ここ数週間はバーでの話題はこれ一色になってしまうだろう。

馬鹿が真似しないよう切に願う、と心の中で呟きながら、元帥は尋ねる。

「軍法裁判まではこちらの権限で拘束させてもらおう。その前に、ステイビア王女に会っておかなくても良いのか？」

「馬鹿野郎。こういうのは何も言わずに立ち去るからサマになるのさ」

「言うと思った」

元帥は初めて、いかつい顔に悪意のある笑みを浮かべた。

「だから無線で指示を出しておいたよ。ステイビア王女をここに連れて来いとな」

「てめっ、このクソジジィ!!」

ソギアは慌てて食ってかかろうとしたが、もう遅い。

複数の護衛車両に守られたオフロードカーが空軍基地の敷地内に入ってきた。下女のミクフ

ァが先に降り、後部のドアを外から開けると、中からステイビア＝ニコラシカが降りてくる。最後に見た時はくまのぬいぐるみより小柄だったはずだが、三年も経つと随分と女性らしくなったものだ。

ミクファが傘を差すのも待たず、ステイビアは一直線にこちらへ走ってくる。

そして彼女は第一声でこう言い放った。

「ん？　んん？　どれがユーレンザックですか!?」

「……そーいや全員整形していたっすよね」

『王族』からの命令なので逆らう事はできず、今までソギアという偽名を使っていた男は素直に片手を上げた。

完全に照準を定めたステイビアは、今度こそ一直線に彼の元へと突っ込んでいく。

抱き着くかな、と他の全員が予測した。

しかしステイビアはソギア改めユーレンザックの股間を思い切り蹴り上げた。

メシィ!!　という轟音と共に百戦錬磨の大男は前屈みになり、マルスとフラットが悲鳴を発し、何故か女のサーニャまでもが顔をしかめ、元帥と呼ばれる老人でさえわずかに目を逸らした。

全ての力を使って痛みを堪えるユーレンザックは、視界の端で嫌なものを見た。

彼女を乗せてきたオフロードカーの車内に、自分が今までさんざん利用してきた馬鹿二人が

待機していた。彼らは舌を出していたし、金玉を蹴り上げると犯行予告までされていた。

（あの野郎……!!）

完全に台無しにされたところで、今度こそステイビアが抱き着いてきた。正直に言って体内を渦巻く激痛のおかげでどうにもならない状態だったが、ステイビアが小刻みに震えている事、原因は彼女が泣いている事など気づいて、ようやくユーレンザックは小さく頭をかく。

単に、自分の命が狙われ続けてきた事の恐怖がぶり返したという訳ではないだろう。

三年も前に消えたはずの部隊と、仲間と、もう一度再会できたために、彼女の涙腺は緩んでいるのだ。

言いたい事はあるが、時間がない。

目的が何であれ、軍規に反した行動を続けてきた彼らユニコーンは、然るべき処置を受ける必要がある。

だからこそ、ユーレンザックは抱き着いてきたステイビアの肩を摑み、体から離し、腰を折って目線を合わせると、短い言葉でこう告げた。

「おいおい、一体いつまでメソメソ泣いてやがる。もうそろそろ笑う番だぜ」

Hey baby, How long will you stop crying. You will be smile soon

終章

一見丸く収まったようには見える。
しかしクウェンサーとヘイヴィアは結局どうなったのか？

「むあー……。やっぱり煙草は和モノに限るなあ」
第二七機動整備大隊。一〇〇台以上の大規模な車両団で構成される整備基地ベースゾーンの士官室で、フローレイティア＝カピストラーノは細い煙管に口をつけていた。
さて、今頃あの馬鹿二人はどこで何をやっているのやら。
操縦士エリートのお姫様辺りはしきりに動向を気にしているようだったが、実を言うとフローレイティアはそれほど気にしていなかった。
というか、正直に言って連中は酷使されすぎである。
一時的に干されるという建前ではあるが、立て続けにオブジェクトと生身で戦わされてきたこれまでの激戦に比べれば、どこだって天国ではないだろうか？　オブジェクトの整備技術を

現場で入手する、『貴族』として相応しいように武勲を立てていく。これらの目的を果たせない訳でもないので、左遷と言っても彼らの出世街道が途切れるという訳でもないのだし。

（……ま、プライドをボッキリ折られて扱いやすい人間像に変わっていれば申し分はない訳なんだが）

そもそも、オブジェクトが作り出す『クリーンな戦争』において、そんなものが通用しない戦場や業務があちこちに散らばっている事自体、その手の跳ねっ返りを再教育させるための場を残しておく、という意味合いもあったりする。

何事にも緊張感は必要だ。

たるみすぎると戦場で犯罪やって一儲けしようなんて考える輩も出てきかねない。

（ここのところ退屈ではあるのだが……本来ならこれが正しい戦争の形だよな）

ペンタブレットでラインを引いた通りにオブジェクトが砲撃を行い、狙った通りのコストで狙った通りの戦果を提示する。

驚きも逆転もない戦争。

あくびが出るような戦いだが、その砲撃結果を示すレポート画面の上に、小さなウィンドウが新しく表示された。

他の整備基地にいる、同等の佐官クラスを集めて行われるネット会議を知らせるものだ。

フローレイティアは予定を消化するだけの戦争のレポートを消し、ネット会議用のアプリケ

ーションを起動させる。

本来であれば二〇人前後で同時に行われるものだが、今は一人しか参加していなかった。顔見知りの若い女性の中佐がハンカチで汗を拭いながら言う。

『あ、あのー、カピストラーノ少佐。ご存知ですか、例の話？　今回の議題になりそうですので先にお伝えしておきたかったんですけどー』

「中佐、年齢も階級もあなたが上です。その言動ではこちらが困ります」

『い、いえいえ！　わたしなんてとてもとても！　少佐がいなければわたし一人だけでなく、わたしについてきてくれた部隊の全員が今頃大西洋の藻屑になっていたはずなんです！　ですから階級などは関係なく……』

思わず頭を抱えるフローレイティアだったが、カメラ機能をオンにしていたのを思い出し、慌てて背筋を伸ばす。今のは不敬とみなされてもおかしくない失態だ。

しかし間に合わなかった。

画面の向こうの中佐は涙目になっている。

「中佐。それで例の話というのは？」

『それ、それなんですけど』

中佐はハンカチで涙を拭きながら、

『少佐の元で働いていた、クウェンサー＝バーボタージュ、ヘイヴィア＝ウィンチェルのドラ

ゴンキラー二人組についてです』

その呼び方もなあ、と週刊誌系サイト丸出しなネーミングについて、フローレイティアは思うところがあるのだが、口に出すと上官がわんわん泣き出しそうなので黙っておく。

代わりに彼女はこう尋ねた。

「……このクラスの会議で話題に上るという事は、まさかあいつら、飛ばされた先でも何か問題を？」

『あ、はい。もうご存知でしたか？』

またもや頭を抱えそうになり、必死に自制するフローレイティア。

しかし予想は彼女の上をいった。

『なんか、ニコラシカ王家の継承問題にまで干渉したらしくて。もうどこの部隊でも手に負えないっていうんで、たらい回し先が見つからないそうです。下手に除隊させても他勢力に亡命されて面倒臭い事になりそうですし、仕方がないから元の三七に押し付けようって……』

あとがき

そんな訳で六冊目。そろそろまとめ買いに勇気がいる物量になってきたでしょうか。

鎌池和馬です。

今回はクウェンサーとヘイヴィアの二人組があちこちに左遷されまくって、『いつもの戦争』の枠組みの外へと放り出される話にしてみました。巨大な金を動かしてオブジェクトの運用さえ指先で左右する『一番上に近い戦争』と、たとえ死んでも公式の戦死者として登録すらしてもらえない『一番下に近い戦争』を同時に出してみました。……皆様はどちらが嫌だと思ったでしょうか。

そして、『ついに』というか『やっと』というか、ようやく『正統王国』のてっぺん、『王族』の面々を出す事ができました。

『平民』の雑兵なんぞ何百人殺しても問題なし、でも『王族』一人を暗殺するためには死ぬほどお膳立てしなくてはならない……という辺りに、『主人公サイドも主人公サイドで社会基盤が歪みまくってやがる！』と思っていただければ。

てっぺんが出てくるならてっぺんが乗るに相応しいオブジェクトを用意せねば、という訳で、他勢力の『トライコア』の技術を解析して発展させた『ブロードスカイサーベル』の登場です。

レーザー式軌道エレベーターという単語は『採用戦争』でも出てきましたが、モノ自体は今回が初登場ですね。『エレベーター』と名のついているものの、物理的なワイヤーで繋がっている訳ではないので要注意。似たような技術は実在するので気になる方はチェックしてみてはいかがでしょう。実験段階では、ワイヤーのガイドをしてもらっているようですけどね。

『第三世代』の名に恥じないインパクトは出せたでしょうか？

……ただ、何事においても『完璧な機体』というのは存在しません。今回の『ブロードスカイサーベル』も、『採用戦争』に出てきた『ブレイクキャリアー』同様、超長射程の性として照準関係がネックとなっています。雑誌の短編に登場した『ストラテジックアンテナ』などとは相性最悪となるでしょうね。

おそらく一冊でも読んでいただければ分かる通り、ヘヴィーオブジェクトの世界観は基本的に勧善懲悪が全く通用しない、クソッタレな世界です。

そんな中で『正義』を貫くのはさぞ大変だろうなあ、という訳で、今回お株を奪った『彼ら』には二年越しで泥沼の道を進んでもらいました。

イラストの凪良さんと担当の三木さんには感謝を。左遷されまくりという話ですので必然的にキャラ数も多くなってしまって、ご迷惑をおかけしたと思います。今回もありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。デカい兵器を生身でぶっ壊す、それだけの爽快感から始まったこの作品も、あっちこっちに寄り道しながら六冊までやってこれました。これからも爽快感の追求をしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは今回はこの辺りで。

この一冊がささやかな糧となる事を願って、筆を置かせていただきます。

二章のレーザーオブジェクトの撃破方法については皆様への問題という事で

鎌池和馬

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　死の祭典」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト 第三世代への道

鎌池和馬

発行　二〇一二年六月十日　初版発行

発行者　高野 潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇二―八五八四 東京都千代田区富士見一―八―十九
電話〇三―五二一一―六―八三九九（編集）
http://asciimw.jp/
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二―八一七七 東京都千代田区富士見二―十三―三
電話〇三―三二三八―八六〇五（営業）
装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書のコピー、スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。なお、代行業者等に依頼して本書のスキャン、電子データ化等を行うことは、私的使用の目的であっても認められておらず、著作権法に違反します。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

© 2012 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-886624-8 C0193